

ル現象ヲ生ス、二人ノ専吏ハ一人ノ能吏ニ如カス、故ニ官吏ノ俸給ハ取ニ於テハ少クシモ其ノ實ハ厚キニ失スルニ至ル、

又官衙ノ庭ツルニモ敷半ヲ至テ庭ニ設テテサルニ至ル、然令庭狭少クシモ其ノ實ハ厚キニ至テ庭ニ設テテサルニ至ル、故ニ至費支出ハ節約主義ニヨルト全時ニ入スハ庭ノ價ヲ海ヘテ徐ロニ之レヲ是メサルヘカラス

國家ノ積分ヨリ至費ノ節約定マリ、財政ノ至費主義ニヨリテ至費支出ノ方針定マリシ上ハ経費支出ノ方面至ニ支出ノ方法ニ関スル主義ヲ定メサルヘカラス

至費支出ノ方面トハ至費ヲ種々ノ方面ニ分配スルノ義ナリ、詳言スルハ至費ハ所科上ニ於テモ階級ノ上ニ於テモ正当ニ分配セサルヘカラス、至費ハ元來國家ヲ組織セル団体實ノ全部若クハ大部分ノ豫ケル望ヲ滿テシメサルヘカラスモ、ナレハ國家至費ノ支出ハ一地方ニ屬セズ全國ニ亘ルコトヲ皆トセサルヘカラス、中央至費ト地方至費トハ正当ニ分配セラレサルヘカラス

次に國家ノ至費ハ一階級ニ偏セズ全階級ニ通シテ支出セサルヘカラス、

轉言セハ至費ノ支出ニヨリテ國家ノナス行爲ハ有ニル階級ヲ利スルモノナラサルヘカラス、此ノ原則ハ立憲政治ノ在ニ至リテ始メテ認めラレソノ以前ニアリテハ國家ノ至費ハ君主ノ私腹ヲ肥シ貴族又ハ特殊階級ヲ利スルカメニ支出セラレタルモノナリ

最后ニ至費ノ支出ノ方法ニ関シテハ國家ノ至費ハナルヘク國內ニ支出スルヲ期メルヲ原則トス、支出セラレシ金額カ内テ國內ニ上マリ外國ニ支サレヨ望ムハ重商主義ノ思想トモ見ルヘキモノナレトモ國家カ博愛スル物件ノ供給ヲ國內ニノミ仰キテ之レヲ外國ニ仰カリルハ國民至費上有利ナリト云ハサルヘカラス、假令外國ノ貨物カ少ク高キニ失スルモ國家之レヲ買入ル、トキハ其ノ産業ヲ促進セシメ、遂ニ外國品ノ供給ヲ仰ク必要ナキニ至ルヘシ、然ラハ其ノ産業ニ對シテハ外國産業ヨリ優ニスルコトナレ、之レ單體ソノ外運送ノ費甚ニ於テ大ナル意味ヲ有ス、ハ産業ノ發達又他方ニハ間接ニ勞働者ニ職業ヲ與フルモノナリ故ニ至費ノ支出ハ國民至費政策ヲ急ルヘカラス

第四章 經費支余方法

經費ノ支余ハ收入ニ依ツテニ收入ハ以テ經費ニ適合セルコトヲ旨トセザルハカラス、然ルニ收入制度完備セザレハ收入ハ以テ至費ヲ支余スルニ足ラサルコトアリ、又或ル收入ハ之レニ及ビテ却テ至費ヲ超過スルコトアリ、前者ヲ撤銷ノ不足ト云ヒ、後者ヲ撤銷ノ剰余ト云フ、撤銷ノ剰余トハ一見可ナルカ如ケレトモ常ニ然ラス即チ其額ノ收入カ重税ノ結果ニ出テタル場合ノ如キ、或ハ其ノ剰余金ヲ不急ノ用途ニ差付クルカ如キ是レナリ、於茲中剰余金ノ処分問題起ル、撤銷ノ不足ニ至リテハ最モ憂フヘキ事柄ニシテ若シ年々撤銷之レヲ繰リ延サハ財政家乱シテ遂ニハ救フハカラサルニ至ルハシ、故ニ財政政策ハ收入ノ適合ヲ以テ主旨トスヘキナリ、收入支出ヲシテ第ニ相適合セシメント欲セハ第ヒリノ收入制度宜シキヲ得テ以テソノ至

費ニ適合スル收入ヲナスニ努メサルハカラス、於茲收支適合ニ關スル根本原則ノ必要アリ、前章ニ説明セル如ク現今大明國ニアリテハ何レモ至費膨脹ヲ見サル國ナシ、至費膨脹スルニ從ヒテ收入モ又増加スルカト云フニ常ニ然ラス、故ニ場合ニヨリテ財政家ハ臨時ニ他ヨリ收入ヲ齎ラシテ之レヲ補足シ以テ一時ヲ糊塗セントス、臨時收入ヲ以テ至費ヲ支余スルコトハ他計ニ不可ナリトハ云ヒ難ケレトモ何ノ故モナク漸リニ漸カル法ヲ取ルハ財政ヲ紊亂セシムルノ甚クナリ、故ニ如何ナル場合ニ臨時收入ニヨリテ支余シ得ルヤ分ルヲ得ルヤ換言スレハ如何ナル至費ハ臨時收入ニヨリテ支余シ得ルヤ分ルナラシメサルハカラス、尚ホ之レヲ一般約ニ云ハ如何ナル至費ハ臨時收入ニヨリテ如何ナレ至費ハ至常收入ニヨリテ支余スヘキカヲ明カニセザルハカラス、斯クノ如ク考フルトキハ至常收入臨時收入ノ區別ヲ明カニシ更ニ之ニ對シテ至常臨時費ノ別ヲ對照セシメサルハカラス又至費ノ至常臨時ト收入ノ至常臨時ト相對時セシメ如何ニ之レヲ結合スヘキカヲ定ムルコトカ至費支余方法ニ關スル原則ノ第一歩也、然ルニ至常收入ノ中心トナルハ租税ニシテ、臨時收入ノソレハ公債ナリ、故ニ至費支余方法如何ト云

フ同数ノ究極スルルハ課税公債ノ採扱如何ト云フコトニ非スルナリ、殊ニ臨時費ノ支取同数ニ於テ然リ、尚本進ニテ考フルニ普通公債ヲ起スコト困難ナル場合アリ、此ノ如キ場合ニハ他ニ補正ノ方法アリヤ否ニテ深究セザルハカラス、之無キ場合ニハ莫世ノ欠乏ヲ生スルナリ、之等諸同数ノ解決ハ財政ヲ行フ根本ノ要ナリ、Wagnerノ如キハ斯カレ問題ノ解決ヲ財政ノ実質的制度 *materialische Ordnung der Finanzen* 云々ト云フ

第一節 経費支分方法ニ関スル
根本原則

経費支分方法ニ関スル原則ヲ定ムルニハ前述ヒシ如ク先ツ至常費臨時費ノ別ト、至常収入臨時収入トノ別ヲ明カニシテ之レヲ対立セシメサルハカ

ラス、至常費臨時費ノ別ハ茲ニ再述セス、至常収入臨時収入ノ別ハ茲ニ明カニスル必要アリ

至常収入臨時収入ノ別ハ至常費臨時費ノ別ニ類似ス故ニ區別ノ標準モ又類似セルモノ感アレトモ必スシモ然ラス

第一ニ至常収入臨時収入ノ區別ノ標準ヲ確定ノ度合ニ求メテ至常収入ヲ以テ理定的収入トシ、臨時収入ヲ以テ変動的収入トナシ得ラレサルニハアラサレトモ至常費臨時費ノ別ニ於テ論セシ如ク適當ナラス、身口確定収入臨時収入トスルノ假レレヲ禁ム

第二ニ至常臨時ノ別ノ標準ヲ其ノ結果ニ求ムルコトハ至費ニ於テハ最も重要ナレトモ収入ニ於テハ其必要ナシ、収入ノ結果カ式ノ会計年度内ニ止マルカマハ後年ニ及フ事ノコトハ懸念セラレサルカ故ナリ、故ニ収入ノ至常臨時ヲ論スルモノハ區別ノ標準ヲ時並ニ選定性ニ求メテ之レニ對シテ異論ヲ求ムモノナシ、即チコノ標準ニヨルトマハ至常収入ノ規則正シク繰返サレテ来ルモノナリ、之レニ及ビテ臨時収入ハ一時的收入ニシテ連続的ノモノニアラサルナリ、之レ通説ニシテ Wagnerハ至費ニシテハ叙上三

種ノ見解々々真摯ヲ包含セルコトヲ説ケトモ收入ニ関シテノ第三ノ標準
 ハ通説ヲ採リ出之レニカナル欠点ヲ附加セリ。即チ至常收入ト云フハ其
 ノ性質上規則正シク繰返サレ、カヨ有ヘル收入ニテ臨時收入ハ斯カレカヨ
 有セサル收入ナリト云フ考へ、根本ニ於テハ異ナラサレ其ノ繰返ハ通説曰
 リ更ニ正確ナリト思惟ス。蓋シ收入ニシテ性質上繰返サル可キカヨ有スル
 ト否トハ判然ト區別スルキモナリ。氏ノ説ニヨレハ實際上等故發生シテ
 之レカダメニ繰返サレルコトナキニ至ルモ其ノ性質カ繰返サルハカカヨ有
 スルトモハ至常收入トナササルハカラスト。之レニ及ニテ實際上數年或ハ
 數會計年度ニ亘リテ規則正シク繰返サレタルコトアリトスルモ其ノ性質カ
 繰返サレ得ルカヨ有セサルモナリト云ハ之レヲ臨時收入トラシムル
 ハカラサルコトアリ、此ヨリテ余カ氏ノ説ニ贊セサルハカラサル所以ナリ
 收入ニシテ規則正シク繰返サル、カアリト云フハ至常ニ定マレル收入ノ深ニ
 余ツヨク以テノ故ナリ。ソノ收入ノ稟賦定シテ容易ニ枯竭セサルヲ必要トス
 此ノ如キモノハ即チ至常收入ナリ、及之收入ノ派ハ存スレトモ數年ノ繰ニ
 靡絶スルコトノ際然タルハ收入ノ連續性ヲ失ハセルモノニテ之レヲ臨時收

入トスハ其性質ノモノナリ

臨時收入ハ規則正シク繰返サル、カヨ有スル收入ナリヲ以テ多少或
 ノ額ニ増減ヲ起スルコトナラズ、其ノ變化ノ急速ナラサルヲ指トス、之ニ
 反シテ臨時收入ハ會計年度ニヨリ之レヲ損スルコトアリ、或ハ損セサルコ
 トアリ

依令損スルコトアリトスルモ其ノ額ニ於テ非常ニ異ナリヌルモノアルハ
 之レ自然ノ弊ナリ、以上ノ標準ニヨリテ之レヲ見レハ租税手数料ノ他ノ
 公課費有貯底ノ收入産業ノ收入、如キハ至常收入ニ属スルモノニテ非常有
 貯底ノ損下金、損下ノ代価、債全公債ノ如キハ臨時收入ニ属スルモノナリ
 就中至常收入ノ中心トナルモノハ租税ニシテ臨時收入ノソレハ公債ナリ、
 或ニ租税公債ハ至常收入臨時收入ノ代表トシテ見ル可シ

至常費臨時費ノ區別、至常收入臨時收入ノ區別分晰タルニ至レハ至費支
 持方法ニ關ハル原則ノ研究ニ進ムコトヲ得ルナリ、至費支持方法ニヨスル
 原則ニテシテ近五學者論争ノ端緒ヲ開キタルハ *Reigel Kund* ナリ
 其ノ主張ニ曰ク至常費ハ至常收入ヲ以テ夫余スヘク臨時費ハ臨時收入ヲ以

テ女余スヘキナリト

此ノ説ハ傳ヘテ現時ニ至リ一般通俗ニ信セラル。然シ並立ノ學者ハ悉ク之レヲ肯定セス、余モ又然リ。此ノ原則ヲ論議批評スルニハ之レヲニ級ニ分ツヘキナリ、即チ至常費ヲ支弁スルニハ至常收入ヲ以テスヘキコト及ヒ臨時收入ヲ以テ臨時費ヲ支弁スヘキコト

第一級ノ原則ニテハ至常費ハ如何ナル場合ニ於テモ至常收入ニヨリテ支弁スヘキト云フ識ナリ、之レヲ東洋ヨリ云ハハ至常費ハ臨時收入ヲ以テ支弁スヘカラス、若シ至常費ヲ支弁スルニハ臨時費ヲ以テ支弁セムカ財政ノ要固ハ得テ期スヘカラス、前述べセシ如ク、臨時收入ノ主メモノハ公債ナ

故ニ臨時收入ヲ以テ至常費ヲ支弁スルカ加キ財政々策ヲ採用セムカ公債ハ徒ラニ累積セルノミニシテ債還スルノ方法ヲ知ラサルモノト云フハ其ノ利子ハ又至常費トシテ現ハレ只至常費ヲ増シテ財政難ニ加フルニ財政邊ヲ曠成スルニ至ラム、之レヲ以テ至常收入ハ如何ニ減少スルトモ之レヲ以テ至常費ヲ支弁スルニ足ルノ法ヲ講セサルヘカラス、最近ノ學者ハ至常

收入ハ至常費ヲ支弁スルヲ以テ最下限ナリト云フ、此ノ意味ハ第一級ノ原則ハ財政ノ強固ヲ計ル根本原則ナリト云フニ歸ス。之レニ付キテハ學者ハ誰モ誤謬ナリトハ争ハス、然ルニ實際家ハ悉ク之レヲ無視スルコトアルナリ、財政吹々業々シテモ財政窮乏ノ秋ニ際シテモ臨時收入ヲ以テ至常費ヲ支弁スルコト計ナカラス、之レ明々白々ニ此ノ原則ニ特ルモノナリ、然ルニ秋務ナル財政家ハ名ヲコノ原則ニ陥リテソノ實コノ原則ニ背クモノナキニシモアラス、即チ性質上至常費ヲ授クテ臨時費中ニ加フルナリ。故ニ臨時費ト称セラレ得ルモノヲ支弁スルニ臨時收入ヲ以テス、財政ノ窮乏如何トモスヘカラサル場合ニハ多少之レヲ諒トセサルヘカラサルモ畢竟第一級ノ原則ヲ無視セルハ争フヘカラス、之ンマカ、此觀察ヲ以テ為政ノ至意トナシ以テ収支ノ均衡ヲ衡ラニ至ラハ其ノ罪狀又認容スヘカラサルモノト云フハシ次ニ至常費ヲ支弁スルニ至常收入ヲ以テス、之レヲ實則ハ至常收入ヲ以テ臨時費ヲ支弁スヘカラストハ辭スヘキニアラス。Oligarchy 以テ論議スルモノハ第一級則ヲ加斷解スルモノナリ、故ニ於テ近時學者ハ至常收入ハ至常費支弁ヲ以テ最下限、……トスト云フ、此ノ意味ハ

Diegel ノ第一原則ヲ最少制限シタルモノト云フヘキナリ
 第二原則ハ臨時収入ヲ以テ臨時費ヲ支弁スヘシト云フコトナリ、コノ原則ヨリ臨時収入ヲ以テ至極費ヲ支弁ムヘカラスト云フ意義ヲ未ル、臨時費ハ臨時収入ヲ以テ支弁シ之シテ以テ至極費ヲ支弁スヘカラスト云フハ第一原則ニモ包含セラレサル可カラカ之レ自然ノ理ナリ、故ニ臨時収入ハ如何ニ拡大スルモ至極費ニ支弁スルコトニ止メテ之レ以上拡大スヘカラスト云フコトニナリ、コレヲ以テ近時ノ學者ハ臨時費ハ臨時収入ヲ支弁スルコトヲ以テ最大限ノ……ト云フカ故ニ臨時費ヲ支弁スルニハ臨時収入ニ換ラサルモ敢テ妨ケナキ結果トモナル、換言スレハ臨時費ヲ支弁スルニハ至極費ヲ以テスルト之妨ケサルコトナリ、此ノ意味ニ於テ *Diegel* ノ第二原則ハ又制限ヲ加ヘラレタルモノト云フヘキナリ、然ラハ如何ナル場合、如何ナル程度ニ於テ臨時収入ニヨリテ臨時費ヲ支弁スルヤ、如何ナル場合ニ至極費ニヨリ臨時費ヲ支弁スルヤカ同義トナル、於茲乎臨時費支弁方法トシテノ起債、租税ノ取扱ナル問題生ムヘシ、之レ従来大問題トシテ論争セラレタルモノナリ

第二節 臨時費支弁方法トシテ
 公債ト租税トノ撰取

公債ノ理論ノ発達ヲ考フルニ古ノ學者ハ皆公債ヲ以テ危險ナリトシテ如何ナル場合ニモ之レヲ避ケテ租税ニ取ラサレヘカラサレコトヲ極論セリ、*Steuern* *Smith* …… 当時ノ學者、見解モ大體然リ、然ルニ近ハ日進月歩複雑トナルニ從ヒ公債ノ優ルヘキノ必要ヲ生シ學者ノ見解モ亦變シテ公債ノ必要の害悪ナル説行ハル、ニ至ル、最近五六十年ニ至リテハ公債ノ理論ハ更ニ長足ノ進歩ヲナシ臨時費ノ支弁ハ寧ろ公債ニヨルヘシトノ説モヲ輩々スルニ至ル、(ライセル氏ノ如キ然リ)然リト云モ臨時費ノ支弁ハ第一起債ニ依ルノ不可ナルハ前述ノ如シ、換言スレハ臨

時ノ支弁ハ租税ヲ取ルヲ得ル場合モアリ、サレハ場合ヲ分テテ之レヲ考究
ハヘギナリ、租税公債撰取ノ問題ヲ解決スルニハ第一ニハ臨時費支弁セハ
國民至濟ニ如何ナル結果ヲ生スルヤヲ觀、第二ニハ臨時支弁ニ當ルニシテ
、收入カ急務社会ヨリ波收セラレザルカメニハ如何ナル影響ヲ及ボスヤ
ヲ觀察セサルヘカラス、以テ斯ノ二見地ヨリ考究セント欲ス

第一項 經費ノ經濟上ニ及ボス 結果ヨリノ觀察

經費ノ效果ノ項ニ總シ(汝ノ會計年度ニ及ボス影響)ニ西マヲ見テ至常
費臨時費ヲ區別スルコトハ前ニ詳述セシ如シ、而シテ臨時費ヲ更ニ分テテ
至常的臨時費及ハ扶養ノ臨時費トスルモ前述ノ如シ、然ルニ二種ノ臨時費
ハ及ボス效果ヲ異ニスル所アルヲ以テ區別ニ考ヘサルヘカラス

第一臨時費の臨時費支弁方法トシテ、租税ト起債。此ノ問題ニ付キテハ總
カニ一ニノ例外ヲ除クノ外ハ起債ヲ撰フコトカ道並業者ノ一致スル所ナリ
Wagner 氏最モ極力主張ス、然レ所云至常的臨時費ノ中ニ私至濟的
臨時費ト國家的臨時費トアリテ二者必スシモ同一ニハ論セラレズ
先ツ私至濟的臨時費ニ付キテ考フルニ例ハ土地、森林、礦山、湖金場
製造場、鐵道其ノ他ノ交通線同ノ買入又ハ新設或ハ買入ノタメニ投資スル
ハ國家之レノナシ又私人之レヲ行フモ國民至濟ニ及ボス效果ハ全ク公債ナ
リ單塊ソノ買入ハ資本ヲ一ノ企業ヨリ他ノ企業ニ移スモノニシテ其ノ新設
改良ハ流動資本ヲ固定資本トシ或ハ新シキ貯蓄ヲ營業資本トラシハルモ、
ナリ、故リニ私人カ至營ヲナストスルモ海々貸借ニヨル、而已從テ其ノ效
果ハ國家カ起債スルト甚モ異ナル如ナシ、故ニ國家カ起債ニテ前述ノ如キ
諸種ノ事業ヲ至營スルトスレハ概令一時國民至濟上ノ生産ヲ減スルノ結果
トナリテモ他ノ方面ニ於テ國家ノ營造物其ノ他ノ設備ニヨリ生産ヲ大ナク
シハルヲ以テ單ニ投資ノ方面ヲ裁スルニ止マリテ盡ク全体ノ投資ヲ裁スル
モノニアラスト曰ハサルヘカラス、故ニ此ノ場合ニハ租税ヨリハ公債ヲ撰

フハギモノナリ、次ニ國家王治の臨時費ニ於テハ林ノ場合ノ如ク臨時費支
 出ノ效果カ確定ニ保証セラレサレコトアリ、サレハ私王治の臨時費ノ如ク如
 何ナル場合ニモ公債ニヨルトスルコトヲ解スシテ寧ロ公債ヨリハ租税ノ優
 レルニ若カム *the agrarian* 氏ノ論ハ大体ニ於テ是證スヘキナリ、然レ私
 王治の臨時費ハ公債ニヨリテ支拂ムルコトヲ租税ニヨリテ支拂ムヘカ
 シスト解スヘカラス、蓋シ租税收入ニシテ余リアラハ之レヲ私王治の投資
 ニ用ユトモ至モ支障ナケレハナリ、

租税收入ヲ以テ私王治の投資ニ用ユルコトハ流動資本ヲ成シテ固定資本
 ヲラシハルニ外ナラスシテ單境王治ノ進歩ノ意味シテ未ダ当ナラス、凶
 年詳細ハ至濟論叢一於一号ヲ參照スヘシ、非王治の臨時費殊ニ賦税ニア
 リテハ至濟の臨時ノ如クソノ支出ノ效果ヲ進ラニ至費ヲ成シ國家生産額ヲ
 増スモノト云フヘカラス、寧ロ財產並ニ人余ノ破滅ヲ来スモノニシテ全然
 不生産的ト云フヘシ、故ニ若シ單ニ王治上ノ效果ノミヨリ判断スルトキハ
 非王治の臨時費ハナルヘク公債ヲ避ケテ租税ヲ取ラサルヘカラス

第二項

經濟社会ヨリ資本ノ吸收セラ
 ル、ヨリ生スヘキ影響ヨリノ觀

案

至濟ニ論セシ如クニヨレハ國家王治の臨時費ノ或ル部分並ニ非王治的或ハ
 至濟的臨時費トハ租税ニヨルコト正当トスレトモ之レ等ノ臨時費ハ極メテ
 大ニシテ到底事實上租税ノミニテ支拂ヌルコト難シ、故ニ止ムヲ得ヌ公債
 ニ依ラサルヘカラサルニ至ル、然ラハ如何ナル場合ニ公債ニヨルモ差支ヘ
 ナキヤ此ノ問題ニ答フルニハ起債力如何ナル資本ヲ吸收スルヤ明カニス
 ル必要アリ、起債力吸收スヘキ資本ハ時ニヨリテ異ナレトモ大体ニ於テ之
 レヲ三種ニ分類スルヲ得、即チ外債、起債、資本ノ三ナリ

第一 外資ヲ吸収スル場合

外資ヲ吸収ストハ外債ヲ起スヲ云フ。外債ヲ起ス場合ニハ国内ノ産業ニ悪影響ヲ及ボスハシ、蓋シ産業ニ放下セラレタル資本ハ此ノ下ノ変動ヲ受フルコトナケレハナリ。而シテ輸入セラレシ外債ハ國家主権的ノ基礎ヲ形成セルコトナリ非至極的臨時費ニ用ユルトキハ然ラサル場合生シザリシト思ハルル悪影響ヲ未然ニ防止スルコトヲ得ルナリ。又外債ヲ起スニヨリ國際金融市場ヲ深通シ金利ノ平均ヲ促シ以テ國民經濟ノ健全ヲ助ケ債権國ト密接ノ關係生シテ外交上ノ危険ヲ予防シ以テ平和ヲ確保スルノ效ナリ。然レ他方ニハ他日元利支払ノ多クノ資本ヲ外國ニ送ラレルニ至ルノミナラス又政治上外國干渉ノ端ヲ開キテ邦國ノ体面ヲ汚スコトナキニシモアラズ。然レ政府カ外債ヲ起サストモ國際貸借ノ盛ナル今日ニ於テハ私人カ外國ニ對シテ債務ヲ負フコトヲ防グコト能ハサルヲ以テ政府ノ外債ヲ不利ノ條件ニ依ツテ國家ノ体面ヲ損シ至極上ノ損失ニ若クスル如キコトナケレハ外債ニ依ルコトハ不可ナリトハ斷ニ推シ。

此處言スレハ斯クノ如キ場合ハ租稅ヲ差テ、公債ニヨルモ妨ケナシト云ハサルハカラム

第二 遊資吸収ノ場合

遊資ヲ吸収ストハ国内ニ於テ未タ何等ノ事業ニモ放下セラレサル資本ヲ吸収スルコトヲ云フ。而シテ遊資ハ既ニ後述ニ存スルヲ普通トスルカ起債ニヨリテ更ニ新シク現出スルコトナキニシモアラズ。起債カ既存ノ遊資ヨリ吸収スルトキハ産業ヲ害スルコトナク又其ノ國ニ於ケル普通ノ資本利チヲ高クスルコトナクシテ國家人民ノ榮達ヲ補助スルコトナリ。次に起債カ遊資ノ榮生ヲ促シ其ノ榮生シタルモノト吸収スルモノモ又公債ニ論セラレハシ、然ラハ遊資カ如何ニシテ新出スルカト云フニ理藏金起債ノメニ生スハシ、之レ學境技術ヲ信スルコト尊キニヨリ、又國民的感情ヲ昇騰セル場合モ亦生スハシ、起債カ時蓄心ヲ奨励シ又生産ヲ増シ消費ヲ減スルモノ又一ノ原因ナレハシ、他國ノ如ク時蓄心ノ盛ナル國ニテ實際ニ於テ見ル放ナリ。要スルニ起債カ既存遊資ニ之レカメテ新出ノ

遊資ヲ吸收セルニ止マルトヤハ起債ハ至齊上柯等効ケルトコロナシト云
 フハナリ、デ、イ、チ、エ、シ、氏、カ、臨、時、ハ、等、ニ、臨、時、以、入、一、ヨ、ル、ハ、シ、ト、云、ヒ、シ、
 ハ、等、モ、多、ク、此、ノ、場、合、ヲ、見、タ、ル、モ、ノ、ナ、リ、併、シ、同、ノ、國、ニ、於、テ、モ、遊、資、ヲ、
 二、重、量、ニ、存、ス、ル、ト、ハ、ム、シ、得、ス、從、テ、公、債、ヲ、起、セ、ハ、等、ニ、遊、資、ヲ、吸、收、ス、ト、論、
 斷、ス、ル、能、ハ、ス、之、レ、デ、イ、チ、エ、ル、氏、ノ、論、ニ、異、論、ヲ、成、ベ、カ、ル、ハ、カ、ラ、サ、ル、所、以、
 ナ、リ

第三、放下資本吸收ノ場合

放下資本ハ吸收スル場合ニハ其ノ資本ノ放下セラレ居ル事業ヲ衰ヘシ
 ムルコトトナリ、故、イ、テ、ハ、國、家、ノ、稅、源、ヲ、涸、竭、セ、シ、ム、ル、コ、ト、ト、ナル、モ、採、
 進、シ、故、ニ、起、債、ヲ、未、サ、シ、ト、恐、マ、ル、場、合、ニ、ハ、起、債、ソ、レ、自、体、ヲ、差、地、ハ、サ、レ、
 ハ、カ、ラ、ス、英、ハ、正、乘、波、又、ハ、昔、時、ノ、至、海、學、者、ノ、見、識、セ、シ、公、債、ハ、其、ク、此、ノ、種、
 ノ、資本ヲ吸收スル公債ニシテ公債ノ資本ヲ吸收スルモノニテ租稅ハ其ノ所
 得ヨリ払ハレルモノトシラ公債ハ産業ニ妨ケアリ租稅ハ然ラズト論シ以
 テ公債ヲ廢シ租稅ヲ撰ミメ、ル次第ナリ、然シコノ說ハ其モ至齊ノ發達セ

シ國ヲ急却セル故ナリ、此ノ如キ國ニテハ資本増加ニテ止マス、從
 テ公債ヲ起シテモ放下資本ヲ吸收スルコトハ極メテ稀ナルコトニ感スレ
 ハナリ *Wagner* 氏ハ斯ナル場合ニ何キ論シテ曰ク、如何ナル事情ヲ
 謀シテモ起債ヨリハ廢ルト、何トナレハ至齊上ニ惡影響ヲ及ボスコトハ
 何レモ公シカラシモ其ノ種、夜カ起債ヲ以テ甚シトスレハナリ、叙上ノ論
 フ以テ見レハ起債カ外資ニ遊資ヲ吸收スルニ止マレル場合ニ公債ニ依
 ルモ差支ハナク放下資本ヲ奪フニ至ルハ漸シテ公債ニ依ルハカラス

第三節 戦費支弁方法

戦費ハ所云非至齊的臨時費ナリ、故ニ其ニ論スル處ニテ其ノ支弁方法ハ
 自ラ分明タル筈ナリ、即チ至齊上ヨリ見レハ租稅ニ依ルヲ本則トスレトモ
 外資並ニ遊資ヲ吸收スル限リハ公債ニヨルモ妨ケナシト云フコトニ歸ス、
 二〇三

之レキリニテハ問題ハ充分ニ解決シ得サルハシ

今日ノ戦争ハ其レ素レバ兎先石火ノ如ク急ニ其ノ去ルヲ突ニ逐マタリ、
比較的長期ニ亘リ来リ制ハ受領ノ戦費ヲ導ス、故ニ財源上實際ニ如何ニ救
費ヲ求シ得ルヤコト考フルニ事實上租税ヲ以テ本則トスル餘ハサレヘシ

即チ戦費支弁ノ中堅ヲナスモノハ公債ナラサルヘカラス、租税ハ之レニ
対シテ比較的便宜ナル地位ヲ占メサレヨ普通トス、然シ租税ハ少クトモ戦
争公債ノ利子ヲ償ヒ且ツ戦争ニヨリテ収入ノ減シタルモノヲ補ヒ得サルハ
カラス、之レ戦争ニ於ケル租税ノ最少限ナラサルヘカラス所以ナリ、之
レニ関スル詳細ナル論モ法學公雜第五卷第六号ヲ參照スヘシ、戦時支弁ハ
急上ノ如ク大体公債ニヨルトナルモ戦時ニハ外債ヲ起スコト餘ハサル場合
ナリ、又内債ニ依ルモ放下資本ヲ吸収スルコトモアリ得ルナリ、於テ國
家ハ財政上ニ最良ノ手段ニ選ソベキコトナル、即チ収入ノコトノミヨリ
考ヘテ之レカ如何ナル影響ヲ及ボスヤコトハサレモノナリ、具體的ニ云ヘ
ハ非常利益ニ強引公債ナリ

非常税トハ戦時非常ノ場合ニ起スト云フコトコリ名ツケルモノニテ普通

ノ租税ヲ理論ヲ以テシテハ戦時ニ於ケル限下限ノ租税派ハコトモ得レニ是ラ
サレヨ以テ普通ノ租税論ノ基ササレ範圍ニマテ立入ルコトナリ、即チ税本

ヲ喰入り財産資本ヲ徴収スルニ至ルモ尚ホ餘セサルモノナリ

強引公債ハ一種ノ公債ニテ何レノ時力順選セラル、モノナレトモ人民ノ

意思如何ニ拘ハラス強制シラ志勇セシマルモノナレハソノ割当並ニ至極上

ノ影響ハ非常税ト異ナラス、尚ホ之レヨリ一步進メタルモノナルコトサハ

アリ、戦時費ノ支弁ハ公債ヲ主トシテ租税ヲ以テ補フヘキモノナルカ因茲

ニ研究スヘキハ開戦ノ始、ニ当リテ如何ニ動員費ヲ支弁スルカニアリ

動員費ヲ支弁スルニハ迅速ナラサルヘカラス、然ルニ公債租税共急速ニ

志スルコト餘ハサルヲ以テ剰余金、種々ノ基金ノ利用ノ問題起ル、蓋シ戦

争ニ因テ剰余アリ又種々ノ基金アル場合ニハ直チニ之レヲ動員費ノ支弁

ニ用フルコトヲ得ルナリ、然シ之レカタメ憲法上相当ノ手續ヲ履ムコトノ

要アルコトハ論ナキナリ、剰余金ニシテ尚ホ余リアラハ其ノ後ノ戦費ニ充

用スヘキヤハ又變々ヲ要セス剰余金ハ戦前ニ常ニ之レヲ望ムヘカラス、於

茲乎予々戦争予備金ヲ置クノ論出テスソノ際ソレヲ行フ國モアリ、之レ一

ノ政策タルヲ失ハス（詳細ハ法雑誌三卷一巻）戰爭準備金ハ資本ヲ死蔵シ
 利子ヲ失フ損失アリ、故ニ或ルハ國際動産ヲ以テ戰爭準備金ニ當エント
 スルモノアリ、國際動産 *International Reserves* 外國ノ
 公債ノ他確實ナル有価証券ヲ云フ、一旦緊急アリタル時ハ之等ノ証券ヲ
 売却シテ軍費ヲ供給セントスルニ存ス、平和ノ場合ハ一定ノ利率ヲ得ルコ
 トヲ戰爭準備金ヲ以テ資本ヲ流転スレテフ獲ヲ得ル、所以ニシテ之レ國際
 動産ヲ以テ國際準備金ニ代ハントスル由ナリ、然レトモ國際動産ヲ貯ル
 ニ一定ノ資金ノ必要アリ、一定ノ資金ヲ作ルコトハ國際準備金ヲ作ルコト
 ト異ナラス、只貯蓄方法ノ異ナルニシ、加之國際動産中ニ極々敵國又ハ其
 ノ公債國ノ公債又ハ其ノ他ノ有価証券アリトスレハ之レヨリ尤モスルニ凶進
 ヲ感スヘシ、茲イテ之レヨリ賣ラントスレハ收ムル所ノ代金少ナクナリテ非
 常ノ場合ニ備フルコト然ハサルカ如ク思惟セラル、故ニ此ノ説モ亦採ルニ
 足ラサルナリ、故ニ剰余金ナク又戰爭準備金ナキ國ニ於テモ國際當時ノ動
 産ハ急ニ之レヲ得サルハカラス、之レヲ得ル途ハ中央銀行ヨリノ一
 時借上ナリ、モシカラスレハ中央銀行ハ平時ニ全額ノ正貨ヲ貯蓄セサルハ

カラス、若シ之レヲ貯蓄セシカ則戦ニ至ルモ中央銀行ハ必ニ政府ノ求メニ
 応ジテ動員費ヲ供シ之レヲシテ戦時ノ活躍ヲナサシムルコトヲ得ハシ、斯
 ク見レハ正貨吸収主義ハ一ノ戰爭準備ト異ナラサルモノナリ、今日ノ戦
 起ル諸各國ノ中央銀行ハ此ノ観点ニ立チテ正貨吸収ニ熱中セリ独、他、樂
 意ヲ以テ最モ著シクモトス
 斯クノ如ク中央銀行カ巨額ノ正貨ヲ貯アルハ之レヲ以テ戦ヲ開ケ際其ノ
 意ニ応ズルコトヲ考フルモノナルモ然ルニ開戦後日ヲ至ルモ必スシモ容易
 ニ公債ヲ起シ租税ヲ増徴シ得サルコトアリ、依リテ今日ノ國家ハ密ニ動員
 費ノミナラス其ノ後ノ戦費ニ中央銀行ヨリ結リテ支余スル方法ヲ取ルモノ
 少ナカラス、然レ露リナキ戦費ノ求メニ応ズルコトハ如何ニ巨額ノ正貨ヲ
 貯ルハ馬ル中央銀行ト云モ之レヲ避シトスルトコトナリ、依リテ政府ハ交換
 ヲ停止スルコトヲ許ササルハカラス、斯クシテ *Bank note* ハ強制
 通用ヲ以テ *paper money* トシテ通用スルナリ、加之政府カ銀
 行ノ手ヲ指ラズ自ら紙幣ヲ發行シ之レニヨリテ戦費ヲ支余スルコトナリ、
 斯クシテ紙幣ノ發行モ亦ハ一ノ國家ノ起債ト見ルコトヲ得ルモ普通ノ起債

トハ大ニ趣ヲ異ニス、依リテ之レヲ便宜上^{之レヲ}別個ノ支拂方法ト見做ス、而シテ紙幣至極ハ至極の生活ヲ根本的ニ破壊スルモノニシテ其ノ弊害亦甚ケテ救フヘカラス、國家ハ此ノ方法ニヨリテ戦費ヲ支拂スルハ米ニテ換スヘキコトニアラサルナリ、學者カ紙幣ノ發行ヲ以テ最良ノ手段トセルハ^{即チ}之レカタメナリ、然レニ今回ノ政州戦況ニ於テ多クノ國ハ始メヨリ紙幣發行ノ方法ニ對テナリ

以上述フル所ニヨリテ之レヲ見ルニ事前ニ於テ戦費準備金ヲ貯ヘ事始ニ於テハ公債ヲ主トシ租稅ヲ以テ補ヒテ戦費ヲ支拂スルコトニナルナリ、而シテ止ムヲ得サルニ至リテ非戰稅、強制公債或ハ紙幣發行トナルナリ、戦費準備ハ泰ヨリ平和ノ時代ヨリ之レヲ準備シ置カサルヘカラス、然レ強制公債、非戰稅、若シテハ紙幣發行ニ因スル社租ノコトキモ平時ヨリ予メ之レヲ設メテ準備シ置クヘキナリ、之レ等ノ戦費準備ヲ戦費ニ對スル財政準備ト云フ

第四節 歳計ノ不足

公費ヲ收入ヲ以テ支拂セサルヘカラサルカ收入ヲ以テ至費ヲ支拂スルニ足ラサル場合アリ、之レヲ歳計ノ不足ト云フ、歳計不足ハ形式上ニモ存シ實際^{ニモ}存ス

形式上ノ歳計ノ不足トハ予算決算上ニ生スル不足ナリ、予算上ニ於ケル不足ハ予算編纂上ニ起ル不足ニシテ決算上ノ不足ハ決算上ニ起ル不足ナリ、予算上ノ不足ナクモ決算上ノ不足ハ生シ得ルナリ、之レニ又シテ予算上ノ不足アルモ決算上ノ不足ナク場合アリ、兩者ハ皆テ異ナルモノナリ

實際上ノ不足ハ收入支拂ノ實際上ヨリ見テ判断シタル不足ナリ、實際上ノ不足ハ學者大槓之レヲ三種ニ分テス、即チ金庫上ノ不足、國有ノ不足、

臨時不足之レナリ

全庫上ノ不足トハ一ノ財政機關ニ於ケル總收入カ總計費ニ及ハサレテ云フ、此ノ如キ不足ハ急ニ起ルコトアリ、突然至費ノ増加スルカ若クハ收入ノ減少スルカ兩者同時ニ發生スルカノ場合ナリ、之レヲ學者ハ急性的不足ト云フ、次ニ又斯クノ如キ不足ハ教會計年度ニ亘リテ起ルコトアリ、之レヲ非急不足ト云フ、ソノ何レナルヲ問ハス此ノ不足ハ全庫ノ計算上ニ於テ見ルモノナル故學者之レヲ全庫不足ト稱スルナリ、全庫不足ヲ生スルトキハ國家ノ行動ハ或ル範圍ニ於テ中止セラレサルヘカラス、或ル契約ヲ破リテ之レカ履行ヲナス能ハス、或ハ貸與ニ停給ヲ給支スルコトヲ一時中止セサルヘカラス

然ラサル場合ニハ

paper money

シ發行シメハ一時借上ヲナシテ

之レヲ以テ一時ヲ稱シ以テ財政ノ紊亂ヲ来スコトトナルヘシ、之レカ假令急性的ニ起ルモノニ對スル法規宜ニキリ得サレハ銀行收年ニ注リテ慢性的トナリ國家ノ收入ハ全ク崩壞セラレテ回復ニ難キニ至ルヘキナリ、因有ノ不足トハ財政學上ノ意義ニ於ケル全庫收入カ至費費ヲ支弁スルニ

依リテ學者ハ之レヲ以テ真正ノ不足ト云フ、財政ノ良否ハ實ハコノ不足ノ有無ニニ斷スヘキナリ

臨時不足トハ至費費ヲ超過スル至庫收入ヲ以テ臨時費ヲ支弁スルニ足ラサルヲ云フ、此ノ如キ不足ハ國家至濟的臨時費ニ於テ起ルコトアリ、ハ

至濟的臨時費ニ於テ起ルコトアリ、此ノ不足起ルトキハ事實上公債ニヨリテ支弁セラレサルヘカラス、然ルニ如斯場合ニハ前述ノ如ク外資並寄ヲ吸取スル場合ノ外ニ租稅ニヨルヲ學理上適當トスル故コノ不足ハ又財政ノ良否ヲ判斷スル一材料トスルコトヲ得ルナリ、コノ不足至濟的臨時費ヲ公債ニヨリテ支弁スルモノアルトキハ之レモ一種ノ不足ナルモ此ノ場合ハ財政ノ不健康ト云フ結論ヲ下ス可ニ至ラサレナリ

叙上ノ実情上ノ不足ハ財政ヲ批評スル上ニ於テ尤モ重要ナルモノナルカ
 然レモ正確ニ計算スルコトハ甚メ以テ容易ナラハ、普通ノ公私ノ会計
 ニ表ハルルモノハ尤モ學問上ノ區別ニ依ツテ作ラレザルコト以テ財産ノ真相
 ヲ明カニスルニハ之レ等ノ統計ニ依ルトモ云フ款ニ行カス、依ツテ財政
 ノ批評泉ハ必場合ニ於テ平等上ノ数字ヲ加減シテ計上セザルヘカラス

第一編 經常收入論

第一章 收入ノ組織

此等ニ收入ノ組織ト云フハ收入ノ何ニヨリテ形成セラル、ヤト云フコト
 ナリ

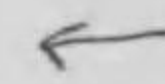
此ノ意味ヨリ收入ヲ及種ノ方向ヨリ見レハ收入ノ分類ナリ
 收入ハ先ツ之レヲ經常收入ト臨時收入トニ分テ、而シテ如何ニ之レヲ分
 類スルヤハ前編ニ於テ詳述セリ吾人ノ此ノ編ニ於テ論セントスルハ經常收
 入ナリ、臨時收入ハ次編ニテ論セントス、進ンテ吾人ハ五種收入ハ如何ニシ
 テ組織テフル、ヤラ悉ハサルコトカラス

經常收入ハ前編ニ述セル如ク各会計年度毎ニ規則正シク繰返サレテ至終時ニ
 入り来ルルニキカノアルモノナリ、故ニ經常收入ノ派ラフスモノハ恒久性持
 續性ヲ有スルモノナラサル可カラズ

依リテ國民所得若クハ國民所得ヲ形成スル個人至濟ノ所得ヲラサレ可カ

カス。而シテ國家公共團體カ如何ニシテ此ノ國民所得ヲ自己ノ收入トナス
ヤト云ノ上凡ソニツアリ。其ノ一ハ國家公共團體カ自己ノ至善行爲ニ因リ
テ之ヲ得レモ、ニニテ其ノ一人也ノ個人至善行爲ヨリコレヲ取ルモノナリ。
此類ニ於テ至善行爲ハ自ら、二者ヨリ起ラレサル可カラズ。前ニ述ヘタ
ニ方法ニヨリモ、ヲ私至善行爲收入ト云ヒ也。或ヘタル方法ニヨリモ、ヲ公
至善行爲收入ト云フ

官業租税トシテ



私至善行爲收入ト云フハ國家公共團體カ私人ト云ク私至善行爲の原則ニ從テ
行動ニ財產上並ニ企業ニヨリテ獲得スル收入ナリ。或リテ學者ニ依リ之レ
ヲ營利收入ト云フ。公至善行爲收入ト云クハ公權ニヨリテ他ノ個人私至善行爲ヨリ
間接ニ得ル收入ナリ。學者或ハ之レヲ公權ト云フ學者ニヨリテハ收入ヲ法
律上ヨリ區別シテ公法收入ト私法收入トニ爲スモノナリ。伊太利ノ學
者ニ多シ。公法收入ハ私法收入ト別テ全然ソノ境ヲ同クセサルモノ
ト解ス可カラズ。併シ其ノ別ノ根本ノ思想ニ於テ相類似セル点アリ。蓋シ
公法收入ト云フハ其ノ質ニ依リテ、行使ヲ反カス様ニ考ヘラレ、私法收入
ト云フハ自然其ノ權ニ自由取捨ニヨリコトヲ辨認セシメラレ、カ致ナリ

然レモ吾人ハ此ノ法律上ノ區別ヲ採リテ其等收入ハ公至善行爲收入、私至
善行爲收入ニ分リナリ。茲ニ於テカ吾人ハ此ノ私至善行爲收入並ニ公至善行爲收
入ハ如何ニ組シテラレ居ルカヲ研究セント欲ス。

第一ニ私至善行爲收入ノ組織如何ヲ考フルカ。ソレニ先立テ吾人ハ一連
串ニテ私至善行爲收入ノ本質如何ヲ考究セサル可カラズ。私至善行爲收入ハ國
家公共團體カ私人ノ資格ニ於テ私人ト目シテ私至善行爲原則ニ從テ行動スル

ヨリ生ズル收入ナリ。從テ嚴格ニ云ヘハ此ノ三件ヲ見出す、ル可カラズ

①、國家公共團體ハ財ノ生産源泉ニ際シ收益ヲ多クセンカタメニ新設^{〇〇}或^{〇〇}テ
使用スルカラス、然ラサレハ此ノ收入ヲ多ク得ルコトカ私至善行爲至善
タメニセサルコト、ナルナリ。即テ一種ノ公權ノ性質ヲ帶アルコト、ナ
ルナリ

②、國家公共團體ハ單ニ收入ヲ得ルノ目的ヲ以テ至善行爲ヲナス可キナリ
至善公共團體、當然ノ職分ヲ行フニヨリテ生ズル應^{〇〇}ノ收入ハ營利的收入
ニ非スシテ行政的收入トナリナリ

③、國家公共團體ノ私至善行爲原則ニ從テ行動シ財產並ニ企業ヨリ成ル可ク

タラハラ得ルコトニ努メリル可ラス 国家公共団体カ其ノ賦分ニ鑑
ミテ時ニヨリ私至清政至管ニヨリテ生ス可キ利益ノ一部分ヲ放棄スル場
合アリ 斯ナル場合ニ其ノ取入ノ減少ハ至費天出ト同一視スルコトヲ得
ルナリ 其ノ取入ノ減少後ツテ残リノ取入ノ減少ハ純然タル私至清政至
管ノ取入トシテ見ルヘキモノナラス

以上ノ三条件ハ私至清政取入ヲ總復体クシニ於テ大切ナル莫ナルカ現今
之明國ノ前云私至清政取入ト云フハ嚴格ニ此ノ条件ヲ充タサ、ルモノ少ナ
カラス 森林ノ取入、鐵道ノ取入、セキ石モ然リ、屯田如此キ取入ハ樹木
之レヲ私至清政取入ノ中ニ數ハサル可カラス、何トナレハ其ノ至管ハ樹木
取入ヲ得ルコトヲ眼目トセル故ナレハ、蓋シ理論ノ純ナルモノヲ實際
ニ取ムルモノハ種キ故ナリ、取入ノ性質カ純私至清政ナラストモ主トシテ
私至清政ナレハ之レヲ私至清政取入トナスニ於テ懸シカラス 此ノ見地ニ
ヨリテ榮ムルトキハ此ノ私至清政取入ハ更ニ之レヲ動産ノ取入ト官林ノ取
入トニ區別スルコトヲ得

企業取入ハ採掘治金業ノ取入工業ノ取入商業ノ取入交通業ノ取入畜養ノ

取入ヲ分ツコトヲ得ルナリ

國家公共団体カ土地ヲ有シ農夫ヲ雇ヒテ農業ヲ営ムトセハ官有地ノ取
入ハ財産取入ト云フヨリモ企業取入トイフ方カ優レル如ク見ユルナリ、然
ルニ實際上如斯至管ヲ爲ス國ハ殆ト之レナキナリ、官有地ヲ有スルモ普通
ノ条件下ニ於テ之レヲ以テ之レヲ財產取入トシテ懸クナシ、官林ノ取入ニ
於テハ種林伐採ニ労働者ヲ雇ヒテ國家公共団体ノ事業ニ於テ之レヲ營ム
ハ、之モ、ナルモ其ノ取入ノ源リテ果ル處ヲ考フルニ至管ノ端不當ト云フニ
トヨリハ寧ろ森林ニ所有スルト云フ事實ニヨルモノ、至管ヲ以テ之レヲ財產
取入トスルモ不都合ナシ、財產取入ト企業取入トハ突ハ剛然區別シ得ス、
其取入ノ源リテ果ル至管ナル莫クテ區別スルニスキス

公至清政取入トハ國家公共団体カ取入有セル實格ニ於テ得ル所ノ取入

也、此ノ取入ハ私至管或ハ交換至管ニテ見ルヲ得サルモノニテ至管ニ強制取
入至管ニテ初メテ之レヲ見得ルモノナル故ハ或ハ之ヲ強制取入ト名付テ、
國家公共団体カ其ノ取入有シテ人民ニ施シ以テ取入ヲ得ル方法ニニツア
リ、國家公共団体カ其ノ自取ヲ違ハルタメ行動スルニヨリ之レニ附隨シテ

收入ヲ得ル其ノ一ナリ
B
国家公共団体カ軍ニ收入ヲ得ルノ目的ヲ以テ新設

収テ行使シテ一般人民ニ賦課スル其ノ一ナリ
前者ヲ行政収收入ト名付ケ後者カ所云租税ナリ

行政収收入トハ公義ニ辭シ得テ国家公共団体カ其ノ目的ヲ達スルため行動
スルニヨリ生シヌハ公堂造物又ハ公共設備公共機子ヨリ生スル収入ヲ總称
ハ、茲ニ云フ行政ハ司法、立法ニ對スル義ニアラス、国家カ政治ヲナシヌ
然御スル義ナリ、從テ茲ニ云フ行政収收入ノ中ニハ司法事務ニヨリテ生スル
収入ヲモ包含ス、行政収入ハ又ニレテ三種ニ区分ス、即チ手数料、分租金
并償金ニレナリ。

手数料トハ国家公共団体ノ行為ニ對スル特別報償ニテ具、行為ヲ促シ若
クハ煩ハス者ヨリ強制徴ニ望ムル公課ナリ

分租金トハ一定ノ營造物公共ノ設備又ハ公堂ノ機子ヲ使用シ若クハ之レ
ニヨリテ利便ヲ得ルモノ又ハ得ヘキモノニ對シテ其ノ至費ヲ分租セシムル
タメニ強制徴ニ望ムル公課ナリ
手数料ハ直接ニ国家公共団体ノ行為ヲ促シ又ハ煩ハス者ヨリ之レヲ望ム

分租金ハ公共營造物機子ヲ利用シ得ヘキモノヨリ望ムルモノナリ、
故ニ前者ニアリテハ国家公共団体ノ行為ヲ前提トシ台者ニアリテハ營造物
設備機子ノ存在ヲ前提トス

国家公共団体ハ其ノ目的達行ニ公共營造物設備機子ヲ設置シ、而シテ維
持シ出水管理スルコト、ナリ、分租金モ亦国家公共団体ノ行為ニ没交渉ナ
リトハ云ハサル可カラズ、其ノ国家公共団体ノ行為カ手数料、如ク直接ナル
モノニアラス、手数料ニ於テハ国家行為ハ一方ヨリ是レハ職務ノ行使ナリ
分租金ニ於テハ国家行為ハ直接ニ之ヲ行コトアリ、又アリトスルモ之レハ
職權ノ行使ト是ル可カラズ、如斯ハ手数料ト分租金トハ多少法異アルカ因
依公共団体ノ目的達行ヲ主トシ偶々之ニヨリテ特別ノ利益ヲ享受シヌハ
利害干渉ヲ有セルモノヨリ特別ノ報償トシテ望ムルニ至ルト同理ナリ、
學者カ所云特別報償ノ原則行ハルトハ之レヲ指示スルナリ
并償金ハ私人カ至ニ爲スヘキコトヲ爲サヌハ爲スヘカラサルコトヲ爲
セシタメ私人カ至ニ爲スヘキコトヲ爲サヌハ爲スヘカラサルコトヲ爲
テ前提トス、即チ国家ノ行為ニヨリテ其ノ初メテ并償ノ義務確定ス、

保シテ政府トハ異リ、生収ノ塩田ハ國家ノ行爲其ノモノニ存セスシテ却テ
個人ノ行爲ニ存ス、國家ノ行爲ハ專ニ年積金生収ノ事實ヲ明カニ認メ而シ
テ此法ヲ感シ或ハ処分ヲナスニテ、而ビ又年積金ハ分租金トモ異リ特別
ノ設備機關等遺物ノ至費ヲ夫弁スルタメニハ非ス、寧ロ一般公債或公課ニ
シテ直チニ中央公債庫ニ入リテ國家收入ノ形成スルモノナリ、其ノ五タルヲ
對出或ハ其以金トス

租稅ハ至費ヲ夫弁センカタメニ一般國民ヨリ強制徴ニ望收スルモノナリ
國家公債國庫ノ特殊ノ行爲特殊ノ營造物ノ設備機手ヲ考フレコトナシ、
從テ特別利益ヲ採ラ爾スルモノト然ラサレモ、トテ區別スルニトナシ、
以上ニヨリテ觀之國家公債國庫ノ收入ハ私至費收收入ノ行政收入及ヒ租
稅ニヨリテ形成セラルト云フ可キ也

私至費收收入ハ主トシテ所云私至費收原則ニ從ヒ行政收入ハ主トシテ特
殊設備ノ原則ニ從ヒ租稅ノ一般設備ノ原則ニ從フモノナリ
整理明白ニシテ疑フ處ハ余地ノキカセケレトモ實際ハ何レニ屬スルカ明
白ナラサレモ、ナシニモアラズ、殊ニ巨額諸中独占收性質ヲ帶フレモノ

中ニ於テ然リ、郵便、鉄道、造幣、煙草專賣等ヨリ火レ收入之レナリ、之
等ノ事實ニ於テハ國家ハ多少ノ差ハアレトモ資本ト勞カトヲ結合シテ一種
ノ企業ヲ形成セルモノト見ルヘキナリ、殊ニ又独占收ヲ有セルニヨリ見方
ニヨリテハ國家ノ特權ヲ行使セルヤニモ考ヘラル、之等ノ收入ノ性質ヲ區
別スルニ主タル目的カ何処ニ存スルヤ如何ナル原則ニ從ヘルヤヲ明カニス
ルヨリ外ナシ、而シ主タル目的カ管理ニ存スルヤ行政ニアルヤ或ハ課稅ニ
存スルヤヲ見テ定ムヘキナリ、

鉄道ハ現今文明國ニ於テ之レヲ固有トセルモ營利ヲ主タル目的トセリ、
勿論國有鉄道ニテリテハ独占價格ヲ課シ自由競争ニ於ケル賃金ヨリモ以上
ノ賃金ヲ定ムルコトヲ得ルモ國家ハ國民經濟政策ノ上ヨリ打算シテ独占價
格ニヨル賃金ヲ課セスシテ自由競争ニヨル普通ノ利益ヲ得ルニ満足セリ、
殊ニカハル低キ賃金ニ甘ンシテモ尚本且之レカ為メ鐵道收入ヲ行政收入ト
云ヒ得ス、

造幣ハ行政ヲ目的トシテ營利ヲ目的トセス、故ニ造幣料ハ總額タル行政
收入ト云フヘキナリ、郵便ニ至リテハ料金ノ定メ方ニヨリテ致經濟的收入

トモ為シ得ラレズ行政収入トモ為シ得ラル 現今文明国ニ於テ如何ニ取致
 ハル、ヤラ親ルニ當テ洋敵收入、エタ多クノ考案ヲ得ルニ主旨トモス
 寧ロ公衆ノ目敵ノノ、ニエテ行ハルヲ思ルヨシ、我ニ郵便、独占ハ所云行
 政敵独占ナリ、假セ郵便ノ公營ニ於テ多クノ利益ヲ生スルコトアルモ、尚ホ
 且私企消滅ニ至望セルモノト見ルコトヲ得ス、則余ノ多キハ畢竟之レヲ使
 用スルモノ、多ク結果ニ他ナラス、其ノ郵便ヲ見ルニ独占細格ニヨレルニ
 アラスシテ自由競争ニヨル細格ヨリモ極キ極ニ思ハル、故ニ現今ノ文明国
 ・郵便料ハ行政収入ト見ルヲ穩當トス
 専賣ハ所云行政敵独占及租稅敵独占ト云フヘキモノニシテ其ノ目敵ハ財
 政ニ下リ租稅ニアリ、故ニ専賣ノ目的物例ハハ煙草ノ細格ハ自由競争ニヨ
 ルモノヨリ著シク高ミ此ノ場合ニ於テ政府ハ行政敵ヲ利用シテ亦斯キ独占
 ナナシ競争者ヲ排除シテ私企至濟ニ於ケルヨリモ尚ホ多クノ利益ヲ得ントス
 レモノナリ
 之即テ但租主裁ナリ、故ニ専賣ノ收入ハ私至濟敵收入トモ行政敵收入トモ
 見得ス、專ニ公營ニ於ケル租稅ノ一部分ヲ得入ト云フ可キナリ

如斯ニ別テ為セシカ決シテ他種取別ニ非ス、只現今諸國ノ實際ノ收應
 ヲ鑑ミシモノナリ、世ノ推移セハ再ヒ異リタル性質トナルコト無論ナリ、
 昔時ハ道路橋梁ニ付キテモ高キ道銀獨錢ヲ坐收シテ之レヲ私至濟敵以ヘノ
 如ク課セラレキ、然レシコノ貨幣ノ額低クナルニ及ヒ使用料、主旨ヲラハレ
 テ行政敵收入トナリキ、故ニ核世道銀獨錢ヲ坐收セシテ收入ノ性質ヲ變ヒ
 ナシク道路橋梁ハ支出ノ方面ノミヨリ觀察セラレサレ可カラサルニ至レ、
 鉄道ノ如キモ現時ニ於テコソ私至濟敵收入トセルモ、將來何時行政敵收入トナ
 ルノ日ナシトモ限ラハレシ今日ノ如ク至濟敵ノ趨勢カ眞理ト認メラレ居
 レ以上ハ斯カルヨノ到着ハ恐ラク夢物語ナラム、郵便料モ現今ハ行政敵入
 ースルヲ穩當トスルモ、若シ國家カナルヘク收入ヲ得ンコトヲ努メテ之レカ
 公衆ノ目的ニ希フト否トヲ顧慮スルニトナギニ云テ人郵便ノ收入モ私至濟
 敵收入ノ性質ヲ帯フルニ至ルノ日モナク又甚タシキ租稅トモナルニ至ラム
 故ニ、如ク國家公團體ノ收入ヲ形成スルモノハ大体私至濟敵收入、行
 政收入、租稅トノ三種トナスヲ得、併シ就中至濟敵タルハ租稅ナリ、現
 在、財政ハ租稅ヲ得レラるアル能ハス、併シ租稅カ財政ノ中心トナルニ至
 二二三

リシハ古今ヲ通シテ然ラスシテ比較的近世ニ屬ス、
ニニ四
余ハ進ミテ收入ノ發達
ヲ研究セント欲ス、

第二章 收入ノ發達

財政ノ尸尺殊ニ歐洲ノ財政文ニヨリテ見ルニ古代ニアリテハ私經濟的收
入ニ官有地ノ收入ヲ以テ收入ノ中心トセルカ如シ、蓋シ昔時ハ公私ノ区
別分明ナラザリキ、國家ノ收入ト君主ノ收入ヲ區別セザリキ、國家ノ經濟
也與タハ君主ノ財產收入ヨリテ支拂セリ、而シテ君主ハ又侵略ヨリ或
ハ欠債傳來ヨリ莫大ノ土地ヲ所有セリ、故ニ之レヨリ收ツル收入巨額ニ達
セルヲ以テ比較的國家經濟ノ莫大ナラザリシ昔ハ君主所有ノ土地ヲ以
テ支拂スルニ不足ナカリキ、

然レ國家漸次膨脹シ征テ國費モ亦膨脹ヲ加ヘシカ他方ニハ君主ハソノ土地
ヲ墾田或ハ僧侶ニ分與シテ其ノ所有地亦減少セリ、故ニ官有地主有地ノ收
入ニテ國費ヲ充分支拂シ得ラレサルニ至ル、故ニ於テ特收收入生セリ、

Regalium ハラテン語、*Regalia* ヨクハツ、*Regalia* ハ普通
ニレヲニツニ分ツ、*Regalia maiora* 及 *Regalia mi-
nora* 之レナリ、*Regalia maiora* トハ性質上國家ノ最高
權ニ屬シ、*Regalia minora* ハ收入ニ利用シ得ル財政權ナリ、
特收收入トシテ論スルハ右者ナリ、*Regalia minora* ハ種
々種々ナシノラ合ミテ之レヲ學理的ニ分類スルハ困難ナリ、併シ其ノ起源
ヨリ考フルニ之等ノ *Regalia* ハ或ハ君主ノ地主タル權利ヨリ出テタル
モノアリ、或ハ純然タル財政的權利ヨリ出テタルモノアリ、

第一、君主ノ地主タル權利ヨリ出テタルトハ其當時ノ思想ヨリ見レハ君
主ハ領地ノ最高權有者ナリ、

所有權トハ地上ニ於ケルノミナラス地下ニ於ケル凡テノモノニ及フト
云フ、之レローマ法以來ノ觀念ナリ、故ニ當時ノ君主ハ土地ノ最高所有權
者トシテ地下ニ存在スル凡テノ物殊ニ鉱物ニ對シテ權利ヲ有スト考ヘラレ
テ之レヨリ然山時放生シ来レリ、故ニ於テ君主ハ自己ノ計算ニ於テ採掘ノ
業ニ從ヒ或ハ私人ニ採掘ヲ許可シテ之レヨリ採掘料ヲ徵收セリ、今日歐羅

此の頃國中ニテ國家カ鐵山ヲ所有セルモ、
 然レハ鐵山特權ノ遺物ナリ、
 然レテハ昔時ヨリ鐵山塩鉾ヨリ掘出シ溫泉ヨリ製出スルヲ普通トセリ、此ノ塩
 鉾ヨリ現時ノ塩、專売セラルナリ

土地ノ最高所有權ハ地下ニ及フハ前述ノ如クナルカ地上ニ及フモ亦其ノ
 論ナリ、故ニ山嶽ニ對シテハ特權權主シ河川ニ對シテハ河川權出テ未リ一
 定ノ開所ニ對シテハ稅關ノ特權生セリ、之レニ干渉シテ郵便生シ後テ郵便
 特權出テ未リ無キ物、君主沒收スト、特權生スルニ至リテ、次ニ政府上
 ヲリ未リシモノトシテハ特權特權ヲ考フルコトヲ得、即チ罰金ヲ科シ財產
 ノ沒收ヲナシテ收入トス、又造幣權ノ如キモ此種ノ特權トナスヲ得、尚木
 造ニテハ亮官ノ特權生スルニ至ル、或ハ又「ゴダヤ」人ニ對スル特權モ生セ
 リ、三等ハス一方財政特權トモ見得ラル、併シ尚木造ニテ稅關タル則政
 特權トモ見得ヘキモノ少ナカラス、例ヘハ君主ハ總家ノ財產ヲ相続スル權
 利ヲ有スルト云ヒ、又封建ノ臣下ニ對シテハ特權ニ臣下ノ死亡ノ場合其ノ未
 成年者ノ被見トナリテ財產ヲ管理シ遺族ノ生計費以上ノ收入ヲ取リ上ケル

此の頃國中ニテ國家カ鐵山ヲ所有セルモ、
 然レハ鐵山特權ノ遺物ナリ、
 然レテハ昔時ヨリ鐵山塩鉾ヨリ掘出シ溫泉ヨリ製出スルヲ普通トセリ、此ノ塩
 鉾ヨリ現時ノ塩、專売セラルナリ

Modern Conditions

工業ニテアリテハ國器或ハ鐵道、鐵道、硝子等ノ製造最モ多ク之レヲ見キ、
 之等ノ業ヨリ財政ノ收入ノミナシテ之レ等ハシニテ等口操業ニ場ヲ設
 ケテ民ヲシテ之レニ從ハシメントセシナリ、兩業ニ於テモ然リ具ノ銀行業
 如キ當時ノ遺物ヲ現存セルモノモアルナリ
 斯クシテ官業（公企業）ノ收入加ハルニ至ル、乍然三等ノ收入ハ無論收
 ハノ中心ヲナスモノニテハアラサリキ、故ニ昔時ノ財政ノ收入ノ中心ハ私
 王清敵收入ニテ是ノ後特權收入現ハレテ重キヲナセリ、云フコトヲ得、而
 シテ十八世紀ノ末ヨリ十九世紀ニ至リテ憲法政治行ハレ國業ニ干スル觀念
 一收スルニ至リテ財政收入ノ組織モ亦一變セサルニ至リキ
 然レニ至費膨脹ノ趨勢甚シクニ加ヘテ殊ニ然リ、從前財產收入ニ重キヲナ

ニニハ
セル官有地ノ收入、特収收入ノ如キハ衰フルニ至リ、殊ニ右者ノ如キ解體
シテ見ル夥モナキニ至ル、コハニ共ノ排段ノ狀ヲ成フヘシ
(特収收入ハ如何ニシテ衰ヘシカ)

最近世ノ國家ニ於テハ公収私収ノ思想用オトナリテ王ノ特収タル *Regal-
Reis* ハ嚴重ナ不透明ノ思想ヲ許サ、ルニ至ル、故ニ特収收入ノ思想ハ根
本ニ於テ覆サル、加之慈善ノ膨脹ニ伴ヒ收入ヲ多ク得ンカ爲メノ特収收入
モ漸次變更シ自動的ニ他ノ收入ノ性質ヲ帶フルニ至リシモノアリキ、斯ク
シテ以前 *Regalia* 取ニ經營セラレシモノモ右ニ混然タル私經濟的收入
トシテ官業經營トナリシモノアリ、例ヘハ採斂業ノ如キ三レナリ、又國家
独占シテモ尚且ツ營利企業トシテ經營セラル、モノモアリ、例ヘハ官鐵ノ
如シ、又或ルモノハ租稅的性質ヲ帶フル專賣收入ト推稱セルモノモアリ、
稅關取ノ關稅トナリシ如キ然リ、

以上ハ收入ヲ多クセントスルノ念慮ヨリ租稅若クハ私經濟的收入ニ進ミ
シモノナルカ其他ノ多クノ特収收入ハ思想變化ノ當然ノ結果トシテ行政收
入ニ殺リシモノモアリ、最近ニアリテ、王ノ特収ニヨリテ收入ヲ得シゴ

トヲ至トセシカ行政收入トナレハ國家ノ藏分ヲ行フヲ至トシテ收入ハ三ト
セルニハアテハ、收入ハ國家ノ行動ニ伴ヒテ自然ニ生ニタルノモノリ、故
ニ特収收入ヨリ行政收入トナリシハ、性質上ノ衰也ナリシト云フ可ヤ
リ故ノ狩獵特収、收入カ狩獵免許料トナリ造幣權、收入カ造幣料トナリ河
川ニテスル特収カ河川通航料トナリ電氣、收入カ電位、敷章下附料トナリ
シカ如シ、之等ハ國家ノ行動ニ伴ヒテ特別徵收ヲナスモノニテ手取
料カ然ラレハ分租金ナルモノヲナスモノナリ、移リ變リシモノ、外ハ其
他ノ特収收入ニ委リテハ全然廢止セラレタリ、故ニ今日ニ於テ昔ノ所云特
収收入ハ三ニテ見レコトヲ得ス

又中央歐羅巴ニ於テハ今日ニ於テモ造幣權、造幣特収、鑛山採權、
名ハ存スレトモ其ノ衰ハナシ、要スルニ特収收入ハ十九世紀ニ至リテ全然
解體セシト云フヲ得

近世憲法政治行ハル、ニ至リ公法私ノ別明カトナリ、漸次君主ノ財產ト
國家ノ財產トノ分ツニ至ル、故ニ一方ニハ君主ニ皇室至費トシテ年々一尺
額ヲ國庫ヨリ支出スルハ時ニ他方ニハ君主ノ私財トシテ思做ナレタル土地

森林ヲ高利トシ之レヨリ得ル収入ヲ國家ノ收入トセリ。斯クシテ成立セシ
モ、斯云以委済故收入ナリ、併シ君主ノ所有ビシエ地森林ハ時世ノ進歩ニ
從ヒテ減少セシハ可成、如シ、而シテ國有地トナリテ後述之漢火ノ收入ヲ
解レノ因進ナルハ給スル邊モナシ、兼ニ十九世紀ノ後半ニ自由主義至ル處
種ヲ斥シ得レノ國ニ官有地以下ノ發行シハ僅ニ國ニ取リテ皆ノ面影ヲ残存
スレニ過キナリノミ

官有地ノ收入ハ新ク、エク乘、シカ一方ニハ昔ノ特權收入ノ遺物ヲ集メ
他方ニハ *Wells Cantiliam* ノ公取トモ見ルヘキ諸企業ヲ承リテ
所云私委済故收入ノ領域ヲ拡大セシ感ナキニアラス、併シ斯ク、如キ官業
ヨリ乘ル收入モ亦近世ノ自由主義ニ風靡セラレテ大ニニ萎縮シ来リ到感近
世財政ノ中心トナルコトハ下可能トナレリ

以上ノ如ク特權收入ハ殆ト辭休シ僅ニ行政收入ニヨリテ皆時、面影ヲ留
ハシムルニ止マリ官有地收入ノ所云私委済故收入トナリテ發熱ヲ保ツニス
キス於茲財政ノ重キヲ負フテエツモノナカラサル可カラズ、之レヲ即テ租
稅ナリ

元來租稅ハ古來絶無ナリシニハアラハ、只今日ニ於ケル意味ノ租稅ナカ
リシノミ、租稅ト云フ言葉ハ存セシク之レハ君主ノ對人ル身屬スハ賣物ナ
ルカスハ君主ノ土地所有ニ對スル代價、如キ性質ヲ有スルニスキス、從テ
大抵賣物若クハ勞力ニ於テ之レヲ爲セシナリ、此ノ現象ハ固然至濟ノ行ハ
レシ當時ニ於テ當然ナリト云フ可シ、加ニ王有地ノ收入ヲ以テ國費ヲ充ス
ルコトヲ得タル時代ニ於テハ租稅ハ必スシモ財政ニ重要ナルモノナラザリ
シナリ、故ニ普通ノ場合ニ於テハ租稅ヲ望セス、臨時ノ場合例ハ、軍隊ヲ
派遣シ君主カ巡幸スルカ如キ場合ニ *Beiden petitionis tablin*
等、形ニテ都市並ニ寺領地ヨリ課税スルコトアリシモノナリ

之所云後世ノ直接稅、監聽ナリ、中世終建時代ニテハ終建君主ノ取トシテ
臣下ニ於テエテ王子、元服スル費用或ハ王女ノ結婚費又ハ王カ捕縛トナリシ
際之レカ賠償費ヲ支弁セシムルニト、ナリ居レリ、之レ所云當時ノ課稅ト
スル場合ナリ、

又國難アリシ場合殊ニ戰爭ノ時ニモ君主ハ課稅ヲ所有セリ、三候ノ費
用膨脹シ而シテ收入不足ヲ告フルニ至リテ臣民ニ租稅ノ承諾ヲ承ムルニ至
ニ三一

一 民族ニ於テナルコノ兼諾ハ政ニ於テハ十三世紀ニ於テ諸國一税レ十四 五
 世紀ニ至リ一級税トナレリ、然レトモ固ニヨリテハ十六世紀初ニ至リ初メテ
 氏商兼諾ヲ実行セシモ、モアリ、此新場合ニテモ最初ハ臨時税ノモノニシ
 テ其ノ形ハ *Balliages* *Tithe* *Tallies* ナリキ *Balliages* ハ國
 ニヨリテ異レトモ普通民衆之レヲ兼諾シテ一定ノ税則ニ從ヒシレ、*Tithe* ハ二配
 賦ニタリ、場合ニヨリテハ其ノ大部分越クハ全部ヲ土地所有者ニ課シタリ
 田舎ノ土地所有者ニ對シテハ其ノ土地、面積家畜ノ數及其ノ収益ノ標準
 一ニテ課シ都市ニ於テハ家屋ニ課セルカ如シ、
 兼諾之租税ハ昔ニアリテハ君主所有ノ土地ヨリスル收入其ノ他ノ收入ニ不
 足ヲ台ケシ場合ニ臨時税ニシテ之ヲ兼諾シナリ、政ニ多クハ民間ノ兼諾ヲ
 至シナリ、政ニ恒久税租税トシテハ其ノ多ク其ノ在ニナリキ、但稅力恒久税性質
 ヲ帶ヒ来リシハ中世、都市正權ニ云ハハ十七世紀頃ヨリ成リ、中世ノ都市
 ハ宛然今日ノ小國家ノ体ヲナシ、人口漸次集積貨幣經濟ヲ行ハル故ニ租
 税制度ヲ行フニ最モ適處セリ、加之都市ニ於テハ收入ノ源トシテハ官有地
 賦ハ特ニ少ク後ツコト多キヲ得ナリキ、故ニ租税ヲ恒久税ノ收入源トシテ是

一 可キ必要ニ迫ラレヨリ、恒久税ノ租税トシテハ先ノ直接税種ニ財產税ヲ
 以テ初メ而ル后消費税ヲ加ヘシ也、國家ノ租税トシテ恒久税性質ヲ帶ヒ
 来リシハ特權收入ノ變シテ租税トナリシモノニモ之ヲ見タリ、予稅ノ
 如キ然リ、后漸次行ハレシ税制ナリテ之レヲ國家ニ課シタリ、其ノ後專
 門政治ノ盛ナルニ及ビ國家財政愈々困難ヲ究メ推々、租税遂次起サル、併
 シ當時ハ未ダ整然タル系統組織ナカリキ
 一 整然タル租税制度ノ成近世殊ニ十九世紀ニ在リ
 一 近世殊ニ十九世紀ノ租税制度ハ時世ノ進ニシ政治思想、國家觀念ヲ導キ
 一 ナ勸興シテ来レル國民主義ヲ導キテ成立セシモノニシテ其影響ノ超
 勢ニ促サレテ終ニ運轉シテ止マザラントス、是ノ國家ノ成立ハ近世ノ時代
 思潮ナリ、之カタメ諸國ニヨリミレテ異ニスルニ許サス、法律ノ前ニハ人
 賦ハ皆平等ナリ
 一 之レカタメ特殊ノ階級ノ免脱ヲ許サス、近世ノ租税制度ハ普遍ニシテ平
 等ナルコトヲ旨トシ何レノ階級ニモ何レノ地域ニモ等シク行キ直リテ其清
 一 上富者ニ負荷モ分ニ委ニテ租税セシメ以テ其清收應ニ適處ニ當リツ國民公

資、祭連ヲ密セテラント努ム之輩、見地ヨリ租税ハ大体ニ权利税、交通税
ニテ之レヲ組成スルモノト云フ可シ

权利税ニ於テハ一概所得或ハ一概財産或ハ利益若クハ収益ヲ生スル源タ
ル土地、資本、營業等諸種、物価ヲトリテ之レニ課税シ消費税ニ於テハ諸
種ノ消費品ニ於テ内地消費税ヲ課シ外國ヨリ輸入品ニ関稅ヲ課ス、
交通税ニ下リテハ諸種ノ取引ニ課税スルナリ、如斯諸種ノ税ハ國民全
組織ニ深く侵蝕シ之レト爲ル可カラサルナリ、

國民全濟ヲ衰スト云フハ國民全濟ト共ニ共ニ衰進スルトノ主
旨ニハアラス、故ニ租税制度ハ國民全濟ヲ害スルモノヲ除去スルコトニヨ
リテ次第ニ其ノ進歩ヲ見ルナリ、故ニ入市税、内地關稅、通過税ヲ廢スル
如キハ皆著シキ例ナリ、然ルニ國民全濟ハ故ニ進歩シテ止マズ又通過税ノ
進歩、信用ノ発達、資本ノ増加、技術取引所、取引、繁榮、農工商ノ至富ノ
進歩等皆其ノ徽章ナラザルハナシ、新ク、如ク國民全濟ハ進歩スレカニレ
ト公認ニ國民所得、分配ハ依之日々變化シテアルナリ、故ニ租税制度ハ
又コノ國民全濟、進歩コノ國民所得分配、變化ニ隨伴シテ進歩シ、且ツ變

化ス、其ノナリ、故ニ租税制度ハ新ク變テ進歩シテ果進シズ必改メ
進歩シントシツ、アルナリ

前述ノ如キ租税制度ハ日ヲ進フテ進歩シ於テ收入ハ年々進フテ増加ス、
而シテ租税收入ノ増加ハ誠ニ故フヘキコトナルカ夫貴勢展、趨勢ニ併行
セラル、ヤ否ヤカ之レ近世諸國ニ於ケル新政治上、大内閣ナリ、

又過去ノ形式ノミヲ見ルニ東亞ハ併村シ露示居ルナリ、思フニ今日ノ國
家ハ租税ヲ以テ收入ノ中心トナス、之レ等フ可カラサル事實ナリ、然ルニ
今日ノ國家ハ租税ノミヲ以テシテハ膨脹シテ止マサル至貴ヲ夫ノルニ足ラ
サル如ク見ユ、故ニ尤ニ自由、經濟ニ格テ去リシ舊有地官業ニ於テ未練ノ
余ヲ起スニ至ル、蓋シ之レト同シキモノヲ得ストスルモ新ラシキモノヲモ
出スルニ至ルニ至ルニセントノ傾向ヲ生ス、コノ新傾向ハ角ニ官業ノ上ニ現
出シ未練中流シヤハ鐵道國有ハ新傾向ナリ、鐵道國有、一國ノ全濟政策
ノ故ヨリ是ルモ理由アルモノナルカ又新政治上、收入ヲ得ルト云フ手段ニ於
テ是ルニ於テモ亦大ニ必要ナルモノナリ

鐵道國有、新ラシキ潮流生シ其ノ他、官業漸次當マレ未練私至濟政收入

ハ又海軍カヲサルモノトナルニ至ル。法ニ中政制ニ於テ然リ *Wagner*
 ハ独逸ノマニニ復納ラ呈シテ曰ク、故ニハ私之者故收入多シ、コトヲ
 減スハ民ハ租税ノ重キ負担ヲ免ル。之レ故ニノ意味ナリト、ニノ言解ヲ以
 テ私之者故收入ニ於テ新ラシキ理論ヲ暗示セルモノナリ。如斯私之者故
 收入ハ國家ノ收入トシテ重シセラレシカ、コト思ハ殊ニ自治体ニ於テ盛ナ
 リキ。故、電車、瓦斯燈等ヲ只納リ市又ハ、之レを管テ人レキ一則ナリ、
 斯ナル場勢ハ故ニ私之者故制度ニ於テ見ルノミナラズ、專制制度ニ於テモ之
 レヲ見ル、專制制度カ如何ニ各國ニ於テアリツ、アルカヲ見ヌ、如何ニ榮
 テ極メテ盛、煙草ヨリ乃至酒、煙草、アルコールニ及レツ、アルラ見レ
 ハ思半ニハキサルモノアリム
 專制ニ前述ノ如ク課税ノ一方法トモ見得ルナリ、從テ専制ノ收入ハ租税
 收入ノ一形式ト見テ差支ヘナシ、然シ資本労働ト結合シテコレヲ至當スル
 コトニ重キヲ置キテ見ルニ營業ニ似似コレ矣アリ。昔テ專制テ也ノ營業ト
 混同シテコレヲ云義、營業ト名付ケタランニハ其ノ云義、官業ハ曰々其ノ
 範圍ヲ云ムルニ至ル。現時ノ大勢ナリト云フ可キナリ、之レヲ、
Wagner

ヲ觀察シテコロノ迷ケ路ニ足ラサル可カラサルカ如クセルナリ

斯クノ如ク見レハ今日ノ財政ニ於テモ又近々將來ノ財政ニ於テモ私之者
 故收入ノ大減、營業ノ收入ヲ輕クス可カラサルモノニテ且又次第ニ重キヲ
 加ヘントスル傾向アルヘキモノナルコトヲ知ル可キナリ。斯ノ云フモ私ハ
 租税ノ收入ノ中盤ヲ形成スルヲモマン、スレハナラズ、却テ此世諸國ノ
 財政ノ收入ハ租税ノ云フ大黒柱ノ一ニ立テレモノアルコトヲ詳言セン。故
 ス、私之者故收入ハ之レヲ補ヒ助ケ居ルモノナリ
 故上ニヨリテコレヲ觀ルニ收入ノ發達ニハ凡、三時期アルナリ。第一期
 ハ官有地ヲ中心トセル時代ナリ。コトヲ云ル、所云 *Pomranin*
Wirtschaft、時代ナリ

第二期ハ *Regal*、現ハレ来リニ時代ニテコトヲ云ル、所云 *Regal*
Wirtschaft、時代ナリ、予ハ故リニコレヲ特權收入時代ト名ケン
 第三期ハ租税ヲ以テ中心トセル時代ニテ余ハ故リニコレヲ租税時代トイハ

第一期ハ政ニ於テハ中世ニ於テ之レヲ見

第二期ハ近世ノ初ヨリ十八世紀ニ至ルニテ之レヲ見

第三期ハ最近世ニ於テ之レヲ見ル

第一期ニ於テハ財政論未タ見ル可キモノナカリシ時代ナリ

第二期ニ於テハ *Kammerrat* ナカメラリストノ理ハ近世ニシ

第三期ニハ近世ノ財政學法セシナリ

然ラハ私入ノ発達ハ全時ニ新政治ノ發達ヲ示ス。蓋シ財政學ハ如何ニ収

入ヲ得ハキカハ志モ主要ナル向題トスルヲ以テナリ、學府ニ依レハ財政學

ヲ收入學ナリトスルモ亦反面ノ真理アルヲ知ルナリ

(*Kaige*) (項ノ入爲大臣) 專ラ財政學ヲ收入ノ學ナリトス

第三章 私經濟的收入

第一節 總論

私經濟收入ハ前ニモ述ハシ如ク國家公共團體ノ私人ノ資格ニ於テ私經濟ノ原則ニ從テ行動シ財產及ヒ公業ニヨリ獲得スル收入ナリ故ニソノ經濟上ノ性質並ニ至者政策上ニ於ケル種々ノ向題ハ至者論又ハ至者政策ニテ擴張スヘキナリ。乍然既ニ國家公共團體ノ收入ニナス以上ハ財政學上ニモ亦之レヲ不問ニ附スヘカラス。然ラニ國家公共團體ノ財產ヲ所有シ又ハ企業至管ニ于テハ學說モ政策モ時世ノ進歩ニ從ヒテ變化シテ来ル

前ニ述ハシ如ク近世ノ始ニ於テハ *mercantilism* 人イニ

行ハレテ國家ノ企業及官業盛ニ起ル。自由放任ノ主義一モヲ執靡スルニ至リ。國家ノ其ノ所有セシ財產企業ヲ私ヒ下クルニ至ル。然ルニ此ハ政策ニ殊ニ社會政策學派勢カヲ占メ諸國ノ政策ハ官業私下ヨリ一軌シテ官業維持ノ方針ニ移ル。其ノ尤モ甚クシキモノハ中世政。独逸ノナリ。如斯事ニ於テハ大明諸國ハ私至者論專業ヲ管メトモ併シ今日ニ於テモ此ノ政策ヲ批准スレモノナキニアラス。批准アレハ從テ年護說モ生ス。今其ノ批准年護ノ說ヲ兩ニ併セ看ハ見ム(經濟論叢。官業整理ト財政參照)

國家ノ財產ヲ所有シ或ニ企業ヲ經營スルコトヲ是認スルモノハ曰ハノ國

家及公天國体ノ至費ニ充用セラレ、モノナルカ故而至濟政收入ノ額大ハ少
クトモ租税ノ負担ヲ減少シ得ルモノナリ、國家ノ至費カ愈々大トナリ租税
ノ賦課カ愈々増トナル際斯クハ如キ私至濟政收入ヲ設ケテ一率ヲ補フコト
ヲ得レハ國家ハ惡税ヲ廢シ獨テ人民ノタメニ大イニ負担ヲ輕クスルコトヲ
得、之レ私至濟政收入ノ財政上ノ長所ノ一ナリ

次ニ國家ノ財産ノ一ノ準備基金トナルコトヲ得、之レハ國家等ノ信用ノ
基礎ト見得ラル、モノナリ、國家ノ財產カ大ナルハ大ナル程國家等ノ信用
カ高マリ泰ルモノニシテコレ具ノ長所ノ一ナリ

國家公共団体ノ財産ヲ所有シ企業ヲ經營スレカタメ或ハ一國ノ國民全濟
ノ利益ヲ増進シ或ハ財産ノ分配ヲ調整シ或ハ官吏労働者ノ地位ヲ改良スル
コトヲ得、斯フニテ初メテ至濟政策上社會政策上ノ目效ヲ達スルニ至ルニ
レ長所ノ一ナリ

之等ノ議論ハ官有財産又ハ官業ノ長所ヲ尋クルモノナルカ又今日ノ文明
諸國ノ政策ヲモ非議スルニ足ル、第一ノ長所トセル莫ハ左程重要視スヘカ
ラス

國家公共団体ノ信用高マリ從テ公債ノ相場上騰スルハ寧ロ國家公共団体
ノ所有スル財産又ハ官業カ大トナルニヨランヨリモ國民ノ富大ニシテ而カ
モ財政環境ニアリト云フコトニ依ルトモ重大ナリ、從テ之ノ觀察ヨリスル
財政上ノ長所ハ余リニ重大視スヘカラス

國家公共団体カ財産並ニ企業ヲ有スルコトニ對シ之レテ攻擊スルモノア
リ

其ノ反對論ノ一ニ曰ク國家公共団体ハ其ノ財産又ハ企業ニヨリ收入ヲ得
ルトスルモ其ノ之レヲ有シ又ハ管メタメニ起シタル公債ノ利子ヲ夫故ハサ
ル可カラサルヲ以テ彼是利益スル所少ナシ、如ク財產並ニ企業ヲ管理シ少
クトモ又其ノタメ起セシ公債ヲ管理スルニモ官吏ヲ要シ事務ヲ複雜ナラ
シムル故ニ之等ノ費用ヲ控除セハ結局利益ナシト、併シ此ノ論ハ誤レリト
ト思考ス

現今文明諸國ノ有スル財産企業ヲ見ルニ至營費利ヲ差引キテモ尚木利益
ヲ余スモノ少ナカラサレハナリ
又對論ノ二ニ曰ハク國家公共団体ノ財產管利企業經營ハ私人ノ管理並營

ヨリハ多クノ費用ヲ要シ而モ以ナル利益ヲ収ムルニ止コル、
一方ニハ複雑ナル監督機手ヲ必要トシ他方ニハ官吏ハ自己ノ利益ニ係
ナキニ依リ概ニ乘シ危険ヲ冒シ敏捷ニ働クコトナアレハナリト、コノ実カ
最モ多ク官業ニ向テ加ヘラル、駭撃ナリ

併シミレモ亦制限シテ見ルヘキナリト考フ

國家公共団体ノ企業カ之レニ直接ニ利害ヲ感セサレニヨリ営マル、
コトハ論者ノ云フカ如クナレトモ情シ長矣ハ今日ノ資本組織ノ代表トモ見
ル可キ株式会社ノ経営方法ト根本性質ニ於テ異ル所ナシ、会社ニ於ケル至
營方法及監督方法ヲ國家公共団体ノ企業ニ移シタルトキニハ論者ノ云フ如
キ優ハ除カルヘシ、又國家公共団体ノ營ム企業ハ時々刻々変化スル事情ニ
適応シ処置ヲ採ル如キ性質ノモノニアラスシテ一定ノ事務規定ヲ規定シ之
レニ從ヒテ官吏カ行動スレハ司ナリト云フカ如クナランニハ又討論者ノ批
准ハ免レ得ヘシ、彼ノ森林鉄道電気瓦斯等ノ丞堂ハ之レニ詠出ス
其ノ三ニ曰ハク官有財産又ハ官業ハ自然官吏ノ數ヲ増加スヘキ必要起ル
之レヲ行フニハ政府ノ権カニ從屬スレハノ増ス謂ナリ、

政府ノ権カニ從屬スルハ、多キハ議會ニ多ク、政府尙書ヲ送ル結果トナ
ル、又官業ニ從テ官吏ハ廉潔ノ士トモ限ラス、故ニ賄賂ヲ取ルニ至ルニレ
何レモ憲法ノ裁ナリ

併シ官業ヲ増加シテ、又直テニ議會ハ政府尙書ニテ滿タサレレコト、
モナラズ、又官業ニ從テ若シカ報酬ノ行爲ニ與ルコト、モ斷ニ推シ、官
業ト憲法政治ノ運用トヲ連結スルハ即チ極短ト思惟ス

其ノ反對論ノ四ニ曰ク官有財産ハ以テ私人ノ利用ヲ奪ヒ而シテ官業ハ民
業ヲ圧迫スト、然レトモコノ論モ亦誤レリ、官業ハ臣業ヲ圧迫スルトハ官
業ノ存在スル尙ハ民業起ラス、又官業ヲ取下クシテハ民業從テ起ルト鮮歎ス
ハシト考ヘレトモ之レハ民間ノ企業ハ民間ニ屬スル尙題ナリト思フ、民間ノ企
業ハ大ナルハ官業存ストモ民業起リ民間ノ企業心ニシケレハ官業ヲ取下ク
ルトモ尚且ツ民業起ラサルヘシ、官業ノ取下ハ單ニ經營者ノ移転ニスキ
ス、故ニ取下ヲ受ケシ資本家ヲ利スルニ至ルト云フコト、ナル、如斯論ヲ
ナス者ハ官業カ十分ノ利ヲ収ムル場合ニ之レヲ民業ニ移シテ大イニ利セン
トスル資本家ノ団体ナリ、即チ大イニ為ニスル理論ト云フヘシ

業ニハ官有財産並ニ官業ニヨリテ主スル収入ハ益濟上ノ景不景ニヨリ増減スルモノナリ、從テ予案編成上ニ困難ヲ感ハ其ノ収入カ國家公共團體ノ全体ノ収入ノ中ニテ比較的ニ少ナカラサル場合ニ於テ殊ニ然リ、國家公共團體ノ最モ多額ノ公費ヲ要シ從テ多額ノ収入ヲ得ントスル場合ニハ一例ハハ戰爭ノ如キ場合ニ却テ此種ノ収入ハ減少シ甚シキハ皆乘ニ至ルノ

カナルヲ以テ財政上依頼シ難キモノナリ *Mexico Bern*
コノ及討論ハ多少真理ヲ含ム吾人ハ *Peckham* 財政ニ於テ最モ好適例ヲ見ルニ全國ニ於テハ然道其ノ他ノ私至清收收入大ナルカ或ハ、石炭ノ価格上騰スルニ從ヒ或ハ不景氣ノ襲来ト共ニ三等ノ收入大イニ減シ之カケメニ財政困難ヲ来セシメ、此ノ事情ヲ見ル、故ニ官業並ニ官有財産ノ比較的多キ國ニテハ此ノ如キ變ニ備フルタメニ平時ヨリ準備スヘキモノナリトス

以上ハ人ノ以テ官有財産官業ノ短所トシテ列挙スル所ノモノナルカ未タ以テ全廢スルノ理由トハナラス、短所ハ多少之ナキニハアラスト雖モ之レニ變ル長所モ三有リ、故ニ可成短所ヲ除去シ之レヨリ得ル収入ニテ租稅負

ハ租稅負擔ノセントスルコトハ一國ノ政策上最モ當ノ得ノルモノナルヘント云フハシ

故ニ命ハ國家カ所産ヲ有シ官業ヲ有スルコトヲ以テ適當ナリトス、然シ命ハ社会主義者ノ如ク總ハテノ資本或ハ企業ヲ譽テ國家社会即チ中央ニ移サントスルニアラス、之レハ自ラ限界アルヲ極ス然ラハ限事人如何即チ一般國民ノ至濟上ヨリ社会政策上ヨリ之レヲ決ス可キナリ

コノ出發点ヨリ觀察ヒシニ第一ニ独占事業ハ官營タラシムルコト可ナリ其ノ所云資本收得ノ場合ニ於テ事實上國家カ之レヲ官營スルコト不可能ナル場合ニハ國家ノ民間ノ独占ノ一角ヲ破ルニ足ル可キ事業ヲ官營スル必要アリ、

第二ニハ自由競争ニ致仕セハ國民益濟上有益且必要ナルモノヲ充分ニ供給シ得サルカ又ハ進ンテ害毒ヲ流シ至濟上ノ進歩ヲ妨礙スル恐アル場合ニハ之レヲ官營トスルカ可ナリ

第三ニハ民間ノ至營ヨリハ國家ノ至營ヲ以テ一級國民至濟上ハ有益トシ社会政策上ハ正当トスル事業ハ之レヲ國家公共團體ニ留保シ置クヘキナリ

第四ニハ国家重要ナル財ヲ自己生産ノ法ニヨリア升セントスル場合ハ之
レヲ官業トスルカ可ナリ

一四六

第二節 私至済的收入各論

第一款 財産收入

財産收入トハ國家公團體ノ財産ニヨリテ得ル所ノ私至済收入ナリ所云
所義ノ *Domanium* ヨリ生スル收入アリ *Domanium*
トハ公器ノ所云 *Domaine Prive* 伊語、*domanico*
privato (fiscale) 以テ *Finang*ニ *Verborgem*
ナリ
Domanium ハ本義ニテハ凡テ官有財産ヲ含ムコノ *Finang*
Verborgem ノ外ニ公天ノ營造物其他ノ設備ヲ包含ス、例ハ道路
河川、橋梁、公園、兵營、軍庫、軍營、函書館、博物館、学校等ナリ、ハ中

マテハ *Domanium* ニ付テハ *Domaine public* ヲ
Publico トス
之等ノ財産ハ益壽的收入ヲ生ゼシムラテ例トス、例々之レヲ生スルモノ
リトモ之レハ所云使用許即テ行政收入ナリ、我団ノ官有地取扱規則ニモ
官ニ屬スル公有ノ土地ト官ニ屬スレ私有ノ土地トノ二種ニ區別セリ、之レ
ハ官有地ニ付テハ *Domaine public* *Domaine*
Prive トヲ分テシモノト云ナラサルナリ
益ニ輸スル財産收入ハ *Domaine Prive* 若クハ *Finang*
Verborgem ヨリ出ツルモノナリ、財産收入ヲ分テテ動産收入ト不動
産收入トノ二種トス

第一項 動産收入

動産收入トハ基金資金或ハ有価証券ヨリ得ル收入ナリ
第一基金ノ收入
基金トハ不時ノ急ニ充テヌル其他特別ノ目的ヲ達スルタメ設ケラレ、ノ

一四七

Fund 有り基金ハ債金ノ形ニ於テモ之レニ積ムコトヲ得入正貨ノ形ニ
 モ之レヲ積ミ得。証券ノ形ニ於テ基金ヲ積ムコトハ一應年費スルヲ得ト
 七等ニ必スシモ當ヲ得タルコトニ非ス。之レヲ新政 *Political* *Teckts*
middle ノ上ヨリ見ルニ此ノ如クニシテ和立トシ基金ハ管理費用多クニヨ
 ヲ之レヨリ得ル利子ヲ少クシ或ハ是レトシニ逆クルコトモアリ。即チ管
 理費カカ取利ノ額ヲ超ムルナリ。而シテ基金モ証券ノ形ニ於テ積立テテハ
 共ニ取用ヲ全カラシムル能ハサルモノアリ。例ハハ戦争準備金ノ如シ。最
 シ非常ノ場合ニ備フルコト十分ナラサル故ナリ。故ニ於テ現金ノ形ニテ積
 立ツルニ至ル

現金ノ形ニテ積立テテハ利子ヲ生ゼス *Fund* アリテモ動産収入アリト
 モ云ヒ得ヤルナリ。故ニ *Fund* ヲヨリテ之レヲ中央銀行ニ預入レテ利
 益シメハ国策動意ヲ買入ル。モ、モヤルナリ。然レトモ實際動産カ戦争準
 備金トシテハ尚木通セストハ懸念ノ如シ。或國ニハ戦争準備金ナルモノナ
 シ。教育基金單艦水雷艇補充基金準備基金トナリ。之レ所謂三基金トシテ
 知ラレ前ニ看ハ平時ニ於テハ其基金ヲ消費スルコト能ハス。最後ノモノハ

時ノ必要ニ應シ取用スルコトヲ得。併シ戦争ノ如キ場合ニハ之レヲ戦費ニ
 充用スルコトアルハ過去ノ証上ニ坐シテ昭カナリ。故ニ此ノ基金ハ戦時
 準備金ニ変形スルコトアリト云フコトヲ得。之ノ他或國ニテハ基金ノ名ヲ
 以テスルモノニ對價債還基金アリ。ミレ所云減債基金トシテ知ラル。ミレ
 即チ國債ノ元利ヲ支払フタメ年々一撤會計ヨリ一定ノ収入ニ組入レテ作
 タル。基金ニテコレニヨリ収入ヲ得ヘキ性質ノモノニアラス

第二、基金ノ收入

資金ト云フハ事業ノ主管又ハ會計ノ管理ヲ便宜ナラシムルタメ特別ニ設
 ケラル、資金ナリ

其ノ資金ヲ支出スル場合ニハ多ク現金ヲ以テスルカ普通ナルカ候ニ或ハ
 之レヲ土地建物機械其ノ他ノ設備ニ即シテ不動産ノ形ヲトルモノアリ。故
 ニ之等ノ財産ヨリ生ズル収入ヲ動産收入トスルハ穩當ナラサル場合起ル。
 或國ノ作業者別會計ニ屬スル資金ヲ以テ殊ニ然リトス。專管局造幣局印刷
 局製鉄所。炮兵工廠。銃械製造所帝國鐵道電信燈台用品製造所等
 ノ資金ノ如キモノナリ。

三、等、資金ヨリ生ズル収入ハ專ラ事業ノ収入トナリ行政ノ収入トナリ
 又官業ノ収入トナルモノナリ、作業者組合計ノ外ニアル所云資金特別会計
 ナリ成ヌルモノハ官業ノ官営ヲナシ、モノトハ云ニ得ヌ、従テ官業収入ハ
 一、官業ノ中ニハ動産収入ヲ主スルモノアリ、又等及官営國營基金、如
 シ、二、資金中ニハ土地變換等基金、三、官営モノノアレトモ現金公債其ノ
 他ノ証券ヲ包含ス、現金公債其ノ他ノ証券ヨリ生ズル収入ハ動産収入ナリ
 次ニ國ニヨリテハ外國ノ金融ノ資金ヲ積立テ居ルモノアリ、外債ノ利子ヲ
 夫私人ノカタメナリ、然ルニ其ノ資金ハ之レハ死蔵ビオシテ其ノ金融ノ中
 心地ニ於ケル銀行ニ預入レヌハ其ノ他ノ大蔵省証券ヲ預入レ、コトモアレ
 ムヨリ又一ノ動産収入ヲ生ズルナリ

第三項 債券ヨリ生ズル収入

官債証券ハ資金基金ヲ積ム一ノ形式トシテ國家カ之レヲ有スルコトアル
 ハ前項ノ如シ、然ルニ國家ハ此ノ資金基金ニ何等關係ナクシテ有価証券ヲ
 買入ルコトアリ、國家カ金融政策ノ必要上殊特ノ株式公社ノ株式ナル場合
 由テ之レナリ、其ノ株式ヨリ生ズル収入ハ即チ動産収入ナリ

第四項 南滿洲鐵道ヨリ生ズル得ル配当金ノ如キ即チ此ノ一例ナリ

第二項 不動産収入

不動産ノ収入ハ官有地官林ヨリ生ズル収入ヲ指ス、飯山ノ収入モ亦一種
 ノ不動産収入トモ見ルコトヲ得ルモ其ノ収入ハ至當ニ負フ所多キヲ以テ官
 業収入中ニ論スヲ豫當トス

第一、官有地

官有地ノ以テ論ズルニモテテ國家公共團體カ土地ヲ有スルヲモシトス
 否ヤラ見ントス
 自由主義ノ論ハ國家公共團體ノ土地ヲ有スルコトヲ非難ス、併シ又放任
 主義トノ論ノミニテハ充分ナル理由トスルヲ得ヌ、社会主義者ハ私有地ヲ
 非難ス、之亦極端ナリト云フヘシ、國家公共團體カ土地ヲ有シテ可ナリヤ
 否ヤハ總科政ニ依リテトヲ得ヌ、時ト依トニ從ヒ生産分配ノ上ヨリ考ヘ
 テ之レヲ決スヘキナリ、併シ 國家公共團體カ土地ヲ有スル以上ハナ

レハノミレテ手放リスミテ所有スレヲ可ト入味ニ都市等ニ於テ然リ、又改
地ニ移民ノ目改ノノメニ國家カ或レ地賦、土地ヲ有スルハ當テ得タルモノ
ト云フ可シ例ハハ其ノ官有地ヲ賣却スルハ或レ小作ヲナサシムテ其ノ目録ヲ
賣スルコトヲ得ルカ改ナリ

土地ノ管理ニシテハニノ方法アリ

一ハ自己至清法ニシテハニノ方法ナリ

自己至清法ハ歐羅巴ニ於テハ中世ヨリ十八世紀ノ始マテ專テ行ハレ
タリ、其ノ當時ニ官有地ヲ管理セル官庁ハ其ノ土地ヨリ利益ヲ取メソレ
テ國王ニ進納ニモタラシマレモ其ハ之レニ止マラズ、尚ホ強テ買リヌハ地
方警察ノ事務ヲモ司リタリ、此ノ自己至清法ハ自己ノ計算ヨリナスモノ
ニシテ自己利益ヲ買フヲ改ニ次ノ三条件ニ支配セラレサルヘカラス

(4) 自然公濟ノ行ハレル時ナルコトヲ要ス

(5) 租放改農業ノ行ハレ、トキナルコトヲ要ス

(C) *the open field* トノ条件々安定故ナルコトヲ要ス

然ルニ進歩セル所ニ於テハ自然公濟行ハレズ貨幣公濟行ハルハ、ノミナラ

人農法モ *the Farmhouse* ヲリ *intermediate* ニ進ミ市場モ種々

ニ変動ス、故ニ自己至清法ハ現代ニ適セス、故ニ官有地ヲ有セル國人等

ニノ方法即チ賣下方法ヲトモニシレリ

(四) 賣下方法ハ又小作法トモ称ス、分テテニトナス

永小作ノ定期小作制度之レナリ

永小作制度ハ相續人モ同一、小作料ニテ小作スレヲ得ル小作制度ナ
リ、此ノ制度ニアリテハ永小作ハハ、殆ント土地ヲ所有スル公シテ只
小作料カ永久ニ土地ノ負担トナルモノナリ、國家ヨリ云フ時ハ其ノ小
作料ヲ永久ニ確定徴收入トナルナリ、此ノ制度ノ最モ行ハレシ歐羅巴
ニ於テハ十八世紀ナリ

此フニ農産物ノ価ハ自然ニ騰貴スル傾向アリ、土地ノ価モ從テ自然

ニ騰貴ス、然ルニ永小作制度ニヨル時ハ國家ハ之レニ從テ收入ヲ増加

ハレテ得ズ、故ニ此ノ制度ハ自然ニ廢セラレ定期小作制度ニ移ル、定

期小作制度ハ小作契約ニ一定ノ期間ヲ附スルモノナリ、ソノ制度ハ其
ノ國ノ農業發達ノ程度ニヨリテ公シカラム、歐羅巴ニ於テハ殆ント百

手ニテ年々其限トセラレシカ次第ニ縮減セラレテ三十大トナリ十八年
ハナレリ *Prussianische* 農法ノ行ハレシ所ニ於テハ小期限ハ尚ホ
短キモノナリ。此ノ制度ニ於テ小作人ヲ定ムル方法ハ種々アルカ之レ
ヲ分テテ述ボナス

(12) 政府ヨリ小作人ヲ自由ニ撰取スル方法ナリ

農ノ私利ノ不平等ヲ以テ極マサリシ專制君主時代ニ於テハ且ツ此セ
シモノナルカ近世法律ノ思想發達シ權利平等ノ觀念盛トナルヤ此ノ方
法ハ總テアルニ至レリ。ヨリテ競争入札ノ方法起レリ。之レハ至ニ
他ヨリ或キ小作料ヲ申出テ政府ハ最高ノ小作料ノ申出者ニ小作ヲナサ
シムルモノナリ

然ルニ此ノ理想敢ニ行ハレサルカ故ニ撰取主義ヲ加味スルモノ起
レリ。之レハ國家カ必スシモ最高ノ小作料ノ申出ヲナスモノニ小作ヲ
ナサシムル義務ナリ。之ニ稍々高キ小作料ノ申出者同ニ撰取ヲ行フ、
即チ撰取トスルトキハ政府ノ取扱ノ各地アルカ故ニ偏頗ノ説クルヲ免
レズ

定期小作制度ニ於テハ小作人度々變々土地ノ改良ヲ行ヒ得サル欠
生スル如シ。併シ歐羅巴ノ實際ニ於テハ小作人ハ多ク契約ヲ改新シ甚
タシキハ其ノ子ニ及ヒ斯ナル要ナシ。之レ歐羅巴ニ於ケル官有地ヲ有
セル國家ノ一般ニ採用セル所以ナリ。官有地ノ收入ハ今日ニ於テハ小
作料ヲ以テ主ナルモノトス。乍併其他ニ官有地ノ管理ヨリ生スル副收
入アリ

第二 官有林ノ收入

國家主ニ公共團體カ森林ヲ所有スヘキヤ由ヤ之レヲ在クニ置スルニ
初メハ森林ハ官有ナリ *Europe Romanium*
在又ヨリ見ルモ始メハ *Romanium*、大部ヲ形成セリ。ソ
ノ森林地ハ狩獵地或ハ牧場トセルニ過キス。十八世紀ヨリ木材ノ利用
盛トナリ森林カ大當局者ノ利用スル所トナレリ。故ニ昔官有林トナリ
シモノカ時勢ト共ニ低下ラレ私林ヲ成セリ。國ニヨリテハ官有林殆
ントナク私林ヲ主トシテ見ルニ至レル所モアリ。故ニ今日ニ於テハ
森林ヲ官有トスルヤ私有トスルカノ向懸甚レリ。之レハ一國々民各各

ハヨリ或ハ社会政策財政上ヨリ定メテ可カラス。愚クニ森林ハ第一ニ木材ヲ生シ木材ト建築ノ用ニ供セラレヌハ燃焼料ニ供セラレ遊シテハ製鉄其ノ他ノ工業用ニ供セラレ。天明ノ進歩ト共ニ需要ヲ増ス。然ルニ森林ノ至堂宜シキヲ得サレハ木材ノ欠乏ハル恐レアリ。故ニ一國ヨリ是ルトキハ木材ノ欠乏ヲ予防セザル可カラズ。之レハ内河船運ノ看破セル所ニシテ今日莫ニ其ノ必要ヲ見ルナリ。

次ニ森林ハ雨及空中ニ潤養ヲ得テ氣候ヲ緩和ス。又水ヲ吸飲シ保留シテ除クニ流下スルノ力アリ。故ニ森林ノ存在ハ洪水ノ憂ニ防キテ予防ハ。故ニ森林ハ森林ハ止モラス一國ノ農業ニ影響ヲ及ホスモノナリ。森林ハ水源ノ存スル所ナリ、水カ源ヨリ發シテ低キニツケハ其地ニ力ヲ發シ其ノ力ハ應用セラレ、片ハ工業界ニ影響ヲ及ホス。水力電氣ハ其ノ好適例ナリ。

以ニ森林ヲ治ムルハ今日ノ電氣時代ノ工業ニ必要ナルコト、ナルトモ此ノ森林ノ公益ハ短日月ノ間ニ成ルモノニアラス。一〇〇年ノ後又

ハニ〇〇年ト一定不變ノ方式ニヨラサル可カラズ。然ルニ斯ナルコトハ目前ノ利ニ走レル私人ノヨク成シ得サル所ナリ、私人ハ猶モスレハ濫伐シ山ヲ禿トナシ其ノ結果ハ雨ノ浸透ニ土砂ヲ流シ河川ヲ堰メ堤防ヲ破壊シ洪水ヲ生ス。而モ私人ハソノ因果ヲ察シ知ラス。偶々洪水ニ依リ田畝ヲ失フモノハ不運者トシテ悲シムノミ、然レニ向題ハ私人ノミニ限ラズ政府ラレタル堤防ハ之ニテ修築スハク之レニ由レハ國家並ニ公共団体ナリ此處ニ至リ財政ノ向題トナル。

我國ニ於テ府県ニ土木費ノ存スルハ河川ノ災ノ結果ナリ之レヲ避ル時ハ山林ノ治マラサル結果トナル。故ニ山林ヲ治ムルハ地方財政ノ改メナリ。以上述フル所ニ依レハ森林ハ私人ニ所有セシメテ至當スルヨリモ國家及ヒ公共団体ノ之レヲ經營管理スルニ不都合ナリヤト云フニ然ラズ森林ノ至堂宜シキニ依リて *Stewardship* ノミニシテ之ヲノ電氣資本ヲ肩スルコトナク又之ノ勞力ヲ要スルコトナシ、只永キ至費ヲ肩スル事向改管識ヲ要シ之レヨリ至當スルヲ發シ環境改トス、而シテ其ノ至當ハ大體ヨリ云ヘハ簡單ニシテ時ニヨリ變ムヘキモノニアラス。

以ニ一定、規則ヲ定メテキハ、官營ニ何等ノ因進ヲ惹スルコトナシ、
又國家公共團體ハ大企業模倣ニ官營ナルコトヲ得ルカ故ニ私人ノ官營ヨ
リ遙ニ思ル可キモノナリ

以上論スル所ニヨリテ見レハ森林ハ國家公共團體カミレテ所有スル
ヲ以テ最モ合理ナルモノト云ハサル可カラズ、故ニ余リニ官林ノ林下
ヲ行フコトハ當ヲ得タルコトニアラス、進ンテハ模倣アル毎ニ森林ヲ
買上ケレドトモ亦好政策トナルナリ

官林ヲ如何ニ利用スヘキカハ森林ノ所有向題ニ論シレヨリ當然生ス
ル結果ナリ、即チ官林ハ國家公共團體カ自ラミレテ官營シ管理スヘキ
モノナリ、森林ハ大規模ニ官營スヘキモノニシテ莫下方法ニヨル可
カズ、官林ハ國家公共團體カ自ラ官營セサル可カラズト、コトキハ之
トニ當ル可キ特別ノ官方必要ナリ、コノ特別官方ハ内務省又ハ農務省
ニ附屬セシムヘキナリ、然ラハ如何ニ官林ヲ官營スヘキヤト云フニ
第一ノ方法ヲトルヲ要ス

第一、官營ニ計圖ヲ定メサレヨカラス、官營ノ計圖ハ森林ノ期向成

不、種類、量等森林ノ官營ニ對シテ細目ヲ定ツルヲ云フ、カ、ル計圖
ハ森林統計ニヨリ又年々木材ノ成長、木材ノ種類年數ノ大小等ニヨリ
テ之レヲ定ツルモノナリ

第二ハ木材ノ処分方法ヲ定メサレヨカラス、昔ノ制度ニアリテハ、
國家自ラノ需要ヲ滿シ余剩ラ売却スルコト、セリ、最近一報ニ用ヒラ
ル、方法ハ全体ヲ売却スルヲ主トセリ

森林ノ官營ハナレハク多ク利益ヲ以テシテトス、之レハ私受者ノ
見地ヨリスル當然、然論ナリ、乍然此ノ主義ハ常ニ必スシモ國稅スヘ
キモノニアラス、何トナレハ森林ヲ官營スルニ當リテハ國家ハソノ職
分ニ顧ミテ最大ノ利益ヲ差シ私ハサルハカラサルコトアリ、例ヘハ滋
賀セラレタル土地ヲ買上ケテ之レニ造林スル場合ノ如シ、カクスルト
キハ全部ノ森林成入ヲ減スルコト、ナル、係ニ滋養セル林地ヲ莫ノ終
絶ヲ置テ時ハ國民至濟ニ望ニシキニトニアラハ、山ノ繁茂セルコトハ
氣候、農業、工業ニ重大ナル關係ヲ有セルコトハ遠慮セル如キ林ナル
ヲ以テ國家ハ賅分トシテ林地ヲ保存スルニ意ムサル可カラズ、又國家

再探ノ妥當ニ於テ他ノ私利ヲ示テ、ル可カラズ、故ニ官林
王宮ハ常ニ最大利益ヲ目故トシテ進ムコトヲ得ス

第二款 官業ノ収入

第一項 採鐵業

英羅巴ノ大明國ハ鐵業ヲ有スルモノ少ナク、
持取ヨリ来リタルモノナリ、故ニテハ既ニ十二、十三世紀頃ヨリ王ノ
國民ニ至盛ヲ委社シテレヨリ報酬ヲ得ヌハ悦ヲ私ハシメ居タリ
私蘭巴ニ於テモ鐵山持以、早クヨリ認メラレタルカ十七八世紀以テ王
ニレテ借下ア高價ナル採鐵料ヲ支給ムセタリ
仙蘭西革命ノ時ニ鐵山ハ國有ノモノナリト宣言ヒラレ、
ハレ者ニハ許ヨラナレ同時ニ一定ノ料金ヲ課スルコト、ナレリ、
英羅巴ニ於テモ王ノ鐵山持以一般ニ課メラレタリ、王ハニレテ人民ニ貸

英ニ西キ料金ヲ課セリ、十五、六世紀以テ來地ニカ採鐵料ハ大地所有權ニ屬
スルモノトシテ專ニタルカ *Charters* ニ依リテ課税セリ、
鐵ニ於テハ王ハ之レヲ保護セリ、之レハ鐵山ハ富ナリト、
Warrant ヲ國稅セル結果ナリ

以上ノ如ク歐羅巴、諸國ニ於テハ何レモ鐵山持取ヲ存セサル國ナカリシ
カ其ノ後人民ノ權利ニ移レルモノアリシカ所ニ產業自由認メラル、
ニテモ採鐵ノ自由認メラル、ニ至ル、國家カ鐵山ヨリ得ル收入ハ大ニ減
ズリ、美以ノ如キハ殆ントナヤニ至リタリ、併シ只中央歐羅巴
ソニア爾太利、牙利及露西亞ヲ以テ最モ然リトス

以上ハ國家カ鐵山ヲ所有セルニトカ鐵山持取ヨリ生セルコトヲ休テ速ハ
ソルカ後本現在ノ國家カ鐵山持取ヲ有スルハ他ノ異レル原因ニヨル、
ハ即チ私法上ノ獲得ナリ、私法上ノ獲得トハ國家自由契約ニヨリ鐵山ヲ買
上ケタルナリ、之レハ最近ニ於テ獨ニ政策ニテ最モ名高キモノナリ、
然ラハ、何故ニカ、ル政策ヲトルヤト云フニ第一ニハ國家カ之レニヨリ、
或至濟政策上ノ職分ヲ充テサントスルニヨリ、國家ハ斯クシテ私至濟ニ於

ケル自由競争ニ影響ヲ及ホシ或ハ之レヲ制限セントスルナリ
 又ハカルナリ一ノ存セリ所ニテハ兵ノ中ニ入リテ以テ地位ノ帶ヲ得メニ
 トスルニアリ、廢ニシテハ國家ハ鐵山ヲ所有シテ國家ノ他ノ私至治事業ノ需
 要ヲ充サントスルナリ、例ヘハ、國家カ官有鐵道ヲ在營セルタメニ石炭ヲ
 得鐵ヲ得ントスルカ如シ、斯クストモ國家ハ私人ノ在營セル鐵
 業又ハ鈔業ヨリ成立スルコトヲ得、亦モ鐵山ヲ買ヒタルモ國家ノ要スル
 テノ石炭又ハ鉄ヲ供給スルハ困難ナルコトアリ、然レトモ國家ノ自己生産
 ハ自己需要ヲ充タスニ於テ非特ニカメアルモノニシテ財政上大ナル意義ヲ
 有スルモノト云ハサルヘカラス
 以上論スルニテ近世ノ國家ハ鐵山ヲ買ヒタルニトテ許セサルカ故ニ鐵
 山ヲ有セル國カ之レヲ私下クル如キハ累モ當ラ得サル政策ト云ハサル可
 ラス

鐵山ノ在營ハ空ニク自己ノ在營アレ可シ、或營ノ目的ノナルヘク多クノ
 取ハテ得ルコトニ存セサル可ラス、國家ハ此ノ場合ニ於テ私及治ニ於テ
 テル至治事業ニ從テ作作國家ハ一面ニ私人ト異リ又ノ職分ヲ有スル故ニ鐵
 山ノ在營ニテシテモ此ノ職分ヲ認スコトヲ志ルヘカラス、由テ國家至治上
 ノ眼地ヨリシテ採鐵ヲ制限シ價格ヲ調節スルコトヲナスハク工夫等ニ對シ
 採鐵政策ヲ行フコトニ心ヲ用ヒサル可カラス

國家ハ採鐵ト同時ニ冶金ヲ營セテ營ムコトヲ得サルニアラス、昔時ハ之
 レヲ行ヒタリ、之レハ一ツニハ私人ノ在營ゾク之レヲ補ハントセルニヨリ
 一ツハ模範ヲ示サントセリ、今日ニ於テハ模範冶金場ヲ建ツル必要ナク、
 故ニ國有ノ冶金場ハ之レヲ建ツト見ス、又現今ノ國ニハ製鐵場ヲ有セリ、
 歐羅巴ニ於テハ塩ハ鐵製スルニ於テハ、具ノトリタル塩ヲ以テ國家カ
 塩ノ專賣ヲナス、塩ノ專賣ノ行ハル、國ニ於テハ國家ハ鐵製及製鹽所ヲ有
 スルヲ便トス

第二 鹽 官 業

採鐵及製鹽等ハ一營ノ工業ト見得ラレサルニテラサルモ之レハ皆鐵山
 ニ關スルモノナリ、然ルニ鐵山ニテ採ナク國家カ鐵業ヲ營ムニトナキニア
 二六三

今ハ、從前ニアリテハ、工業ノ性質ヲ有セシカ
 今日ニアリテハ、國家カ工業ヲ營ムニ之自由競争場ニ立テ優越權ヲ有スルニ
 非ス、コレヲ起源ヨリ云ハハ *Commerce* 英國ノ官工業ハ *Domani-*
num 中ニ存セシ工業ヨリ来リシモノアリ又 *mercantile*
 造物トシテ茂レルモノアリ、ス一ツハ模範工場トシテ生セルモノアリ、
 模範工場ハ技術故ニ云ハ、教育故性質ヲ有シ之レニヨリ國家ハ國民經濟上ノ
 職分ヲ低サントス國ヨリ派至待遇利益ヲ重シトセス、故ニ模範工場ハ時ニ
 ヨレン人何等ノ収益ヲ見サルコトアリ、甚タシキハ國庫ヨリ補助ヲセサレハ
 独立シ得サルモノアリ、只特殊ノ工業ニ限リ財政上ノ收入ヲ生スルモノア
 リ
 現今政府ハ諸國ニ於テ營マレ、官工業ノ生ナルモノハ陶器製造紙張、製
 造美酒、製造學業ノ製造印刷業等ナリ
 我國ニ於テハ官工業ト稱スルモノ少ナク、印刷業、海軍工廠、砲兵
 工廠ハ東京、大阪、若松、製鐵、電信、燈台用品製造所等ナリ
 國家ハ印刷局ヲ自營スル權ヲ有ス、國家ハ自ラ多クノ印刷物ヲ要スルノ

ミナラス官報ヲ發行スルヲ以テ印刷局ノ作業ハ必ナカラズ
 之レヲ民間ニ委ネンカ、國家ハ之カタメニ多クノ金費ヲ投シサルヘカラス
 由リテ國家カ自營スルハ重大事業ニ他ナラス
 海軍工廠、砲兵工廠モ亦全一ノ理由ニヨリ説明スルヲ得、海軍ノ需要ス
 ル物件ヲ自ラ計置ニヨリ獲得セントスルニ他ナラス、製鐵所ノ至營モ亦之
 等工廠ト同シク思ルヲ得、製鐵所ハ明治二十九年ノ創業ニカ、リ明治三十
 四年ヨリ一部ノ作業ヲ開始セリ、日露戰爭後ニ第一期ノ拡張ヲナシ明治四
 十三年ヨリ第二期ノ拡張ヲナシ今年毎三萬噸ノ製鐵廠ヲ有シ、次期第三
 期ノ拡張意圖中ナリ、亦來製鐵所ハ軍器ノ独立ヲ計レタメニ生シタルモノ
 ニシテ、故メ民間ニ於テ進シテ企ツルモノナキニヨリ政府自ラ斯カル事業ヲ
 經營シタルナリ、給メハ、素ヨリ大規模ノミナリシカ、明治四十三年ニ始メテ利
 益ヲアケテ日ハ二百万以上ノ收入ヲ得ルニ至レリ
 電信燈台用品製造所ハ通信省ノ需要スル品ヲ自ラ生産ニヨリ得ントスル
 モノニシテ、等ノ事業ニヨリ政府ハ民間ト等ハントスルモノニアラス

第三項 官 商 業

二六六

官商業ハ之レヲ普通商業ト銀行トニ分テア見ル可シ
 普通商業ハ時々利々商機ヲ得ヘテ進ミ行カサル可カラサレモノニシテ行
 政官カ此ノ局ニ当ルハ必スモ遠セズ、其ノ商業ハ一種ノ投機ノ性質ヲ有
 スルカ故ニ時ニ大ニ損失ヲ生スルコトアリ、故ニ財政上ヨリモ之レヲ避ク
 ルヲ正当トス、銀行業ニ付テハ之レヲ官營トスルヤ否ヤハ一ツノ尚慮ナリ
 國家公共団体ハ大ナル信用ヲ有スル故ニ銀行業ヲ營ミ得サルニアラス、市
 町村カ貯蓄銀行ヲ營ミ國家カ兌換券發行銀行ヲ營ムハ又一志ノ理由ナキニ
 アラス、併シ國家ハ財政上ノ急ヲ免レンタメ銀行ヲ利用シテ民間ノ至滯上
 ノ要求ヲ緩ニスルヤモ計ラレス、之銀行業ノ官營タルニ反対ヲ起ス理由ナ
 リ、歐羅巴ノ諸國ニ於テハ國家ノ至營スル銀行ハ諸般ニ之レヲ見ル、之レ
 ハ昔ヨリ証券ノ產物トシテ發ルモノナリ、即チ民間ニ資本少キハハ國
 家カ自分ヨリ進ンテ銀行ヲ起サ、ル可カラサル事情アリシモノナリ、國家
 カ銀行ヲ營メル國ニ於テハソノ銀行ニ國家財政、銀行收買券ヲナサシムル

ニトテ得、例ハハ國家ノ公債ニ于スル事務、金庫ニ于スル事務ノ如シ、ク
 、ル銀行ヲ有スル國ハ第一ハ露西五ナリ、露西五ハ兌換券發行ノ中央銀行
 華族ノ土地銀行庶民ノ土地銀行普魯西也、
See Handelskurve

又 *Bayerische Handelsbank* 等ナリ
 兌換券發行銀行ヲ國營トスヘキク又ハ私立ノ中央銀行トスヘキカハ國民
 至濟上策上重要ナル尚慮ナリ、今日文明國ノ趨勢ヨリ見レハ私人ノ中央銀
 行制度ヲトレル如シ、又ヨシヤハ例外ナリ、元來兌換券ハ正貨ノ代用ナ
 スモノナリ、故ニ貨幣ニ代フル可キ兌換券發行ノ如キモ國家ノ特權ノ一ツ
 ナ行ヘルモノト云ヒ得ラル、サスニハ國家カ兌換券發行銀行ヲ營ムコトハ
 理論上批准シ得サルカ如シ、然ルニ國家カ兌換券ヲ發行スル銀行ヲ至營ス
 ルトキハ自己至費ノ不足スル場合ハ幣ニ兌換券ヲ發行スルコト、ナリ、至
 濟上、必要ニ至ニ民間ニ融通スルコトヲ後エワシニスルカ故ニ兌換券銀行
 ノ親銀行タル職分ヲ尽シ難キコトアリ、此処ニ於テ今日ノ文明諸國ハ之レ
 ナ私立ノ中央銀行ニ委スルコト、セリ
 私立ノ中央銀行ヲ兌換券發行ヲ委ストスルモ其ノ兌換券發行カ造幣權ノ一

二六七

即ち同様スルモノト見得テ、以上ハ兌換券発行ニヨリ行ハル、利益ノ一部、國家モ亦ニレテ得。故ニ後ニ利潤分配ノ説起ルノ、利潤分配ニハ二方法アリ

(一)ハ直接利潤分配ニシテ (二)ハ間接利潤分配ナリ

直接利潤分配トハ國家カ中央銀行ノ兌換券発行ニヨリ得ル利益ニ付テ直接ニ分配ヲ受ケタルモノナリ

間接分配ト云フハ國家カ配当ヲ受ケルモノト等シキ地位ニ立ツ方法ナリ其ノ間接分配方法トシテ知ラル、モノハ課税即チ兌換券行税ヲ課スル方法ナリ、併シズ一方ヨリ云ハハ兌換券行税ハ交通税ノ理論ニヨリ、ソコニ関税カアルト見テ課スルモノニシテ之レヲ利潤分配ノ一方法ト見ルハ穩當ニアラス、其ノニハ無利子借入及ニ低利借入ノ方法ナリ、國家カ無利子ニテ中央銀行ヨリ一定ノ金額ヲ借入ル、トギハ其ノ利子ニ付ハル額ハ中央銀行ヨリ配当ヲ受ケタルト全シ方法トナル、低利方法ノ場合モ亦皆同一ニ論スルコトヲ得

第四項 交通業ノ收入

官業ノ交通業ニシテ最モ重キヲナスハ鉄道業ナリ、鉄道業ニ付キテモ國有ニスヘキヤ否ヤノ問題アリ、此ノ問題ニ付キテモ自由主義論者ハ之レヲ否定セントスルモ只簡單ナル自由論ノミテハ此ノ問題ヲ解スルヲ得ス、鉄道ハ元素独占的性質ヲ有ス、所云自然独占ナル上資本的独占トナル傾向ヲ有ス、若シ之レヲ私有ニ委ストキハ鉄道会社ハ自然ニ合同シ小資本家ノ支配ノ下ニ屬スルコトナル、斯クストキハ小資本家ノ資本家ハ多數ノ利ヲ得ンタメニ *monopoly price* ノ理ニヨリ比較的高價ナル運賃ヲ定ムルコトナル、如之一定ノ商人等ト結ヒテ之ニハ運賃ヲ割引シ他ノ商人ヲ不利益ノ地位ニ陥入レ競争スルコトヲ得サラシムルニ至ルコトアリ、之レハ一國ノ國民經濟上ヨリ見テ非常ナル害悪ト云ハサルヘカラス、故ニ鉄道ハ國民經濟上ノ見地ヨリ高ス又國有トナスヘキ理由充分ニ存ス、次ニ又財政上ヨリ見ルモ鉄道ヲ國有トナスヘキ理由存ス、國家ハ鉄道ノ運賃ヲ定ムルニ於テヨシ独占價格ノ利ニヨラス安低ノ運賃ニヨリ甘ンストスル

三内ハ鉄道ノ公營ニヨリ多クノ収入ヲ得、國庫ヲ利スルコト少クナラス、
 之レカ文明諸國ノ準ニテ鉄道ヲ國有ニ移シ行フ所以ナリ、實際上ニ於テ鉄
 道ノ収入カ公營ノ國家ノ収入ノ上ニ非特ナル多クノ割合ヲ有シ殆ント私營
 者收收入ヲ代表スルを得ラル、故ニハカ鉄道ヲ以テ近世ノ *Dominion*
 ト稱ス、鉄道ヲ國有トスルノ正当ナルハ既述セリ、併シ文明諸國ノ鉄道ハ悉
 ク國有ニナレリト云フニアラズ、尚ホ私存トシテ行スルモノモアリ、更ニ
 私存國有並立セル國家モアリ、近世諸國ノ文明國、鉄道部ハ私存制公私存
 混交性及國有制ノ三トスルコトヲ得

第一私存制ヲトレ國ハ極メテ少ク例トシテ愛宕村、四六利加等ナリ、愛水
 一テハ *no division* *abroad* 非特ニ蓋ナルヲ以テ此種鐵道
 ニ於テ鐵道ハ私立会社ニヨリ建設セラレ公營セラレ、然レトモ為政家ハ鐵
 道ヲ國有トス可キコトヲモラサルニアラズ、故ニ實際ニ國有ニ移サント欲
 シタルコトノ上ナキニアラザルモ、意ノ如クナラザルハ鐵道会社ノ努力大
 ナルカ故ナリ

第二公私混交性及私存ト公存トノ中間ニアルモノナリ

鐵道カ私存ヨリ國有ニ移ルト云フハ大体ノ制度ニヨリ云ハハミレハ、
 暹羅カ私存アリト云フヲ得、暹羅後時代ニアル制度ト云フモ、其ノ間ニ自ラ程
 度アリ、亦モ私存制ニ近キモノアリ、(仏蘭西、如シ)一或ハ之レニ及シ亦モ
 國有ニ近キモノアリ、(埃太利、如シ)現今埃太利ノ有セル鐵道ハ公營ノ鐵
 道ノ一割ニ分ラズ、スル南西埃太利ノ中間ニアルモノアリ、(露西亞、
 利ノ如シ)露西亞、勿芽利ニ於テハ國有鐵道ハ全鐵道、三分ノ二ニ及ハリ、
 故ニ此ノ國ノ鐵道ハ全鐵道ノ以南西ヨリ埃太利ニ近ク、從テ國有制度ニ近キ
 モノト云フヘシ、混交制ハ公國ヲ除ク外私存制ヨリ國有制ニ近シ、將來ニ
 於テハ愈々私存制ヲ減シ、然タル國有制ニ移ルコトハ疑ナキコト、意惟ス
 第三ニ國有制ヲトル國ハ、*Italy*、*Belgium*、*Holland*、*Switzerland*、*Denmark*、*Sweden*、
Finland、*Rumania*、*Serbia*、*Bulgaria* 等ナ
 リ此ノ中ニ於テモ初メヨリ國有鐵道主義ヲ一貫セル國アリ
Denmark、*Sweden*、*Finland* 等ナリ併シ、
 クハ私存制公私混交制ヨリ後リ、或ヒルモノナリ

二七二
我國に多少の木札有鐵道ヲ見サレニハアヲサレモ殆ト大邦八國有鐵道ナ
ルカ故ニ混合制ヨリモ寧ロ自有制ト見ルヲ穩當トス、

鐵道ニ關シテ國家カ收入ヲ得ル方法ハ三アリ、

(一) 収益ノ分配ニテツカレ方法ナリ、即チ國家カ鐵道會社ノ株券ヲ有シテ
レヨリ配當ヲ受クルモノナリ、故ニ其ノ性質ハ動産收入ナリ、從テ此欠
ニ云フ(國家ノ有スル鐵道ノ)收入ニアラス、

(二) 國家鐵道ノ資本ニヨリ年々償還料ヲ得ル方法ナリ、コノ方法ヲトル國
ハ幣ニ還償ノ決定ニハ參與セリ、之レハ至管者カ悉リニ還償ヲ高クシテ
自ラ巨利ヲ博シ國民經濟上ノ損害カ計ルヘカラサルモノトナル故ナリ、

資本方法八年々一定ノ收入ヲ獲スモノニシテ財政上非難シ得サルカ如キ
之時世ノ進歩ニ從テ收入ヲ増加スルコトヲ得ス、又之レヲ借リテ經營ス
ルモノカ鐵道ノ經營ヲ行ハス、動モスレハ之レヲ破壞シテ返還スルコト
アリ、故ニ此ノ方法ハ次第ニ捨テラル、ニ至レリ、依リテ

(三) 自己經營ノ方法起レリ、今日ノ文明國ノ鐵道ハ多クハ此ノ方法ニヨレ
リ、國家カ自ラ鐵道ヲ經營セントセハ自ラ大方針ヲ定メサルヘカラス、

只財政上ノ見地ヨリセハ多クノ利益ヲ得ルコトヲ經營ノ一方針トセサル
ヘカラス、然ルニ多クノ利益ヲ得ントセハ独占價格ノ理ニヨリテ還償ヲ
定メサルヘカラス、カクストキハ國民經濟ト調和シ得サルニ至ル、由
テ多少制限ヲナスコトヲ要ス、其ノ制限モ亦程度ヲ超ユルヘカラス、運
賃ノ多キニ過クルコト却ツテ不可ナリ、蓋シ鐵道ニ於ケル投資ハ大ニシ
テ所云布設費營業費ハ次第ニ増シツ、アルカ故ニ相當ノ還償トシテ多少
剩餘ヲ國庫ニ收ムル如ク經營セサルヘカラス、

次ニ鐵道ノ經營ハ独立スルコトヲ方針トセサルヘカラス、即チ鐵道ノ
費用ハ少クトモ鐵道ノ收入ニヨリテ兼スル方針トセサルヘカラス、只單
事鐵道又ハ示曉地ニ布設スル鐵道ノ如キハ此ノ限りニアラス、鐵道經營
ノ独立ハ之レヲ布設ニ付キテモ當テ兼ムルコトヲ得、即チ鐵道ノ布設ハ
鐵道ノ收入ヲ以テ兼シ若シ公債ヲ起スカ如キコトアル場合ニハ其元利
ノ如キハ後ニ生スル鐵道ノ收入ヲ以テ之レニ當ルト云フカ如ク我國ノ鐵
道特別會計ハ原則トシテ此方針ヲトレリ、係シ歲計ニ剩餘アルトキハ之
レヲ鐵道布設費ニ充ツルコトハ決シテ不當ナラス、鐵道主管獨立ノ方

計八國ヨリ鉄道細カ完成セナル前ニ云フコトニシテ之レカ完成セル後ハ
無意義トナル 蓋シ鉄道ノ收入ハ鉄道公債ノ元利ヲ支払フモ尚ホ剰余ヲ
生シ之レハ国庫ニ移スニトシテ得ルカ故ナリ 國家カ鉄道ヲ所有シ全管ス
ル一ツノ理由ハ財政上ニ其ノ處ニ置マシメトテ其ノ利ニシテナリ

普通鉄道ニ於テモ理論ニシテ電氣鉄道ニ必用ナルヲ得 故ニ電氣鉄
道ハ政府ニ委ヌルニヨリモ公有トスルヲ可トス 然ルニ實際ニ於テハ私有
制公有制公私混交制アリ 在ニ此處ニ公用制ト云フモ國家カ之レヲ有シ
經營セルモノハナシ 普通人都市カ之レヲ全管セリ 然シ國家カ電氣鉄
道ノ區域ニ入り之レヲ所有シ之レヲ管スニ受ルモ原則上思ヒト云フヲ得
又都市カ電氣ヲ全管スルニハ其ノ動力ヲ得ル可カラズ 都市ハ自ラ此
動力ヲ得ントシテ電氣所ヲ起シ之レヲ全管スルニトテ生ス 電氣所經費
セラルトキハ都市ハ電力ヲ他ニモ供給スルコトナリ 電氣事業公營
ノ由願起ル 思フニ電氣事業進歩シ鉄道ニモ電氣ヲ用ユルニ至ラハ國家
カ電氣官有ヲナスコトモ必スシモ空想トナラスト思惟ス
汽船ニヨリ運輸事務ハ政府事業トシテハ適當トセズ 海上ヲ航行スル

コトハ政府ニ任セテ之レヲ管スルニ適當セズ 故ニ普通之レヲ私立会社ニ委ヌ
然ルニ多ク島ヲ以テ國ヲ為セル所スハ一國カ海外ニ殖民地ヲ有セル所ニ
テハ之ニ等シ島々ノ連絡スルタメ又母國ト殖民地ヲ連絡スルタメニ定期
航路ヲ設ス必要ヲ生ス 然レニ之レヲ以テ航海会社ニ委ヌル時ハ利益ナ
キ必スハ定期航路行ハレサルニ至リ推テ私立会社ニ補助金ヲ與フル結果
ヲ生ス

之レ國家カ航海業ヲナサ、ル結果ナリ

沿岸航海及内地ノ水上航海ニ付キテハ前者ノ如ク危險ハ大ナラザレト
モ國家事業トシテハ適當トス 只國有航路ノ連絡ヲ容易ニスルタメニ國
家カ之レヲ管スルヲ便利トスルコトナキニアラス 一カカル場合ニ國家カ汽
船ニヨリ運輸業ヲナセルコトアリ 然シ在ラ今日ノ實際ノ狀態ニ於テハ
ハ財政上必スシモ收益ヲ得ルモノニアラス 却テ國庫ヨリ補ハサルハカ
ラサルモノアリ
之レヲ要スルニ汽船ヲ以テスル運輸業ハ財政上重大損失ハカラサルモ
ナリ

第五項 富籤ノ收入

富籤ハ歐洲諸國ニテハ王ノ特權トシテ行ハル、後ニ其ノ性質ヲ変シテ今日ニテハ私經濟的收入トセリ、富籤ニ於テハ國家ハ一方ニ於テハ掛金ヲ取入レソレヨリシテ經營費富籤ノ金額ヲ引キ去リテ多クノ剰余ヲ得ルコトヲ期ス、コレ私經濟的原則ニ從フナリ、富籤ヲ行フ國ニ於テハ私人之レヲ行フコトヲ禁シテ國家自ラノミニ留保スルコトアリ、

サレハ富籤ハ徵占トナル、斯ノ如クスルモ收入ノ私經濟的ナル性質ヲ變スルモノニアラス、又國家ハ富籤ノ事實ヲ見テソレヨリ私人ノ租稅能力ヲ推定シテ交通稅ヲ課スルコトアリ、或ハ富籤ニヨリ利得スルモノニ富籤稅ヲ課スルコトアルカニハ租稅問題ニシテ私經濟的收入ヲナスモノニアラス、此所ニテハ單ニ私經濟的企業トシテ觀察セントス、

富籤ト云フハ一人ト多數ノ人トノ向ニ從ハル、賭事ニシテ籤或ハ款ヲ引キ若クハ偶然ノ事實ノ發生ニヨリ掛金ノ損失利得金ノ獲得ヲ決定スル仕掛ヲ云フ、此処ニ云フハ一人トハ賭博ノ言葉ヲカレハ親ニシテ富籤業者ニシテ

今吾人ノ論マレ場合ニ於テハ國家ナリ多數ノ人ハ從價ヲ得ンタ、富籤興業ノ相手ヲトナリ、尙坐ヲ掛クルモノニシテ若シ決定ノ偶然ノ事實發生ハルトキハ當リ金ヲ得求ムルモノナリ、富籤ハ物品ニ付テ之ヲ行ハル、モノナルモノ多クハ金貨ニ從テ行ハル、此処ニ云フ國家ノ富籤ハ勿論金貨富籤ナリ、國家ノ富籤ヲ分テテ三トス

第一ハ所云階級富籤 *Richmann's Stempel* 二於テハ全體ノ富

ノ富籤ト半籤 四半籤率ノ種々ノ大キサニ分テテ一定額一テ之レヲ賣却スル當リ籤ヲ得タルモノモ之レニ應ジ金額半額四半額等籤ノ大サニ比例シテ當金ヲ得、其ノ籤ノ発売抽籤ハ一年ヲ放期ニ分ツ各期ノ富籤ヲ賣ルニ初マリ抽籤ニ終ル、第一期過クレハ第二期ニハル如斯一年ノ富籤興業ヲ放期ニ分テ継続シテ之レヲ營ムテ以テ *Richmann's* ト云フ

抽籤日ニハ于係事務員立会ヒ公開ノ抽籤所ニ於富籤番号車中ヨリ番号ヲ引キ當リ籤番号車中ヨリ當リ籤ノ金額番号ヲ同時ニ引出シ當籤ヲ定ム、當籤ニ利害ヲ承テ應セシメ廻メテ之レニ加入セシメントシ後期ニ至ルニ從ヒテ當リ金額ヲ大ニセリ、又初メノ三期中ニ當リ籤ヲ得タルモノニハ更

ニ毎金ヲ要セス。他ノ義ヲ與フルコト、セリ。併シ其期以前ノ掛金ハ支払
ハサル可カラス。國家ノ企業利得ハ當リ金其ノ他ノ費用ヲ引去リタル剩餘
ニシテ、之レヲ幣ニ一定ノ比例ヲナス如ク作成セラル。カ、ル富義ヲ行ハ
心國ハ普魯西ヲ始メ此後、諸聯邦ナレカ最近南極ニ至レテ一徹ハリ、
Hungary 亦此ノ種ノ富義ヲ行ハリ

第二 *gablenlotta* 富義 *gablenlotta* ニ於テハ数字

ノ一ヨリ十マテノ数字ニヨリ賭博ヲ行フ。掛金ノ額ニ付テハ各自己ノ思
フ終ノ金額一テズ一ツノ数字ハ幾可カノ數ニカクルナリ。當リ金額ハ掛金
額幾倍ニヨリ定ム。富義ハ一ヨリ九十迄ノ數ニ於テ五ヲ引キ出スコトニヨ
リテ行ハル。ソノ掛ケタル數カノ掛義ノ五ツカ何レカ一ツニ取中スルト
キハ *Estatto simplice* *Estatto Ambro* *Estatto G. ten-*
no 四ツ當リタルラ *Estatto* 五ツ當リタルラ *Estatto*
ambo トズフ、ソノ掛金ハハノ思フニ委セ大小如何様ニモ定ムルコト
ヲ得。當リ金ハ掛金ノ倍數ヲ以テ定ムルコトハ前述ノ如シ。ソノ倍數ハ、
Probability ノ理ニヨリミレテ知ルナリ。ソノ *Probability*

ノホス数字ヨリ以下ノ所ニテ掛金ニ付スル當金ノ倍數ヲ定メ其ノ差ヲ以テ
一ニハ費用ヲホシ一ニハ國家ノ公債ヲ得ルナリ。當リ金ノ *Probability*

Estatto simplice ニ於テ九十二對シ五ニシテ *Ambro*
ニ於テハ四百ニ對シテ一トナリ *Tenno* ニ於テハ一七四八ニ對シテ
一トナリ *quatermo* ニナレハ五十一〇三ハニ對スル一トナリ、

gablenlotta ニナレハ四三九四九二六八ニ對スル一トナル。然レニ
此レニ對スル當リ金ハ *simplice* 一対シテ十倍半乃至十四倍トシ
ambo ニハ二百四十倍乃至二百五十倍トナシ *Tenno* ニハ四一五〇
倍乃至四一〇〇倍トナシ *quatermo* ニハ六〇〇倍乃至六五〇
gablenlotta ハ實際ニテ行ハス *quatermo* ニ近時ハミレテ廉
スレニ至ル此、 *gablenlotta* *Italy* ヲ本據トスルモ又ハ
gablenlotta ニモ發ニ行ハル

第三 利子富義 *prime interest* 或ハ *premium* ニノ利
子富義ハ國家ノ公債ヲ起ス場合ニ利用ス。富義公債ハ即チミレナリ、公債
ニ利子ヲ附セサルカ又ハ低利ヲ附スル場合ニモ人々當リ富義ヲ得ント望ヲ

懐いて之レニ急募ス、此ノ種ノ富籤ハ人ヲ誘フ道具トナリ、予策中ニ計策
 場トセラル。利子ハ利子トシテ支給ハス、利子トシテ支給ノコトアルモ之
 レハ一部分ニシテ他ハ割増金トシテ利用セラル。抽籤ニ当ル公債ハ一定
 ノ割増金額トナルコト及ビハナルコト第一、抽籤ニ當ルハ一ツノ
 割増金ヲ得サルモノアリ、此ノ
 場合ハ債権ヲ有スルモノハ全然利子トナル、然レトモ割増金アル希望ノ
 タトニソノ富籤ノ市価ハ昇降スルノ傾向アリ、カ、ル公債ハ其ノ他國家カ
 非常ノ公費ヲ要スル場合ニシテ普通ノ手段ニテ公債ヲ起シ得ラレサル場合
 ニ之レヲ起ス、此ノ種ノ富籤ハ只ニ國家ノ公債ニ急用セラル、ノミナラス
 銀行其ノ他ノ社債券ニモ急用セラレ我國ノ勸業債ノ如キ其ノ一例ナリ、特
 シ勿論之レハ國ノ收入ヲナスモノニアラス、富籤公債ニヨリ國家カ利益ヲ
 ナスモノソレハ以テ私益者收入トスヘコトヲ得ス、國家ノ私益者收入ト
 ナルモノハ前述ノニツノモノニ限レナリ

Lotteries、官營ニ付テハ人ニテ批准セリ、蓋シ富籤ハ危険アル
 カタメナリ、而シテ各種ノ富籤ハ皆危険ヲ同シフセシモノニアラス、從テ
 手牌ノ危險モ多ク異ニセリ

富籤ニ付テ考フルニ其ノ危険ハ道德上ニミテ急務上ニモ甚タシ、抽金ハ
 小ナリトモ可ナリトモフカ故ニ貧者セ之レニ與カルコトヲ得、故ニ此ノ種
 ノ富籤ハ貧者富籤トナル傾向アリ、加之法ノ富籤ハ想像シ得ラル範圍頗
 ル広キカ故ニ萬一ヲ僥倖セントセルモノハ五テテ之レニ赴クコト、ナル、
 故ニ從テニ近傍ヲ增長シ怠惰ヲ奨励シ勤勉ヲ害スルコト、ナル
 ナリ、從テ富籤ヲ排斥スル所大トナルナリ、

第四章 行政收入

第一節 手数料收入

第一款 手数料ノ意義

手数料ハ國家公共団体ノ行政ニ於テ生スル特別報償トシテ其ノ之レヲ促シ若
 クハ煩シタルモノヨリ坐收スル処ノ公法上ノ課金ナリ、手数料ハ國家公共
 団体ノ行政ニ隨伴スルモノナリ、國家公共団体ヲ蒙レテ手数料ナルモノナ
 二八一

シ

故ニ手数料ニハ一方ニハ官庁ノ行爲アリ、他方ニハ私人ノ反對給付アリ
 コノ兩者ノ対立入ルニトカ特許ナリ、故ニ學者カ手数料ニハ特別報償ノ原
 則行ハルト云フナリ、國家公共ノ行爲ハ或ハ特別定ムラ社会至上至者上或ハ
 法律上特別ノ地位ニ置キテ之レヲシテ直接ニ特別ノ利益ヲ受ケシムルコト
 ヲリ、特別ノ利益ヲ与フルカ在キハ其ノ一例ナリ、例ハハ特許ノ如キ是ナ
 リ、又特別ノ場合ニ一般法ノ除外ヲナスカ如キハ其ノ二ナリ、例ハハ特別
 ノ私人ニ免許スルカ如キ是ナリ、又國家公共団体ノ行爲ハ或ハ特許人カ一
 般ノ法規又ハ慣習ニヨリテ既得權利益或ハ身分ノ如キモノヲ保護シ明確ニ
 シ同級ニ当該私人ノ利益ニ于スルモノ、大ナルモノアリ、例ハハ裁判或ハ
 非訟事件ニヨル場合ノ如キ是ナリ

斯ク國家公共団体ノ行爲ハ明カニ特殊ノ個人ノ利益ニ帰シ、又ハ同接ニ
 其ノ利益ニ于スルモノ大ナルモノアルカ故ニ多クハ個人ヨリシテ國家公共
 団体ノ行爲ヲ促スヲ以テ帶トセリ、只訴訟ノ如キ場合ニ於テ被告ハ自ラ進
 ンテ國家ノ行爲ヲ煩ハシタルト云フヲ得サルモアルノミ、乍殊如斯場合ニ

於テモ國家ヲ煩ハスト云フコトハ云ヒ得ルナリ、其ノ實ニ於テ原告ト異ナ
 ラス

次ニ手数料ハ國家公共団体ノ行爲ニ於スル特種ノ報償ナリ、換言スレハ
 給付ニ対スル及對給付ナリ、故ニ給付ト及對給付トハ相違シ居ラサル可カ
 ラス、即チ手数料ノ高ハ國家ノ行爲ニ正當ニ酬ニルモノナラサルハカラス
 乍殊併手数料ノ高テ定ムルモノハ國家公共団体ニシテ個人ハ之レニ與ラス
 違ハ手数料テアモノカ未契約ニヨリテ定ムルモノニアラサルカ故ナリ、
 即チ手数料ノ公課ナル所以ハ茲ニ存ス

以上述ヘタル所ニヨリ手数料ノ本質ハ明カニナレルカ併シ尚ホ之レヲ明瞭
 ニスルタメニ他ノ收入ト區別スル必要アリ

手数料ハ第一ニ私至濟收收入ト區別スル必要アリ、私至濟收收入ニアリ
 テハ國家ハ交收至濟ノ一般条件ニ從テ行動スルナリ、即チ原則トシテ自由
 競争ノ原則ニヨル彼ノ鐵道至營富義企業ノ如キ自由競争ヲ根柢シテ独占ノ
 性質ヲ帶フルモノナキニアラス、併シ國家ハ之レニヨリテ職權ヲ行フモノ
 ニアラス、飽マテモ交收至濟ノ下ニ立ツモノナリ

手数料ニ至リテハ然ラス、其ノ手数料ハ国家ノ給付ニ対スル及対於付ナ
リトシテモ其ノ国家ノ給付ハ一ツノ賦権ノ行使ニホナラス
其ノ上ニ手数料ノ決定其ノ賦或ハ賦課ハ国家カ公収ニヨリテ一方ニ決定
スルモノニシテ協議互譲スル余地ナシ、故ニ手数料ニナレハ国家ハ交換至
済ニ立脚スルニアラスシテ所云強弱共同全済ニ立脚スルモノナリ

是レ私全済の収入ト區別スル所以ナリ
次ニ手数料ハ租税ト區別スルヲ必要トス、租税ハ国家公共団体カ一方の
公収ニヨリテ之レヲ定メ強制課收スルト云フ矣ニ於テハ手数料ト異ナラ
サレトモ租税ニアリテハ国家ノ特別ナル行爲ニ對シテ報償ヲ求ムルモノニ
アラス、學者ノ所云一般報償ノ原則行ハルハナリ
之レニ及シ手数料ハ國家公共団体ノ特別ノ行爲ニ對シテ特別ノ報償ヲナ
スモノナリ、學者ノ所云特別報償ノ原則ノ行ハル、所以ナリ
故ニ手数料支払ノ義務ハ國家ノ行爲ヲ未メ若クハ之レヲ煩ハスニヨリテ
初メテ生スルモノナリ
租税ノ如クニ國民ナルカ故ニ一般の賦課ニ對シテ、義務ノ負フト云フモノニア
ラズ、之ノ租税ト異ナル要矣トス

如斯キ賦権ノ觀念上ニ於テ租税ト區別スルモノトナリ得ルモノナルカ、併シ
實際ニ於テハ之レヲ區別スルノ困難ナルモノトナカラス、殊ニ所云交通税
ハ手数料ニ於テ然リトス、從テ國ニ依リテ兩者ヲ全然同一様ニ見テ立法ニ
於テ之レヲ區別セサルモノアリ、例ハハ、英國、仏國、伊國、白國、露國
獨逸ノ如キ是レナリ

手数料ヲ租税ヨリ區別ト區別セルハ猶及ヨリ始マリ我國モ亦之レニ倣ヒ
タリ、米國モ亦近來之レヲ區別スルモノ、如シ、遠ハ立法上ノコトニシテ
理論上ヨリハ勿論之レヲ分ツコトヲ得、伊國等ノ學者ハ最モヨク之レヲ區
別セリ、ソレ故ニ法律上ニ於テ手数料ノ名ヲ有スルモノニシテ其ノ実租税
特ニ交通税ニ表セルモノトナカラス、蓋シ國家公共団体ノ行爲トシテ之レニ對
シテ特別報償トノ關係ヲ薄弱トナルニ從テ手数料ハ性質上租税ニ移レルモ
トスフコトヲ得ルカ爲ナリ
（手数料ノ起源ニ付テハ此ノ參考書ヲ見ヨ）

第二款 手数料ノ高

手数料ハ前述ノ如ク國家公共団体ノ給付ニ對スル又對給付ナリ給付ト及
給付トハ之ニ相通悉セサル可カラス。從テ手数料ノ高ハ國家公共団体ノ
給付ニ對悉スル與ニ對テ之レヲ決定セサルハカラス
是ハ手改行ノ觀念ヨリ生スル自然ノ結論ナリ

手数料高ハ國家公共団体ノ給付ニ對致セサルヘカラサストセハ此ノ國家
公共団体ノ給付ノ価値ヲ判断セサルヘカラス、然レハ國家公共団体ノ給付
ノ価値ハ何ニヨリテ判断スレカト云フニ今日一般ニ行ハル、之ノニ種ア
リ

其ノ一ハ給付ヲナスカタムニ用ヒタル費用
一其ノ二ハ個人ノ受ケタル利益之レナリ

其故ニ國家公共団体カ手数料ノ高ヲ定メタル標準ニ自然ニ二ナリ、一ヲ
費用ノ補填主義ト云ヒ他ノ一ヲ利益裁損主義ト云フ

費用補填主義トハ國家公共団体カ私人ノタメニ行動スルニヨリテ要スル

費用ヲ補填ヘルヲ以テ裁旨トス、然ラハ費用ハ如何ナル範圍ニテ計算スハ
キヤノ尚難生ス、若シ之レヲ広ク解スルトキハ官吏ノ俸給官庁建物ノ維持
費等ヲモ割充テサルヘカラス

乍保官庁ノ特別ノ行爲ニ對シテ斯クノ如ク費用ヲ割當ツルコトカ殆ント
不可能ノコトナリ、加之官庁ハ一定ノ職務ヲ行フモノナルカ故ニ一方ニ於
テハ其カ特定ノ私人ノ利益ニ關係スルト云フモノ、他方ニハ國家ノ全体ノ
利益ニ關係スルト云フナリ

故ニ其ノ費用ノ全部ヲ國家ヲ煩ハス所ノ私人ノ全体ヨリ賦シテ支キスル
ハ理ニ於テ正シカラサレハ費用補填主義ニヨリテモ特定私人ノタメニ特ニ
要シタル費用ニ止メサル可カラス

尚本國ニテ有ラルトキハ公共団体ノ行爲ノ価値ハ常ニ其ノ費用ト適當悉
入ルモノト云フコトヲ得ス

費用以テトモ國家ノ行爲ノ価値極メテ大ナルコトアリ得ルナリ、費用補
填主義ニ依レハ同一種類ノ國家行爲ニ對シテハ常ニ門額ノ手数料ヲ賦セザ
ル可カラス

従テ所云変動手数料ハ許シ得ラレズ。然ラハ現今ノ手数料制度ヲ總テ此ノ主義ニヨリテ説明スルコトヲ得ズ。故ニ於テ利益報償主義ヲ生ス。利益報償主義ハ国家公共団体カ行動スルニヨリテ個人ノ受クル利益ヲ標準トシテ之レニ報償スルヲ趣旨トス。然ルニ個人ノ受クル利益ト云モ人々ニヨリテズレラ感スル度目シカラス。従テ此ノ主義ニ依レハ各個人ニツキテ帯ニ特別ノ手数料ヲ定メサル可カラサルコト、ナルナリ。如斯ナルハ平敷料ハ帯ニ変動手数料ニナラサル可カラサルコト、ナルナリ。併シ之レニテモ亦現代ノ手数料ヲ説明スルコトヲ得ズ。思フニ国家公共団体ノ行為ノ価値ト云ハハ少クトモ社会改善報償価値ヲサレハカラス。然ラハ如何ニシテ国家公共団体ノ行為ノ社会改善報償標準値ヲ定ムルカト云フニ別ニ確實ナル標準ナシ。夫履リ普通ノ場合ニ普通人ノ受テタル利益ヲ如何ニ評価スルカト云フコトヲ見テ之レヲ定メサル可カラス。従テ及ノ評価ハ事情ノ変スルニヨリ又社会ノ進ハニヨリテ変動スレコトノアルヲ要スルヘカラス。

乍ら、国家ノ行為ヨリ個人カ直接ニ利益ヲ受クルモノニ付キテ云フモノナリ。

国家ノ行為ニヨリテ個人ハ實際ニ利益ヲ得サルモ間接ニ利益ヲ受スルニ過キサルモノアリ。斯ガル者ニアリテハ利益ヲ基礎トシテ評価スルコトヲ得ズ。唯山ムコトヲ得ズ国家カ之レニ換シタル至費ヲ以テ評価スルコト、ナルナリ。

這ハツスシモ理論ニハ合セサレトモ現今ノ手数料制度ヲ説明スルニハ此ノ標準ニモ由ラサル可カラサルモノアリ。手数料ヲ定ムル標準ハ斯クノ如キモノナルカ故ニ手数料ノ高ハ帯ニ一定不變ナリト存フ可カラス。又帯ニ変動スルモノトモ考フヘカラス。手数料ニハ白ラニツノ種類アリ。

其ノ一ヲ定額手数料ト云ヒ他ノ一ヲ変動手数料ト云フ。定額手数料トハ同一種類ノモノニ付シテ同額ノ手数料ヲ課スルモノナリ。変動手数料トハ何々ノ場合ノ特別事情ニ依リテ手数料ノ率ヲ変スルモノナリ。

変動手数料ハ夫ニミレテ分テテ範圍手数料漸進手数料ト云フ

範圍手数料トハ手数料ノ最高最低率ヲ規定シテ關係官庁ヲシテソノ範圍

收ニ於テ自由ニ裁量シテ額ヲ定ムルモノナラズ

清造手数料トハ一定ノ標準ニヨリテ手数料ノ率ヲ定ムルモノナラズ

或ハ書面ノ容積數量ニヨリ若クハ官庁ノ行動ノ時間ノ長短ニヨリテ之レ

ヲ定ムルコトアリ、之レヲ容積手数料時間手数料ト云フ

或ハ物件ノ価ニヨリテ之レヲ定ムルコトアリ、之レヲ価格手数料ト云フ

價格手数料ニテハ更ラニ物件ノ価格ニ等級ヲ附シテ各級毎ニ一定率ノ手

续费ヲ附スルコトアリテ之レヲ階級手数料ト云フ

又價格ニ等級ヲ附セス歩割ヲ以テ手数料ヲ附スルコトアリ、之レヲ歩割

手数料ト云フ

第三款 手数料ノ收

手数料ヲ收スルニハ何々別々ニ之レヲ強、コトアリ、又總括シテ之レ

ヲ強スコトアリ、此処ニ於テ個別手数料ト總括手数料トヲ生スルナリ

第一 個別手数料トハ官庁何々ノ行動若クハ何々ノ書面ニ付キテ別々特別

ニ課せスルモノナリ

第二 總括手数料トハトハ手数料ヲ取ルヘキ數多ノ場合ヲ總テ一居ニスハ

之レヲ幾ツカノ部類ニ分テテ其ノ一類又ハ各部類ヲ一ツノ單位トシテ計算

シ之レニ一定ノ手数料ヲ課スルヲ云フナリ

個別手数料ハ國家ノ行政ト異ノ及於給付ナル手数料ヲ何々ノ場合ニ相違

應セシムルコトヲ辨ルニ計算ノ煩雜ニ及シ通計ニ不便ナリ

總括手数料ハ全ク之レト及於ナルモノトヲ云ヒ得、而シテ時勢ノ進歩ハ

次第ニ計算ノ簡單ナルニトラ便トシ通算計ノ便利ヲ重スルカ故ニ手数料

制度、個別手数料ヨリ總括手数料ニ進ムニ至レリ、故ニ手数料ハ次第ニ統

一收ニナル傾向ヲ有ス

方式ハ國家公共団体ノ行動カ少クトモ云々ヲ用ヒテ何々ノ場合ニ國家公共
 団体ノ行為ノ価値或ハ費用ヲ計算セシテ定メリタル額ノ手数料ヲ課收ス
 場合ニテハ簡便ナル標準ニヨリ等級ヲ定メテ手数料ヲ課收スル場合ニテ
 之ヲ適用スルコトヲ得ルナリ、斯クノ如キ場合ニ印紙課收方法ハ當ラ得ル
 レモノナリ、之レニヨリテ以テ會計ヲ簡單ニシ課收費ヲ減スルコトヲ得ル
 カ故ナリ、手数料ノ額少キ場合ハ公衆ニトルモ亦便利ナリ、乍係他方ニハ
 印紙並ニ押印用紙ノ課印或ハ偽造貼用シラレ、コトヲ防止スルタメニ取締
 ラナス必要アリ

直接課收方法ト云フハ何人ノ領シタル或該官庁カ若クハ收八官庁ニ付シ
 テ直接ニ現金ヲ以テ手数料ヲ支払フ方法ナリ、此ノ方法ニヨレハ手数料ヲ
 課收スルタメニ特ニ官吏ヲ多クシヌハ特別ノ官庁ヲ設ケルニ至リ會計ヲ繁
 雜ニシ由テ以テ至費ヲ増加スル故ニ何人ニ付テモ亦大イニ不便ヲ感セシ
 ムル憂アリ、乍併地方ニハ確實ニ收入ヲ得テ税レ、コトナシ

且正確ニ國家ノ給付ニ適応セシムル手数料ヲ定メ之レヲ課收スルコトヲ
 得

故ニ何々別々ノ事由ニ悉シテ手数料ヲ課收スル場合スハ額ノ大ナル等
 課ヲ課スル場合ハ此ノ方法ニヨルヲ妥當トス、此等ニ於テ總若手数料課收
 等ニ最モ適用セラレ、ニ至ル

第四款 手数料ノ System

手数料ハ國家公共団体ノ手数料ニ隨伴シテ生スルモノナルコトハ既述セ
 リ、然レニ國家ノ作用ハ普通之レヲ立法、司法、行政ノ三ニ分ツ、
 然ルニ立法ニ於テハ直接ニ各種ノ何人ト交渉スルコトナク從テ手数料ナ
 ルモノナシ、故ニ手数料ハ司法ト行政トニ存スルモノトナレ、由リテ
 手数料ハ自然行政手数料トニ組立ツルコトナレ

司法手数料
 司法手数料トハ裁判其ノ他司法ニ于スル國家行政ニ對スル報償ナリ、而
 シテ斯ル手数料ヲ課收スルハ第一ニハ何人カ自己ノ権利ヲ保護シヌハ実
 行セシカメ、自ら進ニテ裁判所ヲ履シタル場合、第二ニ何人カ公ノ秩序

又ハ世ノ利益ヲ害シタル者又ハ検察ノ職權ニヨリ又ハ個人ノ告訴ニヨリ訴訟提起セラレ消滅故ニ國家ヲ煩ハスニ至ル場合ナリ。故ニ手数料ヲ支払義務ハ裁判所ノ行動ヲ促シタルカ又ハ煩ミタルカニ依リテ生ス。裁判所ノ行動ハ、之レヲ訴訟ト非訟ト一分ツコトヲ得。故ニ手数料モ亦訴訟手数料ト非訟手数料ニ分タル訴訟ハ又民事ト刑事トニ分タルモ、ナルカ故ニ手数料モ亦普通民事訴訟手数料ト刑事訴訟手数料トニ分ツ。民事訴訟手数料ハ訴訟物件訴訟ノ種類或ハ係争物件ノ価格手続ノ繁簡等種々、莫ヨリ各階級ヲ設ケテ之レヲ定ムルコト、ナル

民事訴訟手数料ヲ定ムルハ正當ナリ、若シ此種ノ手数料ヲ免除スルトキハ財產階級ノ負担ヲ免レシムルカ故ニ却テ不公平トナル。而シテ激訴ノ弊ヲ生シ裁判所ヲ煩ハスコト愈々繁クナルカ故ナリ。

刑事訴訟ニ於テ手数料ヲ取ムルハ必スシモ公濟上ノ利益ヲ受クルモノト云フヲ得ス、乍係此ノ場合ニ於テモ特別ノ個人カ國家ヲ煩ハスト云フコト、ナルカ故ニ之レニ對シテ手数料ヲ定ムルハ、ナルカ故ニ之レニ對シテ手数料ヲ定ムルコト、ナル。而シテ斯カル手数料ヲ定ムルコト

、又此ヲ得タルモノト云フヲ得ス、但シ秩序ヲ紊シ權利ヲ侵シ遂ニ裁判所ヲ煩ハスニ至リタラハ其ノ訴訟ノタメニ國家ノ費入費用ノ少クトモ一即分ラ負担スルコトハ正義ニ叶フモノト云フコトヲ得

之レヲ全社會全體ノ負担トスルハ却テ不當ナリト云ハサルハカラス。非訟事件手数料ハ裁判義務ノ手続アルニテラス、訴訟ニ非ナル、民事事件ニ于テ係ニテ私人カ裁判所ヲ煩ハス場合ニ之レヲ定ムル。例ハ準禁治產人ノ負擔ヲナシ後見人保佐人ノ選定ヲナシ或ハ發託登錄ヲナシ、其ノ他法律ニ係、法律等実ノ認定ヲナハ場合ノ如シ、斯カル場合ニ手数料ヲ定ムルハ正當ナリ、裁判所ノ行動ハ司法上ノ法律ニ係テ定メテ疑ナカラシムルニ至リ或ハ取消ヲ生スルカ危險ナカラシムルタメニスルモノニテ之レハ、之レカ邊ニ利益ヲ受クルカ故ナリ

行政手数料ハ巡分行級ニ伴フ手数料ニシテ司法手数料ノ外論テノ手数料ヲ包含ス、行政手数料ノ司法手数料ト異ナルモ其ノ其ノ之レヲ相ハニ容シテ國家ノ行動ヲナス官庁ノ異ナレ共ニモ存スントモ尚其ノ事

件ノ性質ヨリ考フルトキハ国家ノ行動力個人又ハ団体ノ特別ノ利益ノタ
 ×ニ存スト云フニ於テモ異ナル即チ特別ノ場合ニ於ケル国家ノ行動ハ其
 ノ于係スル個人ノ特殊ノ利益ノタ×モ存スト云フニ於テモ異ナル即チ
 特別ノ場合ニ於ケル国家ノ行動ハ其ノ于係スル個人ノ特殊ノ利益ヲ進
 ルニ此ニテ直接ニ国家社会ノ利益ニ于係スル個人ノ利益ヲ進ムルコ
 トカ及社シテ国家社会ニ影響ヲ及ボスコトヲル、之ニテ又シテ司法手
 数料ニアリテハ司法ニヨリテ或ル事案上ノ關係ヲ認定シ法律秩序ヲ維持
 シ法律生活ヲ實際ニ實現スル故ニ直接ニ社会全体ノ利益ヲ進ムルト云フ
 ヲ得、莫ク国家ノ行為ヲ煩ハス、勿論自己ノ利益ニ于係スルモ常ニ然リ
 ト云フヲ得ス、国家カ之レニ對シ行動スルハ共同団体ヲ保護スル宗旨ニ
 出ツ、然ルトキハ概論ナルモ司法手数料ハ国家ノ行動力国家社会全体ノ利
 益ニ于係セル場合ニ之レヲ免ルモノニシテ行政手数料ハ国家行動力主ト
 シテ個人ノ利益ヲ進ムル結果ヲ求ム場合ニ之レヲ免ル、司法手数料ト行
 政手数料トヲ區別スルハ及クノ莫クニ於テ国法上重要ナル意義アリ、即チ
 司法手数料ハ法典ヲ以テ定ムルニ及シ行政手数料ハ其ノ部門ニ定メ得ル

モノナリ、行政手数料ハ行政官衙ニ於テ自由ニ定メ得ルカ故ニ國ニヨリ
 テハ行政手数料ハ收入ヲ得ル一ノ手段トセルモノナキニアラス、合衆國
 ノ如キハ其ノ一例ナリ、行政手数料ハ一般行政手数料ト特殊行政手数料
 トニヨリ組立テラル、一般行政手数料ト云フハ行政各部ニ共通スル手
 料ナリ、例ハ試験手数料資格証明手数料特許其ノ他、所云工業所有權
 免許料ノ如シ

特殊行政手数料トハ特殊ノ行政官衙ニ於テ他ヨリ異ナル特殊ノ行政
 手数料ニ當收スルモノヲ云フ、所云特殊行政手数料ハ行政官衙ノ組織ニ
 從ヒ種々ニ之レヲ區別スルヲ得、大抵ニ於テ外務手数料、内務手数料、
 文化行政手数料至若行政手数料ニ分ツ、外務手数料ハ外務省ニ於テ當收
 スル手数料ト外國ニ於テ當收スル手数料トアリ、後者ハ大使館、公使館
 領事館ニ於テ當收スルモノナリ

以テ手数料トハ外務行政ニ于スル手数料タリ或ハ衛生ニ于シ或ハ警察
 ニ于シ區隔獲得ニ關シ當收スルモノナリ
 至若行政手数料ハ至若行政ニ關シ當收スル手数料ナリ、例ハハ証明或

ハ認定ニ付テハ手数料、並督キ教科貿易手数料ノ如シ

二九八

第二節 使用料

使用料トハ一定ノ公共設備營造物ヲ使用スルニヨリテ得ル利益ニ付スル
報償トシテ呈示スル数量ナリ、字者或ハ之ヲ広義ニ手数料ニ含マシムル
モ嚴格ノ意義ニ於テハ之レヲ分テ區別ス、手数料ハ國家公共団体ノ職
權行使ニ隨伴シテ之レヲ呈示スルモノナリ、然ルニ使用料ハ國家公共団体
カ或レ設備又ハ營造物ノ展成シ私人カ之レヲ使用スルニ付シ呈示スルモノ
ナリ、故ニ手数料ニ付リテハ官庁ノ組織ヲ前提トシ使用料ニ付リテハ職權
行使ト見ルハキモノナシ、又手数料ニ付リテハ公共設備又ハ營造物ノ存
在ヲ前提トス、之レ兩者ヲ區別スルノ要矣トス、使用料ハ公共ノ營造物並
ニ設備ノ使用ニ付スル報償ナルカ故ニ特別報償主義ヲ本則トス、此ノ象ハ
手数料ト異ナラズ、從テ使用料ノ高ク定ムルニハ手数料ノ高ク定ムル原理
借リ来ラサル可カラス、即チ使用料ハ營造物又ハ設備ノ利用キノ甚シキル

或利用具ノモ、価値ヲ判断ヒサル可カラス、而シテ其ノ利用ノ価値ハ普
通ノ場合ニ普通人カ受クル利益ノ效果ニヨリ定ムルヲ定ムヘシ

故ニ使用料ハ必ズ極カラサル可カラテ理由アリ、又教育ノ目的又ハ意
義ノ目的ヲ有スルモノハ別便ノ価値ハ大ナルモ使用料ハ極メテ少クスヘキ
モノナリ、使用料ハ斯ク別便ノ価値ニ從テ本則トス、而シテ使用ノ価値
ハ必ズシモ之レカタメニ要スル費用ト適成スヘキモノニアラス、故ニ使用
料ハソレモ以テ公共營造物又ハ設備ノ使用ノ後ニ國家公共団体ノ費用ヲ
弁ハルニ足ラサシモアリ、或ハ又之レヲ弁シテ余リアルモノモアリ

而シテナラス營造物若クハ設備ヲ使用スルモノ増加スルトキハ全体ノ收入
増加シ從テ其營造物又ハ設備ノ全体ノ費用ヲ弁シテ余リアルモノヲ生ス、
殊ニ營造物又ハ設備ヲ資本トシテ付キテ一種ノ企業類似ノ形ヲ有スル場合
ニ於テ殊ニ然リ、郵便電信ノ如キ是レナリ

公共設備又ハ營造物ハ之レヲ種々ニ區別スルヲ得、從テ使用料モ亦種々
ニ分ツコトヲ得、然レトモ其ノ主ナルモノヲ等クシテ大體次ノ如シ即チ政
務行政ノタメニスル營造物又ハ設備ノ使用料、全行政ノタメニスル營造

二九七

如ハ心算備人使用料ハ本質的ニ幾々ハ建設費又ハ設備ノ使用料或ル種ノ交通機子ノ使用料即チソレ也

一、既設ノ或ノ範圍ニ於ケル營造物又ハ設備ハ種々アレトモ其ノ使用料ヲ算スルニ去ナレモ、一般ノ設備等下リ、之等ノ設備ヲ利用スルモノハ必スシモ當使用料ヲ私ハサル可カラス、然レトモ之ニ利用スルモノハ必スシモ當メルモノニアラサレハ普通ハ使用料ヲ低廉ニス、之レ一ノ國家公共團體カ此ノ如キ營造物又ハ設備ヲ設クルニ添ハントスルカタクナリ

二、文化行政ノ範圍ニ於アル營造物ハ美術館、博物館、図書館、動物園等ヲ主トス其ノ入場料ハ即チ茲ニ所云使用料ナリ

三、公共行政ノ範圍ニ於ケル營造物又ハ設備モ少カラス、都市ニ於テ殊ニ然リトス、例ハハ小路ノ如キ是レナリ、茲ニ於テ道路料ナレモノノ法又同、公共ノ交通機子ノ使用料之レハ広義ニ於ケル至行政範圍中ニアルカ

如シト雖モ重大ナル意ヲ有スルヲ以テ分テタルナリ、重ナルモノハ郵便電信電話使用料、馬車、道免、渡免、車費使用料、荷物湯場使用料、起重機使用料、河川運河使用料ノ如キモノ是ナリ

以上營造物ノ目的ニヨリテ之レヲ区別シ從テ使用料ヲ分テタルモノナルカ形質ニヨリテ之レヲ見レハ營造物又ハ設備ハ賦産係ニ不動産ノ形ニ於テ行スルモノアリ又ハ企業ノ形ニ於テ現ハレ、モノアリ、後ノ場合ニ於テハ一見官業ト考ヘラル病院、水道、電信電話郵便ノ如シ

派ニ郵便電信電話ハ鉄道等ト公シク交通ニ因稱セルモノナレハ其ノ收入ハ國有鉄道或ハ都市ノ有スル電鉄其ノ他ノ交通業ヨリ去スル收入ト非特ニ相類似セルカ如シト雖モ實ハ企業上ノ主義ヲ異ニス、電鉄等ハ前述ノ如ク多少ノ發展、アレトモ大体ニ於テ私企業ノ原則ニ從テモノト云ヒ得ラレ、モノナレトモ郵便電信電話ハ收入ヲ得ル目的ヲ以テモラル、モノト云ハ

三、八等口一般ノ商工業ニ使用セントノ目的ニテ至當セルモノナリト云フ可キナリ、即チ主トシテ至當ヲ支弁スルヲ重シシ維持費新築費増築費ヲ年

スレ以上ノ利益ヲ収メメントヲ望ミタルモノニアラス、從テ其ノ利益ハ極

メテ低廉ナルヲ常トス、勿シテ其ノ利益ニ於テ比較的ナカラス收入ヲ得

ルハ之レヲ使用スルモノ、多キカ故ナリ、之レニヨリテ其ノ私至濟政原則

ニ從ヘリト推論スルコトヲ得ス

三・一

第三節 分担金 Beitrag

分担金トハ一定ノ公共ノ設備又ハ營造物ヨリ利益ヲ得、又ハ得ヘキ人ニ
対シ其ノ至費ヲ分担セシムル後ニ、賦課ナル所ノ賦課ナリ。分担金ハ一定ノ
營造物及公共ノ設備ヲ前提トスル矣。於テ使用料ト類似スル処アレトモ、使
用料ニアリテハ争突上利益ヲ得リ、アルモノニ課スルヲ常トスレトモ、分担
金ハ課スルモ常ニ然ラス、又使用料ニアリテハ公共ノ營造物又ハ設備ノ至
費トシテ支弁スルト云フモ、常ニ特別ノ場合ニ生ヘル費用ヲ支弁スルノミナ
ラズ、其ノ設備營造物全体ノ至費ヲ支トシテ支弁シ以テ之レヲ維持セントス
レナリ。若シ之レニ依リ全部力維持ニ能ハサルトキハ、国家公共団体、其
他ノ收入ニ依リテ之レヲ補充スルガ如キコトアレトモ、分担金ニテ之レヲ大
体ニ支弁スルコトヲ指旨トス。

分担金ヲ分テテ利益関係者ノ分担金ト改良費ノ分担金トス。第一ノ利益
関係者ノ分担金トハ、其ノ營造物又ハ設備ノ至費ヲ利益ヲ得人ニ割充テ、支
弁スルモノナリ。此ノ分担金ハ、利益ヲ得人ハ公法上ノ組合又ハ団体ヲ形成

スル場合ニミレテ見ル、商會會議所、至費ヲ団体員ニ割充ツルカ如シ

或ハ組合又ハ団体ヲ組織セサルモ、其ノ營造物又ハ設備、利益ヲ得人ニ
ト割充サル、モ、ハ至費支弁ノ後ニ一定ノ割当金ヲ収セラル、コトアリ
例ハハ労働保険ノ存スル所ニアリテハ、事業者ニ労働者モ共ニ一定ノ割当金
負シテ至費ノ分担ヲナスカ如キ是ナリ。第二ニ改良費分担ト云フハ

Stemrent *toesce* *Speciaal* *hoofdenwe-*
nte *Contributies* *municipaliteit* 多ク公法上

体カ公共ノ至費ニ一營造物又ハ設備ト見テハキモ、或ハ之レニ于テ、不
動産ニ特別改良ヲ施シシレカ爲ニ費セル費用ヲ支弁スルカトメニ之レニヨ
リテ特別ノ利益ヲ得ハキ附近ノ地主或ハ營業者ニ分担セシムル所ノ課金ナ
リ。其ノ賦課ノ割合ハ多ク其ノ受タ可キ程度ニ比例スヘキモノト爲ス、
例ハハ街路ノ一部ヲ石畳トシ或ハ市街ノ一部ニ公園ヲ設ケルトセン、其ノ
附近ノ者ハ大ニ利益スヘシ、故ニ其ノ利益ヲ受クル程度ニ比例シテ特別
ニ賦課スルナリ。此ノ分担金ハ、不動産ノ改良ヲ支弁スルニテ限度トス、
故ニ課金ノ方法ハ一時ニ之レヲ爲ヘテ原則トス、然レトモ其ノ額ノ大ナル

ニ至ルハ負担ヲ感スルコトヲ輕カラシムルタメニ年賦制度ヲトルモアリ、
 コノ改良費分租金ハ特ニ利益ヲ受クヘキモノニ課スルノ矣ニ於テ特別報償
 ノ原則ニ從ヘルモノトモ是得アルヘシトモ手數料使用料ト異ナリテ不動
 産ニ對スル特別ノ改良ニヨリテ受ク可キ利益ニ對シテ課スルモノナリ、而
 シテ其ノ利益ノ一時ニ限ルモノニアラスシテ長ク續ク可キモノナリ、三レ
 ニ對スル報償トシテハ年賦ニテ屢々課税スルモノアレトモソハ只納付者ノ
 負担ヲ輕ク感受スル便則ノモノニ過キスシテ原則トシテハ一時賦ノモノナ
 リ、之ヲ手數料、使用料等カ國家ヲ煩ハス毎ニ又ハ營造物等ヲ使用スル毎
 ニ課税セルモノト異ル處ナリ、此ノ制度ハ米國ニ於テ發達セル所ノモノナ
 リ、小自治体ノ財源トモナルモノナリ、次ニ英法等モ之レニ倣ヒタリ

第四節 補償金

補償金トハ人カ當ニナムハキコトヲ後サ、レカ又ハ後スヘカラサルコト
 ヲ後セルカトメニ之レニ對シテ償ヲ望スルコトニ云フ、補償金ハ國家ノ行

爲ヲ前提トス、即チ國家ニヨリテ初メテ補償ノ義務確定ス、然レトモ手數
 料トハ異ナリ望收スル理由ハ國家ノ行動其ノモノニ存セスシテ私ノ一ノ作
 爲不作為ニヨリ國家ノ行動ハ只補償スヘキハ或ハ之レヲ望收スルニトテ明
 ラカニ公ニ認メ或ハ判決ヲナスハ必分ヲナスニアリ、而シテ又分租金ト
 モ異ナル分租金ハ特別ノ至費ヲ支弁センコトヲ目故トスレト三補償金ハ然
 ラズ、單ニ行政ノ結果トシテ生スルモノナリ、其ノ至ナルモノハ罰金沒收
 金等種々ノ行政收入ナリ

租稅論 總論

第一章 租稅ノ意義並ニ根據

租稅ト云フハ國家公共團體カ收入ヲ得ル目故ヲ以テ財政權ニヨリテ一
 人民ヨリ強制徴收ニ望收スル公課ナリ、今之レヲ詳説セン

第一、租稅ハ財政權ニヨリ強制徴收ニ望收スルモノナリ、財政權ハ私權ノ一
 三〇五

作何トナミテ存スルモ、ナリ、只憲政ヲ以テ之レヲ財政権ト
云フ、主権ヲ讓レテ特別ノ権カアルニアラズ、此ノ如ク財政権カ主権ノ一
作用ナリトセハ國家ノ方ニテ人民ニ臨ミ人民之レニ服セザルトキハ後制ス
ルコト、ナレハ自然ノ結果ナリ、舊憲財政権ト云ハハ財政ニ關ス立法ト行
政、ヲ包括ス、租稅ハ立法ニヨリテ之レヲ定メナレ可カラズ、我カ憲法ニ
於テハ租稅ハ法律ヲ以テ之レヲ定ムトナス、

於テハ以テシテハ不可能ナルヲ知ランム、之レ法ニ于テ行ナリ、租稅立
法去スレハ財政行政ニヨリテ何々ノ場合ニ割當テ、租稅ヲ課收トシテ可
ラス、強制権ヲ寓スルハ此ノ場合ナリ租稅ノ納付ヲ強制スルカタハニ所云
等納必分法ニヨリテ租稅ヲ賦スルハ財政権ノ一作用ナリ、故ニ租稅ハ國家
公共團體カ一方ニ定ムルモノニシテ課收ヲ以テスルモノニアラス、其ノ
行後ノ標準ニヨリテ如何ナル額ヲ賦課スルカハ又國家公共團體ノ独り定ム
ル所ニ屬ス

第二、租稅ハ一般人民ヨリ強制徴ニ課收スルモノナリ、故ニ一般人民ト云
フハ所云私益消ノ主体ヲ云フモノナリ、夫カ一般人民ト云フモノ亦個人ノ集合

主体アレカハ之レヲ何ハス、而シテ一般人民ト云フモノ國民ヲ指サテ一ハ

三余入所ナシト云フ意味ニアラス、何々ノ場合ニ法定ノ条件ヲ具備セザ
ルモノカ租稅ヲ收ムルニ及ハサルコト勿論ナリ、我憲法ニ於テモ日本臣
民ノ租稅義務ヲ明カニセルモノナルカ同時ニ納稅者ニハ法律カ一定ノ条
件ヲ定ムルコトヲモテ想セルモノナリ、租稅カ一般人民ヨリ強制徴ニ課
收セラル、トハ特定ハカ國家公共團體ヨリ特別ナル利益ヲ受クルノ理由

ニテ課收セラルトノ意ニアラス、一般人民ハ單ニ國民タルノ理由ニヨリ
國家公共團體ヨリハ何等ノ利益ヲ受ケスト信モ租稅法ノ定ムル条件資格
ニヨリテ租稅ヲ收メサル可カラス、若シテ租稅ノ行爲ニ對スル報償

トスルカ如キ態度ヲトラントセハ *Wagner* 等ノ唱フルカ如ク一般
報償トシテ特別報償ニアラストセサルハカラス

第三、租稅ハ單ニ收入ノ目的ヲ以テ國家公共團體ノ望ムル公課ナリ、國家
公共團體カ行爲スルニ當リ自然之レニ伴ヒテ生スル公課ハ手数料其ノ他

行政收入ナリ之等ノ收入ハ收入ノ目的トスルモノニアラス、收入ハ從タ
ルモノナリ、然ルニ租稅ニ至リテハ之レニ及シテ收入ヲ得ルヲ目的トス

租税ハ收入ヲ得レテ目徴トスルハ之レヲ以テ國家公天國体ノ至費ヲ支弁
セントスルニ外ナラズ。故ニ租税ノ最終ノ目徴ハ至費支弁ニアリト云フ
コトヲ得。此ノ如ク租税ハ至費支弁ヲ最終ノ目徴トスルト云フコトヲ得
トモ。特定ノ租税ニヨリテ特定ノ至費ヲ支弁スルモノトナスコト能ハ
ズ。特定ノ租税ヲ以テ特定ノ至費ヲ支弁スルモノハ之レヲ目徴税 (Part
icular Sums) ト云フ。目徴税トハ分租金ニ似テ非ナルモノナリ
分租金カ公共ノ營造物又ハ設備ニヨリテ利便ヲ得ハキ人ヨリ強制徴ニ坐
収ハ可キ公課ナリ。然ルニ目徴税ニ至レハ斯クノ如キ及対給付或ハ利便
ヲ得ルト云フカ如キ *Element* ナシ全然一種ノ租税ナリト云
フコトヲ得。目徴税ハ文明諸國中多少之レヲ存スルモノナキニテアヤレ
トモ之レヲ廢スルヲ以テ一級ノ趨勢トス全体ノ租税ヲ以テスレハ一方ニ
ハ剩余アリ他方即チ目徴税ノ存スル所ニハ不足ヲ生シ財政収ヲ生スルコ
トアレハナリ。即チ目徴税ハ予算割當ノ際ニ陥レルモノニシテ今日ノ又
明國ハ予算割當制ヲトル故ニ目徴税ヲ置スル國ニ於テ極メテ極キ範圍
ニ限レテ帶トス。即チ目徴税ヲ以テ支弁スルハ慈善救ノ事業ヲ普通トス

即チ租税トシテ全額ノ至費ヲ得シ公天國体ニテ進ハルカ如キ種類ニ屬ス。目
徴税ハ斯クノ如キ至費ヲ支弁スルコトヲ目徴トスルモノナルカ其ノ税ト
シテ行ハル。之ノハ多ク奢侈ノ税ナリ

或ハ其ノ他ノ直接消費税ナルコトアリ。然レトモ一級租税ト異ナル所
ハ單ニ一定ノ目徴ノタメニ使用スト云フニアリ。之レヲ課スルニ目徴税
ハ原則トシテ採用スヘカラス。租税ハ一級ノ至費ヲ支弁スルヲ以テ目
トナス

從テ一級ノ收入ヲ得ルコトヲ目徴トスルモノナリト云ハサル可カラス
租税中ニモ收入ヲ目徴トセサルカ如キ外税ヲ供ヘタルモノナキニアラス
例ハ保護税ノ如シ。保護税トハ普通ニ農業又ハ工業等ヲ保護スルヲ以
テ *Protective* トナスト解セラル。然ラサレハ收入ノ目徴ナキカ知ク
見ラル然レトモ財政上ヨリ見レハ保護税タリトモ少シモ收入ノ目徴ナシ
ト云フヲ得ス。普通學者ハ関税ヲ分テテ財政関税收入関税ト保護関税ト
ナス。財政干渉ハ收入ヲ目徴トスルモノニシテ保護税モ産業ノ保護ヲ以
テ目徴トナスト云フト雖モ余ノ見ル所ニヨレハ其ノ説明ハ當ラズケルモ

所云財政機關ハ單ニ財政上ノ目的ヨリ課税スルモノニシテ至濟政策
 上ノ目的ヲ有セス、之レニ次シテ保護稅ナルモノハ財政上ノ目的ニ加ヘ
 テ至濟上ノ目的ヲ以テス、保護稅カ保護ノ目的ヲ達シ外國ノ輸入止ミシ
 場合ニハ收入モ亦止ム其ノ具ニ違ヒ人保護稅ハ單ニ財政上ヨリ無名無実
 トナルノミナラス至濟上ヨリモ亦然リ、保護稅ニシテ保護ノ動ヲナセ
 ル向ハ收入モ亦絶ク故ニ保護稅ハ産業保護ノ至濟上ノ目的ヲ有スル外ニ
 尚ホ財政上收入ノ目的ヲ爲セルモノト云フコトヲ得、次ニ租稅ヲ以テ社
 會政策上ノ目的ヲ有スト云フハ保護稅カ同時ニ至濟政策上ノ目的ヲ有セ
 ルモノト同様ニ考ヘ若シ租稅カ單ニ社會政策上ノ目的ヨリ出テ以テモ收入
 ノ目的ヲ有セスト論センカ之レ誤リナリ、然レトモ論者ノ社會政策上ノ
 目的ヲ有スト云フハ斯クノ如キ意味ニアラスト志ヘラレ、要之租稅ハ收
 入ヲ目的トスルヲ其ノ要素トス、其ノ他ニ爲外ノ目的ヲ有スルコトハ租
 稅タルニ於テ妨クル所ナシ、故ニ租稅ハ屢々至濟政策上ノ目的或ハ社會
 政策上ノ目的具ノ他ノ目的ヲ達スル手段トナルコトアリ

租稅ハ前述ノ如ク國家公共団体カ收入ヲ得ルノ目的ヲ以テ財政權ニヨ
 リ一般人民ヨリ強制稅ニ課税スル公課ナリ、之レヲ國家公共団体ヨリ見
 一ハ國家公共団体カ課稅權ヲ欲ストナル、之レヲ人民ヨリ見レハ人民ハ
 租稅ニ于テハ義務ヲ負、レトナル、然ラハ國家公共団体ハ如何ナル
 理由ニヨリテ課稅權ヲ有シ、個人ハ如何ナル理由ニヨリテ納稅ノ義務ヲ
 負フカノ向發生ス、之レ租稅ノ根柢ニ関スル向竊ナリ、租稅ノ根柢ニシ
 シ最モ長ク行ハレタル説ハ所謂交換說ナリ、之等ノモノハ如何ナルモノ
 ニシテ而オモ如何ニ設レルカハ結論ハ財政學ニ於テ述ヘタリ、最近ノ
 説ニヨレハ國家公共団体ノ課稅權ハ強制共同至濟ト同然ノ結果ナリトス
 此ノ強制共同至濟ハ工廠或ニ港運シ而モ有稅故ニ組織セラルモノナリ
 故ニ論者ハ之レヲ工廠或有稅故課稅說ト云フ、夫ハ單邊租稅ノ本質ヲ究
 實ノ方面ヨリ説明スルモノナリ、今於シテ此意ヲ述ハン

國家公共団体ハ人類カ共同生活ヲナスニ能クニ必要ナルモノナリ、乍
 然各人カ國家等カ共同生活ニ必要ナリトノ理由ニヨリ徵ニ契約シテ之レ
 ヲ作りシモノニアラスシテ實ハ工廠、生産物ナリ、故ニ若シ國家生活ヲ

三二
賺フモノハ之レヲ稅却シ得ルモノニアラス、吾人カク次故ノ產物ヲ認メ
之レヨリ出資セサル可カラス、而シテ國家公共団体ノ存在ヲ認ムルトキ
ハ其延ニ強制共同至濟ヲ認メサル可カラス、夫何至濟トハ共同団体ノ全
體ト其ノ団体員トノ于後ニ基キテ行ハル、至濟ナリ、而シテ其ノ之レヲ
強固力ニヨリテ行フモノヲ強制共同至濟ト云フ、國家公共団体ノ至濟ハ
所云強制共同至濟ナリ、國家公共団体ノ職分トスル所ハ其ノ団体員タル人
民ノ側ヨリ見レハ共同ノ慾望トモ見得ラル故ニ論者ハ之レヲ共同慾望ト
名付ク、此ノ國家ノ職分ヲ終シ所云共同慾望ヲ達スルニハ種々ノ財ヲ必
要トス、然ルニ財ハ自然ニ無限ニ存在セス、サレハトテ國家公共団体ハ
自ラ需要スル財ノ全部ヲ自ラ生産シ能ハス、故ニ國家公共団体ヲ組織ス
ル団体員ヨリ其ノ財ノ供給ヲ受ケサルヘカラン
ソノ供給ハ之レヲ団体員ヨリ見レハ負租トナル之レヲ國家公共団体ヨリ
見レハ賦收トナル、若シ団体員ニシテ之レヲ供給セザレハ國家自治ハ之レ
ヲ維持スルニ由ナシ、故ニ國家ハ賦收ニヨリテ之レヲ強制スルコト、ナ
シ茲ニ課稅權ノ根拠存ス、課稅權ハ形式ヨリ云ヘハ主權ノ結果ナレトモ
之レヲ實質ノヨリ云ヘハ強制共同至濟ノ特質ト見ル可キモノナリ

第二章 租稅ノ原則

租稅トハ國家公共団体カ收入ヲ得ン爲ニ強制故ニ賦收スル公課ナリ、租
稅ハ個人至濟ノ富ヲトリテ之レヲ國家公共団体ニ移スコト、ナルナリ、然ルニ
其ノ個人富アルハ國民至濟ニ基礎ヲ置ケルモノナリ、故ニ國民至濟ノ盛衰
ハ租稅收入ノ増減ヲ乘ス可シ、近世ノ租稅政策ハ多クノ收入ヲ得テ以テ國
家ノ至費ヲ支弁センコトヲ計ルト同時ニ國民至濟ノ利害ヲ併セ考フニ
テ主旨トス、故ニ吾人ハ茲ニ二事實ヲ認メサル可カラス

其ノ一ハ租稅ナルモノハ國家公共団体カ收入ノ目的ヲ以テスルノ事實ナ
リ
其ノ二ハ租稅ハ個人至濟ノ主體ヨリ強制故ニ賦收セラレ、ト云フ事實
ナリ

然ラハ租稅ハ一方ニ於テハ強制共同至濟ニ基ク財政現象ニシテ他方ニ於
三三

テハ国民全層ノ基礎ノ上ニ立ツ至済現象ナリ。尚進ンテ考フルニ租税ハ一級国民ヨリ後制級ニ差収スルモノナリ。從テ何等カノ標準ニヨリテ一級ハ民ニミレラ則仕ケサル可ラス。若シ或ル個人ハ或ル階級ニ科シテ他ノ個人等ハ他ノ階級ヨリモ輕キ負担ヲ命センカ各人若シ階級ノ社会上ノ地位ハ之レカタメニ横視セラル、ニ至ル、若シ於テ租税ハ又社会後進者トシテ現ハレル、以上述フル所ニヨリテ是レハ租税ハ財政上、至済上、社会上ノ現象ナルナリ。サレハ之等ノ現象ニ受リテ租税ナルモノヲ研究セサル可カラス、茲ニ於テ租税ノ原則生ス、租税ノ原則トハ租税ハ一方ニ於テ財政上ノ目的ヲ達シ他方ニ社会ニ至済上健全ナル條達ヲ爲スルコトナギテ期スルタメニ從ハサルヘカラサル原則ナリ、コノ原則アリテ初メテ租税制度ヲ組織スル標準生ス、即チ租税政策ノ目標生ス、租税ノ原則カ一級學者ノ注意ヲ喚フニ至リシハ *Orthodox*、租税 *Adam Smith*、*Smith*、唱道ニ基ク *Adam Smith*、唱道ノ原則ハ四ノ第一ハ所云平等ノ原則ナリ、租税ハ人民カ國家ヨリ保護ヲ受クル程度ニ比例シテ平等ナラサル可カラストノ義ナリ、第二ハ確定ノ原則ナリ、租税

納税者ニ付シテ確定ニアラサルヘ可ラス、屢々變動スヘカラスト云フナリ
第三ハ所云便宜ノ原則ト名ケラル、モノナリ、租税ハ納税者ニトリテ便宜ナラサル可カラスト云フ義ナリ、第四ハ最少差收費ノ原則ナリ、即チ差收費ハ或ルヘク少キヲヨシトスト云フ義ナリ

Adam Smith、カ此ノ四原則ヲ唱ヘテヨリ當時ノ學者ハ勿論其ノ以後ノ學者モ皆之レヲ正当ナリトシテ敬テ及喜スルモノナカリキ、然ルニ財政學次第ニ研究セラル、ニ及ヒテ此ノ四原則ヲ批評シ其ノ當否ヲ争フ者生スルニ至リ又前云四原則ハ或ハ拡張シ或ハ收縮シ大ニ變スルニ至リ又、而シテ最モカヲ改セシハ、独ニ學者トス

今日ノ學者ノ普通論スル處ニ依レハ *Adam Smith*、確定ノ原則便宜ノ原則最少差收費ノ原則ノ三ハ所云數務行政上ノ原則トスルハ未タ大ニ低サ、ルモノアリ

今日ノ學說ヲ基礎トシタル所云租税原則ヲ明カニセシ、ソレニハ租税ノ財政上、至済上、社会的現象ヲ起スルコトヲ考ヘサル可ラス云フ

第一、財政現象トシテ租税ヲ見ルトキ租税ハ國家公共団体ノ至費ヲ支弁ス

レニ充分ナルモノナラサルハカラス、故ニ租税ノ收入ハ充分ナル可シト
ノ原則生ス、又租税ハ社会ノ進歩ニソシテ全費ノ膨脹ニ伴ヒテ増加シ得ル
モノナラサル可カラス

斯クミテ所云租税ノ伸張力ノ原則生ス、此ノニ考ハ租税ノ目的ニ関ス
ルモノナリ、近世ノ学者ハ之レヲ租税目的ノ原則ト名付ク、或ハ又財政
政策原則トモ云フ、租税ノ財政原則ハ尚更ニ云ク之レヲ辨シテ

Adam Smithノ所云確實ノ原則便宜ノ原則最少賦税費ノ
原則ヲモ含マシムルコトヲ得、之等ノ原則ヲ前者ニ并シテ財政原則
ト云フ、財政政策原則ト財政行政原則ト共ニ財政ニ干渉スルヲ以テ

財政原則ニ併セシムルコトヲ得レトモ其ノ性質ハ相異ナルモノト云
ハサル可カラス、從テ学者ハ此ニ原則ヲ分岐シテ別々ニ論スルモノアリ
第二、至濟政現象トシテ租税ヲ見レハ租税ハ個人並ニ具ノ社会全体ノ至濟

組織トミレテ觀スコト能ハス、故ニ租税ハ其ノ至濟組織ニ適応シ得ルモ
ノナルモノナルコトヲ要ス、租税適応ハ個人至濟ヲ害セザランコトヲ必
要トス、カ、ル原則ヲ總称シテ國民至濟政原則トイフ

第三、社会政現象トシテ租税ヲ見ルトキハ租税ハ其ノ目的ヲ達スルニ当リ

テ正義ニ適フモノナルコトヲ必要トス、租税カ正義ニ適セサル可カラス
ト云フハ租税ハ一方ニ於テハ普遍ナラサル可カラス、他方ニ於テハ租税
ハ平等ナラサルヘカラスト云フナリ、故ニ所云普遍ノ原則平等ノ原則生

ス、此等ノ原則ヲ總称シテ社会政原則トナス、学者ニ依レハ或ハ之ヲ正義
ノ原則又ハ正義原則ト云フモノアリ

以上述ハタル所ニ依リ見レハ租税ノ原則ハ之レヲ三ニ大別スルコトヲ
得、所云財政原則ヲニ分セハ四大原則トモ見得ラルヘシ余ハ之レヲ説明
スルニ先テ

茲ニ少シク評論セサル可カラサルハ之等ノ原則ニ優劣アリヤ否ヤノ向
頭ナリ「アダム」人ミスレカ四原則ヲ説キシトキハ平等ノ原則ヲ最モ重シ
シラ之レヲ他ノ原則ノ上ニ置ク、後ノ学者ハ之レニ依リテ多ク是ヲシ
キニ至リテハ之レヲ最高唯一ノ原則ナリト云フ者アラキ、併シ斯カ

ル説ノ排他セシ所以ハ一ニハ租税分配ノ不公平ナリシ時代ヲ回想シテ之
 レヲ及後スヘキモノニアラスト考ヘニヨルモノナランカトモ思フ一ニハ
 道義主義ヲ以テ凡テノモノ、上ニ存スルモノナラント考ヘシニモヨラン
 カトモ思フ、併シ此ノ見解ニ亦シ學者中及對スルモノアレナリ、社会政
 原則ノ如キハ個人相互ノ干渉ヲ緩和セントスルモノナリ、從テ個人ヲ大
 一ニ重視ス、然レニ財政政原則國民生活政原則ニ至リテハ國家公共団体
 ノ存立ニ干渉スルモノナリ、國家公共団体ノ生活ニ干渉スルモノナリ、
 故ニ國家社会ニ重要視セリ、然ラハ社会政原則ヨリハ財政政原則、國民
 生活政原則ノ方カ重要キモノナリト論セサル可カラストノ説ヲ及後ス學者ア
 レナリ、然ルニス之レニ及後シテ財政政原則ヲ最高ノ原則ト考フルハ不
 都合ナリト考フルモノアリ、甚シキハ財政政原則カ原則トシテ認メラル
 可キカ否ヤヲ疑フモノスラアリ、收入充分ノ原則ハ原則ト見做サレヌト
 キニ或ハ伸張カノ原則ハ之レヲ租税ノ原則ト云ハンヨリハ一般收入ノ原
 則ト云フ可キナリトシ、又ハ他ノ原則ヨリ生シタル結果ニスキストシテ
 之レヲ輕ニスルモノスラアリキ、又他ノ一派ノ學者ハ財政政原則ヲ

大ニニ重要視スルモアリ、要ハルニ租税原則ノ優劣如何ノ向額ニ非シテ
 學者ノ説區々ニシテ第一ナルヲ知ラス、併シ余ノ考ヘニ依レハ之等ハ皆
 誤レリト考フ、元來租税ノ三原則或ハ四原則ハ立ニ優劣アル可カラズ、
 一ヲ以テ他ヨリモ重シトス可キ性質ノモノニアラス、向額ハ多數原則ノ
 一ヲ送フニハアラス、又或ル説ニ於テ何レノ原則ニ副ハシメサル可カラ
 サルカ、又何レノ原則ヲ重シトセサル可カラサレヤニモ存セス、向額ハ
 租税ノ有セザルハカラサル性質ハ斯ク斯クアルハシト云フニ存ス、併シ
 之レハ有ニル租税ニ皆之レヲ望ムコト能ハス、各種ノ租税ハ各一ノ程度
 ニ於テ之等ノ諸原則ニ適ヘルモノニアラス、例ヘハ一ノ租税ニ付キテ
 之ヲ見ルニ社会政原則ニ適フニ至濟政原則ニ適ハサルコトアルナリ、斯
 ダノ如キ欠点ハ租税制度全体ノニニ於テ直チニ之レヲ補フ可キナリ、概
 言スレハ一ノ租税ノ欠点ハ他ノ租税ヲ以テ之レヲ補ヒ全体ニ於テ緩和ヲ
 及後サシム租税ノ原則ニ適合セシムベキナリ、勿論租税政策トシテハ、
 等ニ各種ヲ以テアルハク後ハテノ原則ニ適合セシムハ、租税法ヲ立ツル
 ヲ必要トスルカ若シ之レカ困難ナル場合ニハ此ノ方法ニテ之レヲ補ヒ公

併し上ニ於テ租税原則ニ適合スル立法ヲナシヘキナリ
斯クノ如ク觀スレハ租税原則ニ優劣アル筈ナキナリ

三二〇

第三章 財政政策の原則

財政政策の原則ハ租税ノ目録ヨリ求ルモノナリ。租税ハ強制共同至済銀
織ノ本質ニ適ヒ其ノ共同慾望ヲ満足セシムルニ十分ナル財ヲ供スルモノナ
ラサル可カラズ。獲益スレハ租税ハ國家公共団体ノ至費ヲ支弁スルニ適ス
ルモノナラサル可カラズ。之ヲ以テ此ノ財政政策の原則生ス。此ノ原則
ハ又財政ソノモノ、性質ヨリモ直ニ考ヘ出サレ可シ。財政ハ出ツルヲ計
リテ入ルヲ定ムルモノナリ。即チ歲出先ツ定マリテ歲入ヲ之ニ適合セシ
メントスルモノナリ。至費カ幾ニ支出セサル可カラサルモノトスレハ收入
ハ之レニ從テ之ヲ整ヘサル可カラズ。租税ハ其ノ收入ノ重ナルモノナレ
ハ租税ハ國家公共団体ノ至費ヲ支弁スルニ適スルモノナルコトヲ要ス。
コノ原則ノ適用ニヨリ國家公共団体ハ初メテ至費ノ支弁ヲ確實ニシ國家

國家の共同生活ヲ安固ニスルヲ得ルナリ。從テ此ノ原則ハ極ノテ重要ナリ
併シコノ原則ハ他ノ原則ヨリモ優リテ重キヲ爲スヘキモノト考フヘキニ
非ス。故ニ此ノ原則ハ國民至済の原則社會の等ヨリ大ニ制限セラレ、コト
アルヲ以テナリ。財政政策の原則ヲ分チテニツトス其ノ一ノ租税ノ收入ノ
十分原則。其ノ二ハ租税ノ伸張力ノ原則ナリ。

コノ原則ハ租税ハ全体トシテ國家公共団体ノ至費ヲ支弁スルニ充分ナラ
サル可カラサルヲ意味ス。租税ノ種類ヲ撰択スルニモ其ノ收入ヲ齎ラス
コトノ大ナルヤ否ヤハ考慮ヲ要スヘキモノナリ。種々ノ租税中此ノ原則
ニ適フ程度ハ同様ナラス。立法者ハ常ニ國家公共団体ノ至費ヲ支弁スル
タメ數多クシテ且ツ確實ナル租税ヲ採用セントス。之レハ不知不識ノ同ニ
ニノ原則ニ從ハルモノト云フ可キナリ。何レノ國ニ於テモ于税内地消費
税ノ存スルハ之レカ甚ナリ。又其ノ生活必需品ニ課スル税或ハ多量消費
品ニ課スル税ハ時々或ハ食糧ニ重キ負担ヲ命ジテ政策ニ適ハサル欠点ヲ
去スルモノナレトモ財政家ハ其底斯カル税ヲ捨ツルコト能ハス。畢竟此

三二一

ノ種ノ課カ多額ノ収入ヲ齎スル故ナラン、之レニ反シテ、直接消費稅特ニ奢侈稅キハ最モ政策ニ適ハルモノナレトモ坐落費ノ割合ニ比シテ収入以シ、故ニ財政家觀望スル所トナラス、固ニヨリテハ斯クノ如キ理論ニ適ハル租稅スラナキモノアリ、之レ亦コノ原則ノ實際ニ適用セラレ居ル証據ナリ

二、伸張力ノ原則

コノ原則ハ自然の伸張力ノ原則ト人爲の伸張力ノ原則トニ分セラレ其ノ一、自然の伸張力ノ原則トハ租稅カ人口ノ増進國富ノ増加、國民所得ノ増加商工業ノ發達ニ從ヒ自然ニ收入ノ増加ヲ天シタルノ意ナリ、人口増進シ國富増シ國民所得増大スレハ租稅ハ以前ノ倍トスルモ税率ヲ動搖セシメストモ租稅ノ收入ハ増スヘキナリ、所得稅營業稅消費稅交通稅等ニ最モヨク現ハル、之レ所云自然増収ナルモノナリ、然ルニ至略取動搖ニ不覺トナレハ消費稅交通稅等ノ收入ハ一時ニ減少ス、所得稅、營業稅等モ亦減少スレ恐アルナリ、カクテレハ財政ノ需要ヲ充タシ得ラレサルニ至ル、

茲ニ於テ租稅ハ自然の伸張ニ委ス、カラス、又人爲の伸張ニ收入ノ増加ヲ計ル可キ必要ナシ

其ノ二、人爲の伸張ノ原則、租稅ハ至費ノ膨脹ニ志シ増加シ得ラル、モノニシテ而カモ之ンカタメ他ノ方面ニ弊害ヲ及ボサ、ルモノタラサル可カラズ、國家公天團體ノ收入ノ中ニハ政行收入私至濟的收入モ存スル故幣ニ租稅ヲ以テ國家公天團體ノ至費ノ全額ヲ支弁スルコトヲ要スルトハ云ヒ得ザレトモ行政收入私至濟收入ニ不足アル場合ニハ幣ニ租稅ヲ以テ補ヒ得サル可カラズ、又戰爭其ノ他ノ場合ニハ少シトモ臨時費ノ一部ヲ弁シ得サル可カラズ、臨時費ノ一部ヲ弁スルニハ或ハ新稅ヲ起シ或ハ從來ノ稅ノ率ヲ動カスモノナリ、之所云戰時稅非常稅ニテ租稅收入ヲ人爲的ニ伸張セシムルモノナリ、故令平時ニ於テモ至費ノ膨脹甚シキ場合ニハ新稅ヲ起シ租稅ヲ起シ又、古キ稅ヲ改メテ税率ヲ動カス必要生スルナリ、之亦租稅收入ヲ人爲的ニ伸張セシムルモノナリ、然レトモ新稅ヲ起シ又税率ヲ變更シテ巨額ノ收入ヲ得ルニハ非常ニ時ヲ要ス、急ニ志スルコトヲ得サル場合少ナカラス、故ニ租稅制度ハ必要アル毎ニ増収ノ旨故

ヲ達シ得ル如キ種類ノ租税ヲ有セサル可カラス、一般所得税ハ最もヨク自然の増徴力ヲ有スルカ又時ニ税率ヲ動カシテ巨額ノ収入ヲ齎ラシ得ルカ故ヲ以テ人爲的増徴力ヲ有ス、英國ニ於テ所得税ハ悉モ此ノ作用ヲ理想致シナセルモノト称セラル、今日戰爭ニ於テ英ハ所得税ノ税率ヲ動カシ、又其ノ他ノ改正ヲ試ミテ莫大ノ収入ヲ得ントセリ、何レノ國ニ於テモ斯クノ如キ租税存セサル可カラス、我國ニ於テ地租カ此種ノ目的ニ用ヒラレ居タレトモ將來日本政府ノ膨脹スル後ヒ地租カ此ノ任務ヲ果シ得ルヤ否ヤハ大ナル疑問ナリト云フ可キナリ

第四章 国民経済の原則

租税ハ個人ノ富ノ一部ヲトリテ之レヲ国家公共団体ニ移スモノナリ、故ニ其ノ基礎ハ国民経済ノ上ニ存セサル可カラス、国民経済カ完全ニ發達シテ租税ハ益々増進トナル、故ニ於テ租税ハ国民経済ノ發達ヲ妨害スヘカラストノ原則也、國民経済ノ年々進ミ出ス所得ヨリ増収スヘクシテ所得ノ

増タル財產ヨリ増収スヘカラスト云フニ是又租税ノ生産及取引ヲ妨ヘカラスト云フ如キ種々ノ原則也、國民経済ノ原則ヲ明カニセントスレハ租税ノ發達環境ニ依リ研究スヘキナリ、即チ租税ト國民経済トノ關係ヲ明確ナラシメサル可カラス、租税ト至者トノ子條ニ就テハ種々ノ向頭生ス

第一、租税ハ如何ナルモノヨリ支取ハル可キヤノ向頭即チ税源ニ関スル向頭ナリ

第二、其ノ増減ハ如何ニシテ之レヲ確保シ得ルヤノ向頭ナリ

第三、租税ハ國民経済ニ如何ナル影響ヲ及ボスカ又租税ハ如何ナル程度ニ於テ之レヲ増収スルヲ得ルカ租税ノ負担増スル所個人ノ頭上ニ降下入可キヤノ向頭生ス、所云租税ノ限度ノ向頭實業ノ向頭債權ノ向頭若クハ還元ノ向頭ナリ等ノ諸向頭ヲ節ヲ逐テ説明セント欲ス

第一節 税源の模範

ヲ有スル者ノ何人タルヤヲ問ハス、所得ト云ヘハ直テニ人即チ個人至港ノ

主体ヲ聯想シテ財源ノ有無ヲ問ハサルナリ

斯クノ如ク所得ハ年々歳々規則正シクハリ来ルモノナルカ之レニ改シテ年々歳々規則正シク繰リ返ヘサスシテ時テ個人ノ収入トナルモノナリ、之レヲ類似収入ト云フ、例ハハ相續、贈与、富貴ノ利益等ノ如シマ等ノ所得ノ類似収入等ヲ併セテ個人ノ収入 (Earning income) ト称ス

叙上ノ如ク個人ノ所得ヲ有シ之レニヨリ収益ヲ得、此ノ外自己ノ勤勞ニ

ヨリテ勤勞所得ヲ得又随時収入ヲモ得、之等ノ中ニテ何レヲ税源トスルヤ

カ又向懸ナリ、余ハ之レニ答ヘテ原則トシテ所得ノ税源ニシテ財產ハ只例

外トシテ税源タルコトアリ、随時収入ハ税源タルモノニアラスシテ只副ト

シテ税源タルコトアリト云ハントス、其ノ理由ハ次ノ如シ

第一、所得カ何故ニ原則トシテ税源ナルカ、元來租税ハ国家公共団体ノ至

少費ヲ支弁スル中堅トナルヘキモノナリ、又時ニヨリテハ臨時費ヲ支弁

セサル可カラス、至少費支弁ノ中堅骨體ト云フハ又至少收入ノ中堅骨體ナ

リト云フコトナリ

然ルニ至少收入ハ国家公共団体カ各々前年度毎ニ規則正シク繰リ返シテ

得ル收入ナリ故ニ租税モ亦現今ノ財政組織上年々歳々規則正シク繰リ返シ

テ所得ヲ得ルカヲ有スヘキナリ、換言スレハ租税ハ尽キサル税源ヲ有セ

サル可カラス、他方ニ個人至港ナルモノヲ見ルニ年々歳々生産ヲナシ、

營利ヲナシ又消費ヲナセリ、其ノ生産若クハ營利ノ結果ヨリ生産費、至

少費ヲ差引キタル後余ハ其ノ年ニ於テ個人至港ノ自由ニ消費シ得ルモノ

ナリ、之レヲ消費トシテ之後メヌニ個人至港ノ基礎ヲ傷ケルコト、モナ

ラス、又學費ヲ營スルコトニモナラス、故ニ租税ハ斯カル部分ヨリ支弁

ハサル可カラス、斯アル部分ハ即チ個人ノ所得ニ外ナラス、故ニ税額ハ

所得タル可シト云フコトニ歸ス、所得カ税源タル限リハ租税ハ年々繰返

シテ至收スルヲ得、而カモ之ニカクメニ個人至港ヲ營スルニトモナク又

至港上ノ學費ヲ妨ケルコトモナキナリ、随時収入ヨリ租税ヲ支弁ハシム

ルトモ個人至港ハ後メニ害セラル、コトナケレハナリ、併シ隨時収入ハ

之レヲ個人至港上ヨリ見レハ時ニヨリテ取得スルモノナレハ年々歳々繰

返ナル、キ性質ノモノニアラス、從テ年々繰返シテ租税ヲ私ノ源トナリ

得たり、只之レア存スル場合ニ税源タルコトヲ得ルノミナリ、然ルニ之
 ンヲ国家ノ上ヨリ見レハ隨時収入ヨリ支払フヘキ税ハ年々歳々之レヲ存ス
 ルナリ、之レ大款ノ上ニ現出シタル現象ナリ、故ニ国家ヨリ見レハ隨時収
 スニ年々ノ税源ト見ルコトヲ得、又隨時収入ニ課スル税ハ一國租税収入ヨ
 リ見レハ極メテ僅少ナルモノニ違キス、從テ隨時収入ハ国家ノ上ヨリ見ル
 べきタル税源ト云フヲ得ス、故ニ余カ爾タル税源ト云フ所以ナリ、最後ニ
 税源ヲ以テ税源トナシ得ルヤ否ヤノ商榷ヲ研究セン

則テハ元来税源トシテ常ニ之レヨリ
 租税ヲ取ハシメナハ租税ノ破壊ヲ終ニ租税制度ハ維持スル能ハ
 サルニ至ル、故ニ税源ハ原則トシテ財源タルヘカラスト云フコト、ナル
 財源中最モ重キヲナスハ資本ナリ、然ルニ現今ノ経済社会ニ於テ生産ヲ
 ナスニ欠ク可クモカラザルモノアリ、之レアルヲ以テ富ヲ維持シ且ツ増加
 セシムルヲ得ルナリ、然ルニ今之レヲ税源トシテ之レニヨリテ種々ノ租税
 ヲ支払ハシムルトハ国家ハ維持榮達ヲ期シ難シ、故ニ資本ヲ税源トラシ
 ハル可カラズトノ結論ニ到達ス

尚ホ資本ヲ税源トラシムルコトニ付テハ議論アルヲ以テ更ラニ進ニテ研
 究セン

資本ハ学者之レヲ固定資本ト流動資本トニ分ツ

今流動資本ヲ税源トス
 ルト仮定スレハ生産事業ヲ縮小セシムルノ結果トナルナリ、労働者モ亦十
 分ノ賃金ヲ得ル能ハサルニ至ル、余ハコウエジスバンドラオクシテ悉ク眞
 理ナリトハ考ヘサレトモ流動資本ヲ税源トスル結果ハコウエジスレニ影響
 ヲ及ボスハナリ得ヘシト信ス、斯クシテ労働者ノ賃金減セハ労働社会最ハ
 労働社会に害セハ一國ノ社会ノ生産ヲ衰微セシムルコト、ナル、故ニ固定
 資本ヲ税源トスルト仮定セハ資本家、租税ヲ支払フカクマメ国家資本ヲ忘却セ
 サレ可カラザルニ至ル、斯クスレハ生産ノ中止トナリ個人至濟ハタメニ衰
 頹ス、據リテハ都市田舎共ニ衰ヘテ国家ハ租税ヲ得ル源ヲ失ヒ漸次破滅ス
 レニ至ル可シ、此ノ如キ例ハ歴史上各人ノ屢々散見セシ所ナリ、依是觀之
 則テ資本ハ税源トスヘカラス、乍作租税ハ常ニ非常費ヲ支拂シ得ルノ
 ミナラス、斯ニハ之レヲ財源特ニ資本ヨリ望成スレニ至ルモ詳ス可キニア
 ラズ、斯クナレハ国家カ自存スルコト大ニ重クシテ財源資本ノ忘却難クナ

ルナリ、之レ以下、事ニ急ニシテ将来ノコトヲ考慮スル違ナケレハナリ
 其時税ハ新カシ主旨ヨリ出テシナリ、斯クノ如キ場合ニハ富者ハ例外トシ
 テ税源トナルハシ、富者ニ資本ハ前述ノ如ク非常ノ場合ニ例外トシテ税
 源ニルコトヲ得ルカ内ホ外ノ場合ニ税源タルヲ得ルヤ否ヤノ同題ヲ生ス、
 多クノ学者ハ之レヲ否定ス独リ *Wagner* ハ財產税源タリ得ル場合カ
 フリト云フ、彼ハ資本ヲ国民資本トシテ、資本トニ分テ而シテ私ノ資本ハ広
 キ範圍ニ於テ税源タリ得トス *Wagner* ノ説ヲ紹介セニ「資本ハ未至濟
 級 *Kategorie* *Kategorie* 正史改法律級 *Kategorie* トニ分タサル可カ
 ヲス、至濟級 *Kategorie* ニ於テハ資本ト云フハ生産ニ必要ナル財
 フ云フ、正史改法律級 *Kategorie* ニ於テハ資本トハ之レヲ所有ス
 ルモノニ對シテ收入ノ源泉トナルモノヲ云フ、ソレカ生産ニ参加セルヤ否
 ヤヲ問ハス、故ニ前者ハ總對總ニ生産ニ必要ナルモノニシテ後者ハ労働者
 階級ヲ支配スル富者ノ收入ヲ形成スルモノトナル、至濟級 *Kategorie*
 ニ於ケル資本ハ生産ニ於テ如何ナル働キニナルカヲ見ルモノニテ、正史改法
 律級 *Kategorie* 一於ケル資本ハ分配ニ於テ如何ナル働キヲナスヤヲ見

ルモノナリ、所謂國民資本トナルモノニシテ前者ハ私資本トナルモノナリ、
Wagner ハ斯クノ如ク資本ヲニツノ *Kategorie* ニ分テ之レカ税
 源トナルヤ否ヤニ論及シテ曰ク、私資本ヲ税源トスルモ國民思想ヲ毫モ傷
 ケスシテ單ニ其ノ分配ヲ変スルニ過キサルモノナリ、斯カル場合ニハ私資
 本ヲ税源トスルモ何等不都合ナシ、斯カル場合ニハ私資
 本一、其租税ノ收入ヲ以テ之ヲ私經濟的投資又ハ國民經濟的投資ニ用ユル
 場合ナリ、此ノ場合ニハ個人ノ私資本或ハ之ヲ失フヤモ知レサレトモ國
 民資本ハ毫モ失ハス、
 其二、私資本ヲ投スルコトカ輪モ國民經濟ニ於ケル個人資本ノ積聚ヲ起ス
 カ如キ働キヲナス場合ナリ、即チ斯クノ如キ場合ニハ個人ノ自由所得並
 ニ貯蓄カ一方ニテハ減シ他方ニテハ増スコトトナリテ國民經濟全体トシ
 テハ何等失フ所ナキナリ、例ハ私資本ニ課スル税ノ收入ヲ以テ食民學
 者ヲ起シ労働保險ニ費スルトキニハ労働者階級ヲ利益シ且ツ其ノ經濟上
 ノ救方ヲ高ム、又労働者ノ主トシテ負担スヘキ税、例ハ消費貨金税ヲ
 徴シテ之ヲ補フニ私ノ資本ニ課スル税ヲ以テスル場合ハ富者ハ其自由所

リ、故ニ學者カ此ノ真ニ於テ攻撃スルハ当ラスト信ス、然レトモ一歩ヲ
 進メテ *Magnus* 氏カ私ノ資本ニ課税スルモ之レ只分配ヲ変スルニ過
 キスヲ論スルニイタリテハ俄カニ首肯シ得ラレス、*Magnus* 氏ノ論
 ハ一種ノ目的説論ナリ、然ルニ現今諸國ノ財政制度ヲ見レハ何レモ目的
 税制度ヲ打破シテ予算統一主義ヲ採用セリ、故ニ今日ハ *Magnus* 氏
 ノ論ハ實際上ニ之レヲ尅当スル能ハスト云フモ不可ナシ、故ニ學者ハ又
Magnus 氏ノ社会政策的見地ヨリスル財產課税論ヲ批評シテ曰ク、
 財產分配ノ不平等ヲ嚙ラスハ、可ナレトモ之レヲ以テ課税ノ理由トスル
 ハ不可ナリ、此ノ批評ハ理ノ存スル如ケレトモ余ハ此ノ論ハ当否ヲ求ス
 ルニハ租税カ社会政策ノ手段トナリ得ルモノナリヤ否ヤ先ツ定メサル
 ヘカラス、余ハ第一章ニテ論セシ如ク租税ヲ以テ財政上收入ヲ得ル手段
 トスル外ニ社会政策ノ手段トナシテ用フルモ是迄支ヘナシト信ス、従テ財
 産特ニ資本ノ不平等ナル分配ヲ矯正スル論メ財產特ニ資本ニ課税スルヲ
 不可ナリトシテ排斥スルヘカラスト信ス、
 斯クナレハ財政學ヨリ寧ク政令政策上ニテ論スヘキコトナリ、カク

論シ要レハ個人ノ財產特ニ資本ハ社会政策ノ見地ヨリ課税トシ得ルコト
 トナル、斯ク云フモ凡テノ財產特ニ資本カ課税トナルト云フニ、アラス、
 恰モ保護税カ或ル種ノ關稅ニ限ラン、カ如ク社会政策ノ上ヨリスル財
 産資本ヲ課税トスル場合モ業ヨリ限リアルモノト云ハサルヘカラス、之
 レヲ全体ノ上ヨリ見レハ財產特ニ資本カ課税トナルハ例外的ナリト云フ
 ヘキナリ、之レハ要スルニ財產ハ原則トシテ課税トラシムヘカラス、只
 例外トシテ課税ヲ研究シテ所得ハ課税トナルモノナリ、財產特ニ資本ハ
 例外的課税タリ得ルモノナルコトヲ明カニセリ、カクシテ財產特ニ資本
 ハ原則トシテ課税トスヘカラストス、之レヲ租税客體トスルハ毫モ妨ケ
 ス、世ニ普通財產税又ハ資本税ト云フハ財產若ハ資本ヲ課税ノ客體トス
 ト云フ意ナリ、財產又ハ資本ヲ課税トストノ意ナラズ、換言スレハ財
 産若ハ資本ヨリ生スル收益ヲ課税トセサルモノニシテ之レニヨリテ租税
 ヲ支払ハシムルコトヲ主旨トスルモノナレトモ其ノ收益ヲ直接ニ課税ス
 シテ財產若クハ資本ヲ課税トシテ間接ニ課税セントスルモノナリ、斯クノ
 如ク財產若クハ資本ヲ租税ノ客體トスルモノヲ名實上ノ財產税若クハ資

三三八
不税ト云フ、之レニ及シテ財産若クハ資本ヲ實ノ源泉トスルモノヲ実質
的財産若クハ資本税トス、実質的資本税ト名実上ノ財産税ト、觀念上
明カニ區別スルコトヲ得、只実質上ハ之レヲ區別スルニ困難ナキニシモ
アラス、之レヲ區別スル標準ハ先ツ税率ニ下リト云フ可キナリ、税率低
キトキハ財産ヨリ生スル収益ヨリ支払ハル、コトヲ得、故ニ名実上ノ
源泉税トナレ、之レニ及シテ税率高キニ至レハ収益ヲ以テハ租税ヲ支払
セ得ス、財産ノ一部ヲ以テモ租税ヲ支払ハサル可カラサルニ至ル、カク
ナレハ実質的財産税トナルナリ、税源ハ原則トシテ所得タル可ク財産ヲ
ル可カラストトノ理論ヨリ出テ本レハ財産ハ、名実的トナレハ可ナレ、モ
実質的トナルト不可ナリ、実質的トナルニハ前述ノ如ク財産カ別外トシ
テ税源タリ得ル場合ニ限ラレ、モノナリト云フニ帰着ス

第二節 租税客体ノ撰取

前節ニ述ヘタル如ク税源、原則トシテ所得ノルハキモノナリ、然ラハ所

得ニ直接ニ課スル税ヲ最モ念及、モノトス、從テ唯一ノ所得税ニテ財政
ヲ処理スルヲ最モ當ラ得タルモノトス、如何ナル形ニ於テ課税スルトモ
其ノ帰スル所ハ所得ノ負担トセサルヘカラサレハナリ、然ルニ個人ノ所
得ハ種々外溢ニ乘ハレ来レモノアレトモ外部ヨリハ容易ニミレテ知ルヲ
得サルモノアリ、故ニ文明諸國ノ所得税ハ後述スル如ク租税義務者ノ申
告ヲ以テ基礎トナシタリ、然ルニ無所得ノ申告ナルモノハ何レノ國ニ於
テモ負担ヲ得ルモノニアラス、故ニ所得税ハ所得額ノ大小ニ依スル課税
トナラズシテ不公平ニ陥ル恐アリ、加之租税ヲ唯一ニ限ルトギハ至費ノ
膨脹ニ從ヒテ限りナク其ノ税率ヲ異ムルヲ要スルコトナリ、然ルトキハ
租税義務者ハ負担ノ重キヲ感スルニ至ルナリ、其心ノ非常ニヨク牽連セ
レモノト云モ斯カル場合ニハ脱税ヲ試ミ牽絏ヲナスニ至リ強イテ呈報セ
ントセハ非常ノ干渉ヲ受スルコト、ナル從テ呈報費巨額トナリ、租税ノ
純収入比數減少クナル、然ルトキハ所得單一税ニテハ到底至費膨脹ノ趨
勢ニ伴フヲ得ス、即チ財政政策上ノ原則ト調和スルヲ得サルニ至ル、故
ニ我國租税法ニ所得税ノ外ニ他ノ方面ヨリ所得ヲ調ヘテ又課税スルニ

努ムルニ至レリ、斯クテ租税客体内題ヲ生スルナリ、先ツ租税客体内定
義ヲ明カニセム、

租税客体内ハ吾カ法律ニヨリテ之レヲ課税物件ト称ス、之レ租税賦課ノ
目標トナル物件又ハ事實ニシテ之ヨリ租税ノ所在ヲ推定セントスルモノ
ナリ、故ニ租税ノ客体内ハ税源トハ異ナル、

(一) 租税ハ租税ノ由テ以テ支払ハルヘキ項ナリ、例ヘハ泉ノ如シ、

(二) 租税ノ客体内ハ租税賦課ノ目標トナル物件又ハ事實ナリ、例ヘハ泉ヨ
リ流レ出ワル河水ノ如シ、コノ河水ニヨリテ泉ヲ知ルナリ、租税客体内
ハ課税標準ト區別スルヲ要ス、

(三) 課税標準ト云フハ税額ノ大小ヲ定ムル尺度ニシテ租税客体内ニ關係シ
テ計算シテ出テタル数量又ハ價格ナリ、此ノ術語ヲ混内スヘカラス、
之レヲ例示スレハ地租ニ於ケル源泉ハ地主ノ所得ヲナセル土地ノ收益
ナリ、地租ノ客体内ハ此ノ收益ヲ生スル土地ナリ、課税標準ハ地價ナリ、
營業税ニ於ケル租税ハ營業者ノ所得ヲ構成スル營業ノ收益ニシテ租税
客体内ハ營業者ノモノナリ、課税標準ハ売上高資本高収入ノ額、従業員

ノ数家賃賃借價格ナリ、酒税ニ於テハ客体内ハ酒業ナル事實ナリ、
租税ハ酒ヲ消費スルニヨリテ示サレタル所得ナリ、課税物件ハ造石高
ナリ、

斯クノ如ク租税客体内ハ税源及ヒ課税標準ト區別スルヲ要スルモノナ
ルカ時ニヨルト實際ニ於テ税源トシキ場合アリ、即チ所得税ニ於
テ之レヲ見ル、所得税ニマリテハ所得ハ税源ニシテ全時ニ租税客体内
ナリ、次ニ租税客体内ニヨリテ租税ノ所在ヲ推定シ之レニ課税スル方法ヲ
説クヘシ

先ツ個人經濟カ如何ナル現象トナリテ外部ニ現ハレタルカヲ明カニ
スルヲ要ス、個人經濟ノ外部ニ現ハレタル現象ヲ見ルニモノ四ツノ租
税ナリ、

- 第一、財産所得ノ事實ナリ、
- 第二、生産並ニ營業ノ事實ナリ、
- 第三、消費事實ナリ、
- 第四、財ノ賣買又ハ交換ノ事實ナリ、

此ノ四ツノ事案ハ皆個人全済ノ税源ヲ有セシムルモノナリ、
 尤ノ台ハ、第一ノ事案ナリ、或處收有ナル事案ニヨリ所得、収益ヲ生
 スルコトヲ推定スルヲ得、普通ノ場合ニ於テ財産ヲ遊ハシテ利用セサ
 ルハ想像シ得ルナリ、第二ノ事案ナル生産並ニ官利ニヨリ個人カ所
 得ヲ得ツ、アルコトヲ推定スルヲ得、生産並ニ官利ハ必要所得ヲ得ル
 カタメニ行ヘタルモノナレハナリ、第三ニ費用消費即チ云義ノ消費
 ニヨリ個人カ税ニ所得ヲ有セサルコトヲ推定シ得、蓋シ所得ナキモノ
 ハ消費スルヲ得ナレハナリ

第四ノ事、交換売買ヨリ戻ルトキハ個人カ生産又ハ官利ヲナスカタ
 ノ若クハ消費ヲナスカタメニ等ハ契ルモノナレハ個人カ此レニヨ
 リテ所得シ得、アルコト若クハ光ニ所得ヲ有セルコトヲ推定スルヲ
 得、斯ク觀ムルニヤハ個人全済ヨリ生スル各現象ハ皆所得ノ存在ヲ及
 証スルモノト云フヲ得、故ニ租税立法ハ是等ノ事案、之等ノ現象ヲ捕
 フルコト、ナリナリ、而シテ前述セシ第一事案ニノ現象ハ個人ノ所天收
 ハ全済ヲナスモノナリ、第三ハ個人ノ支出全済ヲナスモノナリ、第四

ハ個人ノ収入支出全済ニ巨ル取利源泉ヲナスモノナリ、然ルトキハ
 租税立法ハ個人ノ収入全済支出全済取引ノ係ニヨリテ所得ヲ推定シ
 レニ依リテ税源ヲ精振スレト、ナルナリ、之レ租税各体ヨリ税源ヲ
 捕捉スル方法ナリ、斯クシテ租税ハ租税各体ヨリ大体三ツノ大ナル部
 門ニ分ル個人ノ収入ノ事案ヲ租税ノ各体トセルモノハ所云権利税ニシ
 テ個人ノ支出ナル事案ヲ各体トセルモノハ消費税ナリ、個人ノ取引于
 ナル事案ヲ租税ノ各体トセルモノハ交通税ナリ

第一ノ収入全済ニ於テハ先ツ財產并有ナル事案ニ税スルヲ要ス、之
 レ所云財產税ナリ、次ニ財產ヲ財源ト見ル之レニヨリテ生産又ハ官利
 ヲナセルヲ見テ税スルモノヲ収益税トス、収益税中土地ヲ税スルハ地
 租家屋ニ税スルハ家屋税、營業ニ税スルハ營業税、資本ニ税スルハ資
 本税又ハ資本利子税ナリ

第二ノ支出全済ニ於テハ消費ナル事案ヲ見テ税スルナリ、外国ヨリ
 入り来ル消費物ニ課スルモノハ關稅ニシテ内地ニテ生産シ消費セラル
 、モノニ課スルモノカ内地消費税ナリ

第三ニ取引子係ニ付テハ先ツ取引自体ヲ税入ノ之財産交換後ナリ
取引自体ヲ税入レ能ハサレ時ハ之レニ関聯シテ主スル海陸行爲又ハ補助
行爲ヲ税入テ税スルナリ。其ノ附屬行爲ハ單ニ價格ヲ表示スルニ過キサ
ズモノアルカ故ニ之レヲ價格交換税ト云フ。其ノ移転ヲ官簿ニ登録スル
事實ヲ税入テ税スルヲ登録税ト云フ。又其取引ニ伴ヒテ文書ヲ作成セル
ノ事實ヲ税入テ税スルヲ文書税又ハ印紙税ト云フ

上述スルカ如ク租税ノ客体ヨリ租税ヲ見ルトキハ殆ント凡テノ個人至
清現像ニ關係セルヲ知ル。斯ク租税ノ客体ヨリシテ税源ヲ推定シ之レヲ
税入ノコトヲ務ムルヲ以テ直接ニ税源ヲ税入ル所得税ヲ指シ以テ所得ヲ
税源トスルノ主旨ヲ貫クモノナリ。故ニ税源ノ客体ヨリシテ税源ヲ税入
ルト云フハ正面ヨリ入ラスシテ裏面又側面ヨリ入ルモノナリ。故ニ斯ク
觀察シタル租税ハ所云名義上ノ租税トナリ。即チ名義上ニテハ財産
税、消費税、交通税トナルモ実質上ニ於テハ所得税タル可キモノナ
リ。以上ハ個人至清ノ現象ニ立脚シテ立論コレモノナルカ個人至清ノ現
象ハ他方ニ社会至清存クハ國民至清ノ現象トシテ現ハレ来ルモノナリ

第三節 租税主体ノ模状

第一款 租税主体ノ定義

租税ハ所得ヨリ見ルトキハ租税ハ生産交換消費等ノ現象ヲ税入フルモノナ
リ。云フヲ得。然ルニ生産交換等ハ國民至清ノ榮達スル所以ナリ。故ニ
之ハ曰ク生産交換ノ現象ニ税スルハ國民至清ノ榮達ヲ害スルモノナリ
ト。然レトモ租税ノ生産交換ノ現象ヲ税入フルハ前述セシキ所得ヲ推則
シテ其ノ所得ノ方法ヲ攻撃セントスルニ過キサレナリ。換言スレバ租税
ヲ攻撃セントスルモノハ所得ニシテ生産交換ニアラス。所得ハ隱レ生産
交換ハ外部ニ現ハル。故ニ此ノ外部ニ現レタルモノヲ目標トスルナリ。
斯クノ如ク租税ハ所得ヲ攻撃スルコトヲ主旨トセルモノニシテ生産交
換ヲ攻撃スルモノニアラス。故ニ國民至清ノ榮達ヲ害スト云フヲ得ス。

租税ハ税源ヨリ支払ハル、ヲ主旨トス、其ノ税源ヲ税入ントシテ租税客

体ノ向額ヲ生スルハ前節ニ述ハシ如シ、然レニ租税客体ナルモノハ多数
 ノ人カ相交渉シテ現レ来ルモノアリ、斯カレ場合ニ租税ハ何レノ人ニ賦
 課ス可キヤ、向額生ス、之租税主体ノ向額ナリ、租税主体ハ之レヲ以テ
 ニ解スレハ租税ヲ納付シ又ハ之レヲ負担スル何人否、主体ナリ、故ニ
 納税者租税者等ヲ包括ス、然レトモ之レヲ狭義ニ解スル時ハ納税者ナリ
 即チ法律上租税ヲ納付ス可キ自然ハ又ハ法人ナリ、普通租税主体ト云フ
 トキハ之レヲ狭義ニ解ス此ノ意味ニ於テハ租税主体ハ事實上ノ租税ヲ
 負担スルト否ト問ハス、然ルニ租税者ト云フハ自己ノ所得又ハ財産ヨ
 リ租税ヲ支払フモノナリ、事實上租税ヲ負担スルモノヲ云フ、故ニ納税
 者ト租税者トハ或レ場合ニハ一致スレトアルモ常ニ然リトハ云フヲ得
 ズ、其ノ一致セサル場合ニ於テハ自己ノ營業資本ヨリ租税ヲ支払ヒテ後
 其ノ補ヒヲ受ケタルモノナリ、何等ノ自己ノ利益ヲ犠牲ニスルコトナシ
 之レニ及シテ租税者ハ自己ヲ租税納付ノ手續ヲ爲サ、ルモ終局ニ於テハ自
 己ノ所得又ハ財産ヨリ之レヲ支払フモノナリ、斯カレ場合ニ於テハ所得
 租税納付ノ向額ヲ生スルナリ、例ハハ酒税ニ於テ納税者ハ造酒家ニシテ

租税者ハ消費者ナリ、酒税ハ客マシテ遂ニ消費者ノ負担ニ帰スルナリ、
 之レ酒税ノ本質ナリ、以テ法者ハ租税法ニ於テ租税ノ本質ヲ予期セルニ指
 ハラス、實際ニ於テハ予期ノ如ク賦課セサルコトアリ、故ニ租税者ト租税
 指定者ト區別ヲ生ス、租税者トハ事實上租税ヲ負担スル人ニシテ租税指
 定者ハ立法者カ納税者トシテ指定セル人ヲ云フ、例ハハ酒税ニ於テ之レ
 ヲ等実負担スルモノカ消費者ナルトキハ納税者ハ消費者ナリ、然レニ市
 場関係ニテ造酒家ハ租税ノ額大高ク當ルコト能ハサルコトアリ、カ、ル
 場合ニハ納税者ハ消費者ニアラスシテ造酒家ナリ、或ハ租税者ハ造酒家
 消費ノ何レニモアラスシテ其ノ中間ノ商人ナルコトアリ

以上ノ租税主体ノ意義明カシタルカ租税主体ニ于シテ起ル大向額ハ租
 税負担ノ帰着又ハ租税賦課ノ向額ナリ、蓋シ租税ハ何人否、主体ノ上
 ニ落ツル一ツノ犠牲ナル故ニ各人ハ皆之レヲ免レテ之レヲ他ニ賦課セント
 務ムルニ至ルナリ、租税負担ノ帰着ナル向額遂ニ生ス

即チ至清交還ニヨリテ租税負担カ納税者ヨリ他ニ転スル成行即チ
 此ノ本義ニ於ケル賦

據ハ管ニ先ニ載録セラレタル租税カ叙載者ヨリ數々シテ他ニ移リタル現
象ヲ意味スルノミナラス將來課セラルヘキ租税カ叙シテ現在ニ於テ負擔
セラルカ如キ現象ヲ指スナリ。前者ヲ敘載ノ租税叙載ト云ヒ在者ヲ租
税ノ遷延若クハ租税ノ償却ト云フ。本義ニ於ケル租税叙載ハ全着社会ニ
於テ或人或階級ノ人カ租税ノ負擔ヲ免レテミレラ他ニ載セントスルカタ
メニ起ル争ヲ包含マル、コトアリ 所云通租關事ナリ

第二 租 税 ノ 叙 載

敘載ニ於テ租税叙載トハ私全着級交通ニヨリテ租税ノ負擔ヲ一人ヨ
リ他人ニ移サントスル成行ヲ云フ。普通ノ場合ニ於テハ租税ヲ納付シタ
ルモノカ其ノ租税額ヲ課税物ノ西格ニ加ヘテ償還其ノ他交換ノ形ニ依
リテミレラ他ニ載録セントスルモノナリ。全着界ノ状態ニヨリテハ其ノ
叙税額ヲ他載スルコトヲ得サレ場合ナキニアラス、ソノ租税額カ奈辺ニ
歸着スルカヲ研究スルカ叙載同義ノ目録トスル所ナリ、故ニ叙載ノ叙載

分取論極形成ニ于テ大ナル大問題ナリ叙載ニ于シテハ昔ヨリ種々ノ
税アリ、内習学派ノ学者ハスヘテノモノヲ以テ叙載スルモノナリトセリ
(地租ハ Rent / Stearns) ニヨリ叙載セントハ例外ナリ
蓋シ彼等ハスヘテノ説ハ純所得ヨリ支払ハルモノトスルカ故ニ純所得
ノ契キモノニ課セラレタル税ハ勞ヒ純所得ヲ有スル者ニ載録セラル可シ
トセリ。又彼等ノ利益ハ調和スルモノトスルカ故ニ租税ハ或ル階級ノ人
ノミノ負擔ニ于シ一時利益ノ不調和ヲ来スコトアリトスルモ長年月ノ同
ニハ次第ニ其ノ負擔カ他ノ階級ニ移リ行クモノニシテ利益ノ調和ヲ来タ
スニ至ルト論セリ。此ノ論實ヨリシテ *Can Caha* ハ旧税ハ善良ナ
ル税ナリ、新税ハ惡税ナリト云ヘリ

蓋シ新税ハ吾等ヲ係フ或ニ利益ノ不調和ヲ来タスモノナルモノノ負擔
ハ日テ遂ヒ他ニ移リ遂ニ純所得ヨリ支払ハルコト、ナル、茲ニ利益ノ
調和ヲ見其ノ税モ良税トナルト云ヘリ。乍併ミレラ實際ニ望スルモ凡テ
ノ税ハ必然故ニ載録スルモノニアラス。租税ノ中ニハ是モ載録セサルモ
ノアリ、依テ多クノ学者ハ或ル種ノ税ハ常ニ叙載スルモノナリ、他ノ種

税ハ常ニ転嫁セラルモノナリト考フルニ共ニリ、カ、ル考ヨリシテ、
 直接間接税ノ區別生セリ、直接税ハ転嫁セス、間接税ハ転嫁スル税ナリ
 然レニ一歩進ミテ考フルニ同一ノ租税ニ於テモ時ト場合ニヨリ転嫁スル
 コトアリ、又転嫁セサルコトアリ、転嫁ノ状態ハ第一ニダスシモ一歩十
 リト云フヲ得ス、然ラハ或種ノ税ハ常ニ転嫁セストスル考ハ誤レリト云
 ハサル可カラズ、故ニ學者カ転嫁ノ状態ニヨリ區別ヲ立ツルニ至レリ、
 其ノ區別ノ一級ニ用ヒル、ハ、前転、後転 (*Anticipation*)

Rückwärtslegung、*abwärtslegung* (消転セリ、前

転ト云フハ生産者又ハ商人カ賦税スルモノニシテ消費者カ負担スル場合
 フズリナリ、コノ場合ニ於テハ至清交通ニ於ケル前者ヨリ後者ニ転スル
 ナリ、後転ト云フハ租税ノ負担カ消費者ニ転セス生産者又ハ商人ニ帰ス
 ルヲ云フ、生産者商人等ハ至清交通上ヨリ云ハハ消費者ヨリ前位ニアル
 モノナリ、租税法ハ至清交通上ノ前位ヨリ後位者ニ租税ノ転嫁ヲ予期セ
 レニ拘ハラズ租税ノ負担ハ前位ノ人ニ止マル故ニ之レヲ税法ノ予期ト実
 際ノ結果ヨリ見レハ租税ハ前者ヨリ後者ニ転セリトモ見ルヲ得之レ後転

ノ名アル所以ナリ、特転ト云フハ租税カ一旦納付セラル、モ何人ノ負担
 ニモ帰レサルモノヲ云フ、即チ此ノ場合ニ於テ租税ハ人ニ転セス人ヨリ
 物ニ転スルト云フヲ得、人ヲモトシテ考フレハ租税負担ノ消滅ト云フヲ
 正シトス、此ノ転嫁ノ區別ハ、ワグネル以テ一級學者ノ採用スル所トナ
 レリ、コノ転嫁ノ區別ヲ認メルコトハ租税カ時ニヨリ転嫁ノ態様ヲ異ニ
 スルヲ認ムルコト、ナル、然ラハ転嫁ノ態様ノ異ル理由如何思フニ転嫁
 ニ処スルハ至清上ノ強弱ナリ、至清上ノ強者ハヨク租税ヲ転嫁スル
 コトヲ得ルモ至清上ノ弱者ハ転嫁スルコトヲ得ス、強者ハ弱者ニ勝ツト
 云フ社会法則茲ニ行ハル、乍然至清上ノ強者ト云フハ貧富ノ意味ニア
 ラズ、至清上ノ強者ト云フハ至清市場ニ於テ有利ノ地位ニ立テタル人ナリ
 若クハ至清上ノ力大ニシテ他ノ人ヲシテヨク従ハシムル人ヲ云フ、至清
 上ノ弱者ハ公シク至清市場ニ於テ力ノ強キモノナリ、故ニ今若シ生産者
 カ至清上ノ弱者ナリトセハ彼等ハ課税物体ノ価格ヲソノ税額ノミヲ加ヘ
 テ消費者ニ売ルコトヲ得ルナリ、従ハハ市場ニ於テ需要者ヲシテ価格ノ
 騰貴ヲ認メシムルカヲ有セル生産者又ハ必要品ヲ生産シ販売スル人等ナ

リ、斯カル場合ニハ課税物体内市場価格ハ少クモ税額大ク騰貴ス、從テ租税ヲ負担スルモノハ消費者トナル故ニ於テ進取又ハ前取現象起ル然ルニ消費者カ益得ルノ強者ナリトセハ生産者ハ課税物体内價格ニ税額ヲ加ヘテ賣ルコトヲ得ス、例ハハ消費者カ大ナル場合又ハ價格騰スレハ消費者カ之レヲ買ハサルニ至ルカ又ハ代用品ヲ用ヒ得ル場合ニ之レヲ買ルナリ、斯カル場合ニハ租税ハ課セラル、モ其ノ物体内市場價格ハ騰貴スルコトナシ、從テ租税ヲ負担スルモノハ消費者ニアラス生産者又ハ商人トナル斯クシテ後取ノ現象起ル、次ニ取嫁ハ生産ノ改良ニヨリ生スルコトアリ詳言スレハ租税ハ生産ノテクニツクテ進取セシメ全營方法ノ改善ヲ促シ之レヲ以テ生産費ノ節減ヲナシ、若クハ生産品ノ品質ヲ高メ或ハ生産品ノ數量ヲ増スコトアリ、カ、ル場合ニハ租税ハソノ生産費ノ減少或ハ生産品ノ品質ノ良好ナルコト、又ハ生産品ノ數量ノ増スコトヨリ生セル利益ニヨリ及私ハル、コト、ナルカクシテ、消費者現象ハ消費稅殊ニ原料品ニカクル消費稅ニ於テ之レヲ見ル、租税カ原料品ニ課セラル、時ハ生産者ハ同一ノ原料品ヨリナルヘク多額ノ生産品ヲ取ルカ若クハ品

價ノ勝リタル生産品ヲ得ルコトニ苦心スルカ故ナリ、取嫁ハ尚ホ期待スル取嫁又ハ期待セサル取嫁ニ分ケサルヘカラス、期待スル取嫁ハ租税立法者カ便宜ニ課税物体内直得ニ關係セル者ヨリ租税ヲ免ルモノノ納税者ノ價格ヲ高クシ租税ヲ他ニ取嫁スルコトヲ期待セリ、後云セハ租税立法者カ租税指定者ニ租税ヲ課セシムルコトヲ期待セリ、只租税ノ技術上ノ租税ニ課スルニ過キス、斯カル租税ハ消費稅特ニ内地消費稅ニ於テ之レヲ見ル、生産者又ハ商人ヨリ租税ヲ望ムル消費稅ヲシテ之レヲ負担セシメントスルモノナリ、蓋シ期待ノ取嫁ニアリテハ納税者ハ法ノ強制ニヨリ自己ノ危険ニ於テ租税ヲ天私ア、國家ハ之レニ稅収ヲ附與シ他人ヨリ追索スルコト覚悟スルコトナシ故ニ納税者ハ只司法上ノ手帳ニアリ、私法的取引ニヨリ租税ヲ取嫁セントノ希望ヲ有スルノミ次ニ期待ニ及スル取嫁トハ法律上之租税指定者カ至濟上ノ交通ニヨリ其ノ負担ヲ他ニ取嫁スルヲ云フ、コノ種ノ取嫁ハ租税ノ計畫ヲ打破スルモノニシテ公平ニシテ合理ナルヲ不公平不合理ノ租税トナスナリ、即チ法律ノ缺セサル租税負担ノ分配ヲ生スルナリ、コノ種ノ取嫁ハ至濟手帳ニ於テ事實上有ス

ル勢カノ働ヲカ為メニ起リシモノナリ、但ハ八収五税即チ家屋税、營業
三十四
税、資本税等ニ於テハ法律ハ家主、營業者、資本主ニ課セントスルモノ
ナルモ之等ノ人ハ租税交通ニ於テ勢カヲ有シ其ノ勢カヲ利用シ租税負担
ヲ借款、小賣人、消費着、負債者等ニ転嫁スルコトアリ、租税政策ヨリ
見レハ期待転嫁ヲ充分ニ行ハシムル概ナスヘキモノニシテ期待ニ及スル
転嫁ヲ行ハサルヤウ勉ムヘキナリ、換言セハ所云間接税ハヨロシク転嫁
セサル概勢ムヘキナリ、

第三款 租税ノ還元或ハ租税ノ償却

今日ノ租税ノ還元ト云フハ將來課セラルヘキ租税カ現在ニ於テ戻租セラ
ル、ニト云フ、換言スレハ現在納付スル租税ハ過去ニ於テ既に負担セラ
レタルモノナリト云フコトヲ得、コノ現象ハ毎年繰返シ納付セラルヘキ收
益税ヲ資本ニ還元シ收益ヲ生スル財産價値ヨリ差引キテ其ノ財産ノ買價ヲ
サスヘキト云フニ行ハレ、蓋シ土地又ハ固定資本ノ收益ヲ減スルコト、ナル、

収益カ減スルトキハ其ノ財産ノ價格ハ之ニ比例シテ下ルヲ自然ノ勢トス、
其税額ヲソノ當時ノ通常一般ノ金利ニヨリ還元セシ額ノミカ下差スルコト
トナラサルヘカラス、コノ財産下落ノ嚆矢トナルハソノ土地又ハ固定資本
ニ始メテ課セラル、場合ニ之レヲ所有セシ人ナリ、蓋シ其ノ土地又ハ固定
資本ヲ得ルニ際シテ其所有者ハ租税ノ還元額ノミヲ買價ニセサルヘカラス、
之ヲ負ハントスルモノハ實際財産價格ノ減セラルモノヲ高ク買ハント努メサ
ルカ故ナリ、斯クシテ買主ハ後ニ至リ租税ヲ納付スルニ租税ヲ課セラレサ
ルト念標ノ法ヲ得ルニ至リ他ノ一般ノ財産ニ於ケルト念標ノ利通リトナル
収益ヲ得ルコト、ナル、斯クナルトキハ後ノ買主ハ租税ヲ負担セサルコト
トナリ、始メニ有セシ人カ一人永久ニ租税ヲ負担スルコト、ナル、後ノ所
有者ヨリ見レハ租税ハ金ク償却セラレタルモノト云フコトヲ得ルハ此種ノ
現象ハ最モ多ク地租ニ於テ見ルコトヲ得ヘシ、
殊ニ地租ハ永ク行ハレ而カモ変化セラレサリシ場合ニ於テ然リ故ニ學者
ハ地租ニ関シ此現象ヲ觀察シ地租ハ土地ノ負担ニ帰スルモノナリト云ヘリ、
地租ノ償却行ハルハトスレハ理論上ヨリ云ヘハ地租ノ負担者ハ最初

ノ地租制度ノ起リシトキノ地主ト云ハサルヘカラス、然ルニ地租制度ハ永
 ク行ハレ英ノ間改メラル、コトナシトセハ所有者ハ緩度ヲ代レルナリ、故
 ニ最初ノ所有者ヲ知ルコトハ困難ナリ、又實際最初ノ所有者ヲ知ル必要ナ
 シ、故ニ現在ノ土地ノ所有者ヨリ見テ地租ハ所有者カ之レヲ負担セズ、土
 地カ負担スト見ルコトモ得ルナリ、英國ノ地租ノ如キハ一六九三年ニ始メ
 テ迄サレタルモノニシテ一七九二年マテ一世能ク通シテサシモ変更スルコ
 トナカリシナリ、故ニ實際上地租ハ全ク土地ノ負担トナリシ感アリキ、斯
 シテ地租カ土地ノ負担トナル場合ハ地租ハ現在ノ地主ニトリテハ負担ヲ感
 スルコトナシト云ニ得ルナリ、故テ人ニヨリ或ハ地租ハ租税ノ性有ラ失フ
 モノナリト、故ニ旧地租ノ分ニ新シク地租ヲ徴收スヘシト論スルモノアリ、
 又及對ニ或ハ地租ハ地主ニ負担ヲ感セシムルモノナレハ之ヲ感セシムル報
 ニナスヘカラス、地租ハ従来ノ如ク据置置クヘシト云フモノニシテ何レモ
 極端ナル説ナリト考テ、係シ地租カ永ク変更セス、土地ノ負担ニ歸スルトキ
 ハ地租ヲ廢スルコトカ不合理トナリ、若シ地租ヲ變セハ土地ノ賣買相場カ
 騰貴シ、之レハ現在ノ地主ニ贈與ヲナス結果トナル、之レニ反シテ永ク免

租セル土地ニ或カニ新租ヲ定フルルハ土地ノ賣買価格ヲ下落セシメソレ大
 ナ損益ヲ受ケル結果トナリ殊ニ一郡ノ土地ニ租スル場合ニ起ルナリ、殊
 ニ一郡ノ地租ノ取リ上クレトニ帶スルモ或ル一部ノ人ノミニ賦税ヲ取
 收スレトフ旨トセス、故ニ租税政策ハ租税増徴ノ結果ヲ考ヘテ公平ナル
 方法ヲナスニツトメサルヘカラス、

第四節 租税ノ限度

租税ヲ國民納税ノ原則ヨリ見レハ個人ノ生活及ヒ國民生活ノ發達ヲ妨ク可
 ナラス、然レニ租税ノ財政政策則ヨリ見レハ租税ハ充分ナラサル可カラ
 ス、又租税ノ膨脹ニ伴ヒ伸長シテモノラサレ可カラズ、斯クストモ時ハ
 租税ハ如何ニ定クスルモノナリ、租税ハ如何ニ定クストモ個人ノ生活及ヒ國民
 生活ノ發達ヲ妨ケサルヤ、租税ニハ限度アリヤノ問題生ス、此ノ問題ニ就
 イテハ昔ヨリ種々ノ説あり、或ハ租税ハ如何ニ定クスルモ充分ニ支障ナ
 シトスルモノナリ此ノ説ヲ主張スル者ニハ自由ニ定テリ、吾人ハソノ一ツ

テ増徴税ト他ノ一ツヲ貨幣価値税トセリ

増徴税ハ既ニ査問主税ノ場合ニ前者ヲ取リトイフマシマンノ如キハ國民
積ムルニ因テ利益ヲ得ルハ一國ハ食ルコトナントシテ或者ハ國費ノ増加ス
ルト共ニ國家ノ勤勉ヲ増スト説キ英國ノマカロフニ陸。此ノ説最モ進メリ
曰ク這稅ヲ徵スルハ其ノ納稅者ハ其ノ稅額ヲ他ニ於テ補フコトナシ勤勉
賃働者トナリ納メタル以上ノ生産トナル、恰モ家族ノ増収セルグメ之レヲ
或フルタメニ大イニ労働スバ當ラ増ス、畢竟重稅ハ生産ヲ増加シ現今ノ
富ヲ増スニ至ル、若シ英國オ米國ノ鐵工職中及茶破翁ト取フナカヨシニ
ハ租稅ノ重キモノナク工業ニ奮勵スルナカリシナント例証ヲトリ、十
ハ去死スハ十九世紀ノ始メニ於ケル英國ノ富ノ結果ヲ重稅ニ歸ス、コレハ
學者ノ意見ニスキサルカ故ニ至リ此ノ説ヲ極ニトリ重稅ヲ課スルニ至レリ、
之レハハ從前而革命後之政府ニ見ル所ナリ、此ノ説ハ一悉尤モラエテ國
ルモ保シ此ノ説ヲ真理ナリトセハ國富ヲ増スニトハ感爲ナルコトニシテ否
亦政策ハ重稅ヲ課スレハ是レト云フコト、ナル、餘ニ同類ハ斯ク簡單ニア
ラス、英國ハ勿論外國ト同ト雖ヒ重稅ヲ課レツ、アル間ニ多イニ富ヲ増加

シタルコトアリ、假シ英國カ斯クスルコトヲ得タルハ果ハ當此英國ニ所云
インダストリアル、レホリニシヨシ起リ労働ノ效果大トナリ、故或ノ不明ニ
ヨリ英國ノ生産カハ大イニ進ミ居タリシニ依ルモノトスフ可ク富ノ増加ハ
至ル上ノ進歩ノ結果一レヲ租稅ノ趣ニアラス、サレハ重稅ヲ取フタメ一國
カ富ハニ至ルハ必スレニ真理ナリト云フヲ得ス、假シ重稅ニ堪エ得レハ
富メル國ナリト云フモ不可ナン、是レニ重稅カ國富増加ノ源トナルト云フ
コトヲ打破セハ其產ヲ盡ニシ國富ヲ増加スル事ハ到底斯レ得サレト、ナ
リ重稅ハ却テ國家ヲ衰ヘシムルコト、云ハサル可カラズ、故ニ稅ハ愈々商
フニテ愈々可ナリト云フヲ得ス、

貨幣価値税ノ大要ハ、如シ、國家カ租稅トシテ生産スルモノハヤカナ國
家ノ費上出ニスル式ヲ余トナリ、官民ノ都合トナリ、公債ノ利息トナリ
テ一度民間ニ繳納ス、故ニ重稅ヲ課スルモ國費至ル上ニハ何等ノ害也ヲ求
サス、或ニ進歩セハ租稅ニヨリテ得タルモノニテ國家カ企業ヲ起ストモ
ハ次第者モ或ヲ得ルニ至リ、労働者階級ヲ利益スルニト、ナル、吾人カ見
ル所ヨリスレハ此ノ説ハ誤レリ、第一ハ國富ハ重稅ノタメニ失ハレト説

ク即凡テノ租税ハ貨幣ノ税ニテ其ハハル、モノナルカ其ノ貨幣ハ國家ニ取
 リ上ケラレ、トモ統テハ國家ノ支配スル所トナルカ故ニ國民全者中ニ現存
 ンテ矢ハレサルモノト、ナル、畢竟貨幣ノ循環スル下ラ履クモノナルカ故
 カク紅紙ケタリ一故ニ此ノ税ハ國富ヲ貨幣ヨリナルト考フルモノナリ、國
 富ハ貨幣ヨリ成ルトノ思想ハ重商主義ノ流ナリ、商富主義ノ流レルトハ
 アタムスミ又以未滿至清等者ノ説ケルヲ以テ多論セヌ、此ノ思想ハ根本思
 想ニ於テ誤レル故論法ノ誤レル又自然ノ弊ナリ、我論法ノ方面ヨリ考フル
 モノ皆皆正得ヘカラザレモノ多シ、蓋シ此ノ説ニ依リテハ國家ハ其ノ目的
 合トスルモノヨリ成ルニ非ズ、國民全者ヲ養スルニトナレト云ハ
 サレ可カラヌ、然レニカ、ル養費ハ少シク國民ヲ養スルニトナレ、若シ
 考ニ實ニ資金ヲ租税トシテ生收セラレズ人ノ手ニ存ストモハ私人ハ之レ
 テ抽出企業ニ收メテ國民全者ノ繁榮ヲ助ケシナラン、然ラハ如何ニ云
 徴スルモ國民全者上何事変化ヲ求メサストノ結論ハ誤レリト云ハサル可
 ナス、又ノ説ニ依リテハ貨幣全者時代ニ於ケル租税ハ國富ヲ生スルモノト、
 ナレトモ自然主義者時代ノ租税ハ國富ヲ養フモノト云ハサル可カラヌ、蓋シ自然

主義時代ニ於テ國家ハ租税トシテ實効ヲ徴收シ而シテ之レヲ消費ス、其ノ實
 物ハ公スレモ悉ク人民ニ復歸スルモノト云フヲ得ヌ、
 事ニク租税ノ全者上ノ作用カカク養スレハ解シ難キニトナリ、最ニ此説
 ハ重税ヲ起スルニ因リカシレニヨリテ重税ヲ企ツルトキハ失業労働者ニ或ラ
 亦フルト説ク、然レニ之レハ只々労働者ノ需要ノ方面ヲ養ヘタルニヌキハ
 労働者階級ヲ利益スルトハ云ヒ得サルナリ、蓋シ國家ノ生收セル重税亦何
 人ノ手ニ解シタリトモハ私人ハ之レヲ以テ労働者ニ支給ノ資金ニ出ラレ
 トヲ得タルガ故ナリ、尚ホ一歩進メハ重税ハ労働者全者ヨリ得テ却テ抑
 ナルニトナシニアラス、殊ニ國家カソノ重税生收金ヲ不生産的產業ニ用
 レル場合ニ於テ然リ而シテ國家カ不生産的產業ニ投スルト將來労働ノ自由ヲ
 起スニトテ失フモ其ノ重税ヲ生收セヌ、之レヲ以テ人ノ生産的企業ニ用ヒシ
 ヲハ將來労働ノ需要ヲ養ハスルニトアル可ナレハナリ、亦斯レハ重税ハ
 労働者階級ヲ利益スルニ云フヲ得ヌ、
 以上ノ諸説ハ租税ノ限度ヲ認メサルニ歸スルカ近來労働者ハ皆租税ニ取
 度アルヲ認ムルニ至レリ、租税ノ限度ヲ認ムルニ於テ最モ有名ナルハロ

レンスダイインノ説ナリ曰ク国家ノ行動カ再生産カヲ有セル國ハソレカタメ
 要スル至費ヲ支持スル租税ハ其ノニ過クルニトナシ、何トナレハ其ノ租税
 ハ他日生産トナリ再ヒ理ハレ少シモ損失ヲ致スト是概スニトテサレハナ
 リ、然ルニ国家行動ノ備佐カ出費セル租税ノ額ニ及ハサルトキハ其ノ巨額
 ハ少シモ永ハ一増減スリニト、ナル故ニ租税ハ再生産ノ程度ヲ超ニレ可マ
 ラス、此ノスダイインノ説ノ當否ヲ判断セントセハ先ツ再生産税ソレ自身ヲ
 吟味セサル可カラス、再生産税ニ付テハ財政各論ニ述ハタル所ナレハ再
 言セズ、以一言ス可ナハ租税カ再生産ノ程度ヲ超ニルカ否カラ判断スル概
 算ヲ見出スニトノ困難ナルニトナリ、實際ニ於テハ此ノ説一ヨリ租税ノ限
 度ヲ求ムルニト困難ナリト云ハサル可カラス、惟フニ租税ノ程度ヲ定ムン
 トセハ租税ノ問題ニ入ラサル可カラス、蓋シ租税ノ程度ニハ之レヲ生産ス
 ルニト能ハハ、租税ハ收込セルカ如ク原則トシテ所得タレ可キナリ、故ニ
 租税ノ程度ハ所得ノ範囲内ナラサル可カラス、勿論ニノ例外ノ場合ニ財産
 ノ賦課トスル事ヲ得ルニ致シテ租税ノ範囲内ニ入ルトキハ少クモ生産ヲ超ヘレ
 ヌ租税公許上ノ界限ヲ越スル所ナリ、故ニ租税ノ原則トシテ所得ノ範囲

ナルトハ事ヲ可カラサルヲナルカ然ラハ如何ナシ程度ニマテ所得ヲ奪ヒ得
 ルカノ問題生ズ、若シ租税ノ全部ヲ奪ヒ得ルモノトセハ人民ハ欲ヘサル可
 カラサルニ至ル長ニ租税ハ少クトモトハ民ノ生活ノ最小限ノ範圍ニ入ル可
 カラサルナリ、此ノ原則ハ改革ニ論スレハ此ニハ論議セズ、斯クスル中
 ハ租税ハ個人所得ヨリ最小生活程度ヲ超ク奪ヒ取ルカト云フニ理論トシテ
 ハ之レヲ奪ヒ得ルト云ヒ行ラレサルニアラス、余信斯クノ如クハ一國々民
 各亦ノ分遣ヲ差シ得サル程度ニテリト云フヲ得ヌ、故ニ余テ租税ノ程度ハ
 租税ノ至者上ノ影響ニ就テ判断セサル可カラサルニ至ル、今租税ノ至者上
 ニ及木ノ影響ヲ考フルニ租税ハ所得ノ中ヨリ文取ハル、モノナルカ其ノ所
 得ヨリ資本トナルニ至ルモノニモ課スルニト、ナレハ資本ノ集積ヲ妨クル
 コト、ナル之レハ租税ノ至者上ノ影響トシテ免レサルニトナリ、然ルニ租
 税カ次第ニ至クナレハ其ノ資本集積ヲ防クルニトハ愈々大トナリ、ソレ甚
 タレキニ至レハ資本ハ逐々外國ニ移式セラル、カ故ニ生産交換力衰減ス
 ルニ至ル、此方一ハ所得減スルカタメニ消費ニ衰減フ、カクテア國内ノ
 増加ヲ養アルニ至ル、如斯ニ異ヲ生セル中ハ租税カソノ程度ヲ超ヘタルニ

トト云ハサル可カラズ、

次ニ所得者又ハ下級社会ニ於テ見ルトハソノ衣食住及娯楽ニ要クナリ食
 料ノ増徴ハ人口増徴ノ率減スルニ至ラハ租税ノ大体ニ於テ重クナリ夫レ
 リト云ハサル可カラズ、之レハ一般ノ例ニ就テハソノ証ナルカバ、例ニ
 就テ影響ヲ見ルニ第一ニ消費税ニ付テハソノ税率ヲ高クセルニ相
 ラズ税率ノ低カリシ時ヨリ却テ收入ヲ減スルニトアリ、何トナレハ消費税
 ノ重クオタメニ各人オ消費ヲ減スルニ至ルカタメナリ、之レハ消費税ノ限
 度ヲ超ヘタル増徴ノ一例也、又一収益税ニ就テハ思レハ所得者ノ所得額
 ニアラズ余ノ收入ヲ得ラレサルニ至リ尚進シテハ收入全体ノ額ノ減少ヲ来ス
 ニ至ルカハ租税ノ程度ヲ超ヘタルモノトスハサル可カラズ、以上ハ租税
 ノ課セタル額ニ於テ租税ノ程度ヲ判断セルモノナルカバ、尚進シテハ租
 税ノ課セタル額ノ所得ノ比例ニ於テ判断セントスルモノアリ、エステイハ既
 ニ十八ノ頃ニ論テ曰ク、租税ノ所得ノ三全ノ一ヲ超ヘタルハ苛酷ナル例ナ
 リ曰ク、一ニ止リタルトキハ高キ租税ナリ、又全ノ一ヲスキサルトキハ

民ヲサレヲ云フ、若シ此ノ種ノ不足ヲ生スル場合ニハ經常費ヲ支弁スルニ
 臨時収入ヲ以テセサル可カラサルニ至ル、斯クスルハ前述ノ根本原則ニ
 反スルコト、ナル、而テ其ノ財政タルヤ不健康ナルモノトナルヘシ、如斯
 不足ハ予算決算上ノ数学上ノ不足ニアラスシテ財政計劃ノ欠陥ヨリ生スル
 不足ナリ、

依リテ学者ハ之レヲ以テ真正ノ不足ト云フ、財政ノ良否ハ實ハコノ不足
 ノ有無ニテ断ス可キナリ

臨時不足トハ至極費ヲ超過スル至極收入ヲ以テ臨時費ヲ支弁スルニ足ラ
 カルヲ云フ、此ノ斯キ不足ハ國家經濟的臨時費ニ於テ起ルコトアリ、又ハ
 非經濟的臨時費ニ於テ起ルコトアリ、此ノ不足起ルトキハ事實上公債ニヨ
 リテ支弁セラレサル可カラズ、然レニ此種場合ニハ前述ノ如ク外資遊資ヲ
 吸収スル場合ノ外ニ租税ニヨルヲ學理上穩当トスル故、此ノ不足ハ又財政ノ
 良否ヲ判断スル一材料トスルコトヲ俾ルナリ、此ノ不經濟的臨時費ノ公債
 ニ依リテ支弁スルモノアルトキハ之レモ一種ノ不足ナルニ此場合ハ財政ノ
 不健康ト云フ諸論ヲ下ス誤ケニ至ラサルナリ、

叙上ノ實情上ノ不足ハ財政ヲ批評スル上ニ於テ尤モ重要ナルモノナレカ
併シ之レヲ正確ニ計算スルコトハ甚ダ以テ容易ナラス、普通ノ公私ノ統計
ニ表ハル、スノハ左ノ學向上ノ區別ニ依テ依ラレサレヲ以テ賦産ノ真相ヲ
明カニスルニハ之等ノ統計ニ常ニ依ルト云フ訣ニ行カス依テ財政ノ批評家
ハ各場合ニ於テ手算上ノ数字ヲ加減シテ計上セザルベカラズ

第五章 租税ノ社会的原則

租税ノ社会的原則トハ租税ノ分配ニ于ケル原則ナリ、租税ノ分配ト云フ
ハ悉説カ各人向各階級間ニ分配セラル、コトヲ云フ此、租税ノ分配ハ正義
ニ叶ハサル可カラズ 故ニ學者之ニテ正義ノ原則又ハ道義ノ原則ト云フ、
正義ノ何タルカハ哲學又ハ倫理学ニ屬スル故ニ詳言セス 併シ現今ノ文明
ニ於テ租税カ正義ニ叶フト云フハ、租税カ各人各階級ニ分配セラレテ宜シ
キヲ得ル様ナルモノナラサル可カラズ 租税ノ分配宜シキヲ得ハ依令ノ
絶対額ハ大ナルモ民ニ不平ノ声ナク國家立法ハソレヲ以テ安國トナル、之
レニ及シ租税ノ分配宜シキヲ得サレハ依令其額少クトモ國民ハ平ナルコト
能ハス、遂ニ國家ノ優トナル 故ニ租税ヲ正義ニ叶ハシメ、トセハ先ツ租
税ヲシテ各人各階級ニ行キ亘ラシメサル可カラズ、次に各人各階級ノ間ニ
ハ、夏租ヲ平等ニ保ソ様ニセサル可カラズ、コ、ニ於テ普通ノ原則ヲ生シ
又所得平等ノ原則ヲ生ス、以下此ニ原則ニ依キテ説明セン、

第一節 普遍原則

第一款 意味

普遍、原則トハ個人主義主体カ何人ナルモ階級ノ何タルモ凡テ国民ハ租税ノ負担ニ任セサル可カラズト云フニアリ、凡テノ国民カ租税ノ負担ニ任セサル可カラズト云フハ租税ノ主体ニ漏レアル可カラズルヲ意味ス、故ニ此ノ原則ノ帰着ニル所ハ租税ニ就テハ特権階級ヲ認メズト云フコトニ帰着ス、租税ハ個人主義ノ主体ニ課シ其ノ税源ニ負担セシムルハ既述セリ、然ルニ税源タル所得ハ正確ニ算シ易カラサル故租税ノ客体ヨリ階級ニ之レヲ奪ハサル可カラズ故ニ於テ各人租税ヲ負担ス可シトノ原則ハ推シ及木サレ、ナリ、此ノ原則ハ今ノ法治国即チ立憲国ノ觀念ニヨク叶ヘリ、今日ノ文明国ニ於テハ各人ハ法ノ定ムル処ニヨリテ同一ノ権利ヲ有セリ、同一ノ権利ヲ有スルモノナレハ又同一ノ義務ヲ負ハサル可カラズ、租税ニ于テハ義務モ亦同様ニ論セサル可カラズ、斯ク論スルトキハ普遍ノ原則ノ自然ノ

原理ノ如キモ丁度上ニハ非常ニ大ナル意味ヲ有ス、蓋シ封建時代ニ於テハ武士ハ租税ヲ負担セズ、貴族君主時代ニハ貴族ハ租税ヲ負担セズ、昔ハ免税ノ特権階級ヲ認メタリ、然ルニ其ノ當時、社会組織具ノモノカ不平等ノ觀念ニ立テタル故ニ貴族ノ特権階級存セトモ正義ニ交セリト云フヲ得ス、然ルニ仏蘭西革命以來凡テノ特権階級打破スルニ至リ現今ノ立憲政治時代ニハ市民ノ平等ヲ認メタリ故ニ租税ニ於テ免税ノ特権階級ヲ認メ其ノ階級ノミヲ利益スルカ如キコトハ到底正義ニ叶ヘリト云フヲ得ス、故ニ租税ハ普遍ナラサルヘカラスト云フカ動カス可カラサル原則トナレリ

第二款 普遍原則ノ適用

普遍原則ハ前述ノ如ク租税主体ヲ覆フテモラサス、租税客体ヲ包ミテ又セラサス、租税主体ヲ覆フテ覆ラサルカ故ニ第一ニ自然人ヲ遮及シ法人ヲ遮ツテ遮セズ、先ツ内国人ヲ遮及ス外人ヲ遮スルコトナシ、以下少シク之等ノモノ、場合ヲ研究セン

第一、自然人、自然人、中ニハ内国人アリ、外国人アリ、内国人ハ或ハ内
国ニ在アルモノアリ、外国ニ在セルモノアリ、内国ニ在セル者ニ租税ヲ課
スルハ明カナルコトナリ、然ルニ外国ニ在セル内国人ニハ之レヲ追及スル
ヲ得ルヤ否ヤ、殊ニ内国人カ本国ニ財産ヲ有シ又ハ本国ヨリ種々ノ形ニ於
テ所得ヲ得ル場合ニ於テ然リ、普遍ノ原則ハハヲ追及シテ物ニ及フ、故ニ
カ、ル場合ニハ課税物トシ、我國ニ在セル限り之レヲ課税ノ義務ヲ負ハシム
ヘキナリ、其内国人カ外国ニ在セル限り之レヲ課税ノ義務ヲ負ハシムヘキナ
リ、又内国人カ外国ニ在セル財産又ハ所得ニ對シテハ之レヲ追及スル
コトナシ、外国人ハ元素自國ニアラサルカ故ニ國民タルヲ以テ納税ノ義務
アリトシテ之レニノソム可カラス、然ルニ國際、交通自由トナレ今日ニ
於テハ多数ノ外国人來リテ内地ニ財産ヲ有シ營業ヲナシ或ハ外國ニ在セル
ニ尚ホ亦國ニ財産ヲ有シ營業所ヲ有シ盛シニ利益ヲ收ムルモノアリ
ソレ等ニ對シテ課税スルコトヲ得ストセハ國家ノ課税權ハ傷ケラレ完全ニ
アラズ租税收入額大カラズ内地ノ土地資本カ外人ノ所有權、移ルニ至リ此
ノ心配益々以トナル、此ノ理ニ於テ外國ハ一課税セサル可カラサルナリ、

如シ國際交通國トナルニ又ニ國際私法ノ觀念違ニ外国人モ内国人ト同一ノ
權利ヲ享有スルカ故ニ租税ニ對シテモ内国人ト同一ニ取扱フヤノ論ヲ立テ
ラレルニ至ル、然ラハ如何ナル程度如何ナル範圍ニ於テ外国人ニ課税ス可
キカ理論ニ依リ云ハハ内国ニ在セル租税客體ヲ補フヘキモノニシテ外國ニ
存在セル租税客體ニ及フ可カラス、即チ外國ハ内国ニ土地資本財産等ヲ
有スルトキハ之レニ利益税即チ財産税ヲ課スルコトヲ得、外國人カ内地ニ
テ營業セルトキハ之レニ營業税ヲ課スルコトヲ得、所得税ノ所得額ニ課税
スルコトヲ得、又相続税ニ就テ云ハ、相続財産カ内地ニ在セル範圍ニ於テ
ハ之レヲ課スルコトヲ得ト云ハサル可カラス、消費税、交通税ニ于シテハ
外國人ハ内国人ト異ル所ナシ、苟クモ消費税ニシテ乗客セル以上ハ外國人
トモ消費税ヲ買ヒ取ルコトニヨリ、租税ヲ負担スルカ故ナリ、交通税モ
外國人カ内地ニ於テ取引ヲナス以上ハ之レヲ負担ハサル可カラス、外國ニ
於テモ利益税ハ内国ニ在留セル者ニ對シ其ノ財源又ハ所得ノ源カ我國ニ在
スルモノニ就テ之レヲ課ス、要スルニ外國人トモ免稅特權ヲ得ルコトナ
シ

法人ノ租税義務ニ于テハ公法人ト自然入トニ分テテ論セサル可カラス
私法人ハ公益法人ノ營利法人トニ分テテ論セサル可カラス

營利法人ハ多ク財産ヲ有シ又所得ヲ得レモノナリ、從ツテ租税ノカ充
分ナリ、故ニ之レニ税スルコト自然入ニ税スルヨリ寛大ナル理由ナシ、
故ニ營利法人ニハ原則トシテ自然入ト同様ニ課税セサル可カラス、只茲
清政策上特別ノ理由ニヨリ營利法人ヲ登進セシムル理由アル片ニ所得税
營業税ヲ免スルコトアルノミナリ、營利法人ノ課税ニ付キ時ニ論スヘキ
コトハ法人其ノモノニ課税スルト社負株主ニ課税スルトノ關係ナリ、此
ノ事ハ所得税ニ於テ最モ大ナル意義ヲ有ス、思フニ会社其ノ他私法人ノ
純益ト社負又ハ株主ノ受ケル配当金ノ總額トハ常ニ必スシモ同シカラス
此ノ場合ニ於テ法人ノ純益ハ一部分ヲ以テ配当金ニ當テ其ノ他ノ一部ヲ
以テ準備金ニ當テ又ハ其ノ事業ノ擴張ニ當ツルモノナリ、故ニ法人其ノ
モノニ課税スルトキハ全体ノ純益ニ見テ課スルコトヲ得、且ツ会社ノ純
益ノ額力大ナレハ大ナル租税力カ大トナルカ故ニ後ニ述フルカ如ク累
進税率ヲ課スルコト容易ナリ、又会社ハ檢査計算ヲ公ニセサル可カラサ

ルカ故ニ之ノ純益ノ多寡ヲ隱スコトヲ得ス、又会社等ニ課スルトキハ概
税ノ手續簡單トナル、ソレハ社算又ハ株主ノ受ケタル配当金ニ課税スル
ト同一ノ該ニアラス、依テ法人ニ課税シ株主社負ニハ課税セスト云フコ
トハ一ツノ理由アルカ如キ感アリ、我國ノ所得税法モ法人ノミニニ課シテ
会社社負株主ニ課セス、其ノ理由トスル所ハ会社等ノ法人ノ純益ニ課ス
ル片ハ同様ニ社負又ハ株主ニ課スルコト、ナルト、併シ延イテ秀フルニ
之レハ當ヲ得タルモノニアラス、蓋シ会社其ノ他ノ法人ハ法人ノモノ
ニ課セラル、税ヲハ一ツノ營業費ト見做セリ、故ニ株主並ニハ社負ハ事
實上少シモ税セラレサル結果トナル、依リニ一歩ヲ譲リ株主社負ニ租税
ノ負擔及フトスルモ法人ヲ税シ株主社負ヲハ少シモ税セサレハ段々可ギ
配当額ノ大小ニ拘ハラス之レヲ一様ニ課シテ其ノ間ノ差別ナギコト、ナ
ル、所得ノ大ナルモノニ重ク課税スルトノ原則ハ実行シ得サルコト、ナ
ル故ニ社算又ハ株主ニ課セサルトノ立法ハ非難ヲ免レス、然ラハ及社ニ
社負株主ノミヲ税シテ法人ヲ税セサルコトヲ可トスルヤト云フニ尚ホ同
様ニ惡シト云フ可シ、何トナレハ会社等ノ法人モ尚ホ一ツノ権利主体ニ

ニシテ自然人ト同様ニ営利ヲナセルモノナリ、從テ租税ノ義務ヲ負ハサ
ル可カラサルモノナレハナリ、若シ法人ニ稅セサレハ普通ノ原則ニ及ス
如斯論スレハ營利法人ニハ勿論稅セサル可カラサルト同時ニ社員、株主
ニモ稅セサル可カラス、法人ニ稅シ社員スハ株主ニ稅スルニ至レハ其ノ
配当金額ニ付テノミ課スレハ二重ニ課稅スル悞レナキニアラス、故ニ同
法ニ同一ノ稅ヲ課スル場合ニハ多少加減シテ一定ノ額ヲ除キテソノ残り
ノモノノミニ稅スルトスルヲ公平ト思惟ス、公益法人モ原則トシテ自然
人ト同様ニ租稅ヲ負擔セサル可カラス、只課稅スルタメニ公益法人ノ目
的ヲ遂クルコト困難トナル場合ハ之レヲ免除スルコトアリ、財団法人ニ
付テ向題トナルハ相続稅、贈與稅ナリ、蓋シ一且財団法人ノ有ニ歸スル
財産ハ相続贈與等ニツキ移轉スルコトナキカ故ニ相続稅、贈與稅ヲ課ス
ル機會ヲ失フカ故ニ財団法人ニ關シテハ之等ノ稅ニ換フルニ持殊ノ財団
法人ヲ以テスル必要起ル、財団法人ノ財産ト云フモ最も向題トナルハ不
動産ナリ、何トナレハ不動産ニ對シ年々ノ租稅ニ對シ多少ノ課稅ヲカク
ルヤ若シクハ二十年乃至三十年ヲ終テ一ペリヲリシエレノ租稅ヲ課スル

三七四

二、公法人

レ否ヤナリ、諸國ノ立法ハ此ノ宗ニツキ進歩セル如シ

國家公共団体等ノ公法人ハ原則トシテ其ノ收入ニ對シ租稅ヲ課セラル
コトナシ、之レハ之等公法人ノ主体ハ課稅ノ主体ナル故ナリ、然ル
ニ下級ノ公共団体カ財産ヲ有シ又ハ企業ヲナシ營利收入ヲ得ル場合ハ國
家ハ之レニ對シ收益稅ヲ課スルコトヲ得ルト同様ニ國家カ下級ノ公共団
体ノ區域ニ財産ヲ有シ若クハ企業ヲ營タル場合ハ下級公共団体カ之レニ
對シ收益稅ヲ課スルコトヲ得、我國ニ於テモ下級公共団体ノ所有地ニシ
テ公用ニ供セラル、モノハ租稅ヲ免セラル、コト、ナレリ、故ニ公用ニ
供セラレサル公共団体ノ土地等ハ租稅ヲ負擔スルコトトナル

三、普遍原則ノ例外

普遍原則ハ凡テ、租稅容許主体ヲ追及シ余スコトナキヲ主旨トセリ、
然シ尚ホ之レニ多少ノ例外ヲ認メサル可カラス、先ツ租稅主体ニ付イテ
ハ昔ノ如ク広汎ナル範圍ニ於テ免除ヲ認メ得サルハ論ヲ俟タス、今日ノ
文明ニ於テハ天子及ヒソノ一族及ヒ各國使臣ニ對シテハ租稅ヲ課セス、

三七五

三七六
之レハ元首又ハ代表者ニ対スル敬意ト見ルノ外ナシ、三等ノ人ハ只ニ直
接税ヲ免セラル、ノミナラス間税ノ如キモ亦免除セラル、ヲ例トス、乍
併内地消費税ハ三等ノ人トモ免租ヲ免ル、コトヲ得ス

第二節 平等ノ原則

第一款 平等ノ原則ノ意味

課税ハ一般人民ヲ追及シテ漏スコトナキハ前述ノ如シ、然ルニ課税
ハ一般人民ヲ追及スルト同時ニ一般相互ニ負担ノ宜シキヲ得ルヤウニサ
サル可カラズ、或若ニ重ク或若ニ軽クス可カラズ、租税ハ一般人民カ均等
ニ負担ス可キモノナリ、故ニ平等ノ原則起ル、一般人民カ均等ニ租税ヲ負
担セサル可カラサルコトハ、一般人民ノ負担スル租税額カ同一額ナリト云
フニアラス、若シ租税ヲ負担スル額カ純粋的ニ同一額ナリトセハ富者ハ負
担ヲ感スルコト輕ク貧者ハ重キニス、故ニ平等ノ原則ハ不平等ノ負担ニ

三七七
終ル、之レハ今日ニ於テ正義ノ觀念ノ許サ、ル所ナリ、平等ノ原則ハ負担
ヲ感スル度合ニ於テ均等ナラサル可カラサルニ至ル、故ニ負担ノ均等トナ
ル然リ、而シテ負担ハ各個人ノ至濟上ノ負担ニ於テ大イニ感スルコト異ナ
ナル富者ハ多額ノ負担ヲナスモ之レニ對シテ痛ヲ感スルコト割合ニツク、
貧者ハ小額ノ租税ヲ負フモ尚ホ若痛ヲ感スルコト大ナリ、故ニ富者ニ多ク
貧者ニ少ク課スルハ負担均等ノ要件ナラサル可カラズ、然ラハ平等ノ原則
ハ個人至濟ノ給付能力ニ応シテ課税ス可キコトヲ要求ス可キモノナリ、昔
ハハ之レヲ稱シテ庶分租税ノ原則ト云ハントス、日本ノ學者カ或ハ給付能
力ノ原則提議能力恣分提議能力或ハ租税能力ノ原則ト云フハ即チ之レナリ
現今ノ文明國ニ於テ租税ノ平等原則ハ庶分租税ナラサル可カラズ、主
併庶分租税ハ財政ノ理論ヨリ云ハハ皆ヨリ必スシモ一般ニ認メラレタルモ
ニアラス、昔ニ於テ租税ハ個人並ニ個人至濟カ國家ヨリ受ケル利益ニ對
スル代償ナリト考ヘタルカ故ニ租税平等ノ原則ハ各人ノ受ケル利益ニ應シ
租税ヲ負担ス可キモノトシテ辭セラレタリ、所謂保險說トシテ知ラル、モ
ナリ、

「アダムスミス」カ平等ノ原則ヲ唱ヘタルカ租税ハ國民カ國家ヨリ保護ヲ受ケル財產所得ニ平等ナラサレ可カラスト云ヘリ、之レハ尚ホ交換説、保險説ノ思想上ニ乘カレタリ、交換説、保險説ノ誤レルコトハ既ニ財政學説論ニ述ヘタルハ再言セス只茲ニ述ヘントスルハ交換説、保險説ニ從ヘハ租税ハ國家ノ行動ニ對スル次利給付ナルカ故ニ租税平等ノ原則ハ次利給付ノ原則ナラサル可カラスト云フニ至ル、乍併天利給付ノ原則ハ現今ノ財政組織ニテハ手帳簿等所謂行政收入等ニ於テ適用セラル、モノタルニ過キズ租税ニ於テル原則ト見ル可キモノニアラス、學者或ハ租税平等原則中ニ及利給付原則ト處分租税原則ノ二者アルヲ説ケトモ吾人ハ斷シテ其ノ當ラ得タルモノニアラサルヲ信ス、故ニ租税平等ノ原則ハ處分租税ノ原則トナルナリ、

第二款、處分租税ノ原則並ニ其方法

前項ニテ租税平等ノ原則ハ處分租税ナラサル可カラサルヲ説ケリ、處分

租税ニ對キテハ尚ホ少シノ説明ヲナス要アリ、租税ハ各人其ノ分ニ應ジ負担セサル可カラサル可シ、國家公共團體カ行政（強制）共同至濟ナル性質並ニ之レヲ組織セル一分子ノ地位ヨリ容易ニ之レヲ説明スルヲ得、前述セル如ク個人ハ強制共同至濟ノ一組織分トシテ其ノ強制共同至濟ノ維持營運ヲ助ケ之レカタメニ要スル資料ヲ供給セサル可カラズ、之レ即チ租税ナリ、故ニ租税ハ個人ノ義務ナリ

個人ノ義務タル以上ハ個人カ國家公共團體ヨリ受ケル利益ニ對スル特別ノ報償ト見ル可キモノニアラス、等口一ツノ犧牲ト見ル可キナリ、故ニ所云犧牲説生ス、如斯租税ノ義務ナルト同時ニ個人ノ犧牲ナリトセハ租税ハ個人ノ至濟的能力ニ應ジ之レヲ課スヘキナリ

斯ノシテ個人ハ始メテ共同ノ目的ニ對シテ各人同一様ノ子係ニ於テ犧牲ヲナスコト、ナル租税ハ至濟能力ニ應ジ之レヲ負担ス可シト云フハ即チ處分租税ノ原則ヲ説明スルニ外ナラス、如斯處分租税ト云フコトハ各個人カ至濟的給付能力ニ應ジ租税ヲ負担スルノ意味ナリ、至濟的給付能力大ナルモノハ租税負担能力大トナルヘク至濟的給付能力小ナルモノハ租税負担能力

ハナルハキナリ、故ニ逐分租税トハ租税カニ逐シテ課税スルニトナリ
 茲ニ逐税カト云フハ租税ノ負担ヲ得ルカナリ、公濟的總體能力ヲ租税ニ
 干渉シテ見タルモノニ過キス、斯ク論シ来レハ如何ニセハ租税カニ逐スル
 課税ヲナスヲ得ルヤノ尙題ヲ生ス、租税ハ種々ノ形ニ於テ税スルモ要ハ其
 ノ税ヲ奪ヒテ之ニヨリ支払ハシムルコト、ナル故ニ税源ハ租税カヲ表現セ
 ルモノナリト云フヲ得、税源ト云フハ原則トシテ所得ナリ、只例外ノ場合
 ニ財產ナリ、又臨時收入アル場合ハ之レヲモ税源ト見ルコトヲ得、故ニ個
 人ノ所得財產隨時收入ノ如キハ皆個人ノ租税カヲ示セルモノナリト云フヲ
 得、俾普通ノ場合ニ於テハ税源ハ所得ナルカ故ニ租税カノ大小ヲ測フルニハ
 先ツ所得ニ於テ之レヲ爲サ、ル可カラス、故ニ所得ニ付キ租税カヲ研察セ
 ン

先ツ租税カノ大小ハ個人所得ノ大小ニヨリ、個人所得ノ多キモノハ租税
 カ大ニシテ少キモノハ租税カ小ナリ、乍倅個人所得ノ額ハ全一ナルモ所得
 ノ依テ来ル所ノ源ノ異ルニヨリ租税カニ差等ヲ生ス例ハハ財產ヨリ出テ来
 レル所得ハ勤勞ヨリ出テタル所得ヨリモ租税カ大ナリ、故ニ租税カハ第一

ニハ所得ノ量ニヨリ第一ニハ所得ノ質ニヨリ異ナレリト云フ可キナリ、所
 得ノ構成分子ヲ云フ所得ノ量質共ニ合シクトモ所得者カ其ノ之レヲ使用ス
 ル目的如何ニヨリ租税カニ差ヲ生ス、所得使用ノ目的ハ個人ニヨリ異ナル
 然ルハ實際租税カヲ計ラントセハ所得ノ量、質並ニ使用ノ目的ニヨリサ
 ル可カラス、所得ノ量ヨリ云ヘハ大所得者ハ大ナル租税カヲ有ス、茲ニ於
 テ收益課税勤勞課税論起ル第三ニ所得使用ノ目的ヨリ云ヘハ多クノ家族ヲ
 有シ多クノ生活必要費ヲ要スルモノハ然ラサルモノヨリ租税ハ所得ナル税
 源ニ負担セシムルヲ旨トセルカ故ニ合一ノ所得ニ付シ合一種類ノ租税ヲニ
 置ニ課スルハ負担ヲ公平ニスルモノニアラス、故ニ逐税回避論起ル以ヒ
 ハ主トシテ所得ニ付キ逐分租税ノ方法ニ述ヘタルカ隨時收入モ之レヲ存ス
 ル場合ハ税源トナサ、ルハカラス隨時收入中最モ所要ナルハ所云偶然利得ナ
 リ、偶然利得ナルモノハ社会ノ進歩スルニ從ヒ次第ニ増加スル如シ、而シ
 テ此ノ偶然利得ヲ得ルモノハ大ナル租税カヲ有スルモノト云フ可シ、此効
 偶然利得重課論起ル、吾人ハ前述ノ種々ノ租税ニ就イテ詳論セントス、

第三款 累進税

累進税ト云フハ税源若クハ課税物件ノ数量價格ノ大ナルニ從ヒテ次第ニ
高キ税率ヲ以テ課税スルコトヲ云フモノナリ、其ノ税率ヲ累進税率ト云フ
累進税ノ意義ヲ明カニスルニハ之レヲ比例税ト対照スル必要アリ、比例税
ト云フハ税源若クハ課税物件ノ大小多少ニ拘ハラズ同一税率ヲ以テ之レニ
課スレト云フ此ノ税率ヲ比例税率ト云フ、比例税ニアリテハ税源若ク
ハ課税物件ノ大ナルニ從ヒ租税額ニハ差ヲ生スルモ租税ヲ負担スル割合ハ
等ニ公ハナリ、然レニ累進税ニ於テハ税源課税物件等カ大ナルニトニ從ヒ
税率高クナルカ故ニ税源ハ絶対的ニ増加スルノミナラス相對的ニモ増加ス
故ニ税源若クハ課税物件ノ大ナルモノト小ナルモノヨリ割合ニ大ナル負担
ヲナスコト、ナルナリ、累進税ハ犠牲性説、庶分租税説ヨリ云ハ最モ合理
的ノモノナリ、累進税ハ社会主義者盛シニ之レヲ唱ヘ、財產階級ヲ攻撃スル武
器トナセトモ財政学者ハ學理上ヨリ之レヲ唱ヘ、資本家ヲ敵トスル動機ヨリ
唱フルニアラス、犠牲性説ハ租税ノ根據ヲ明カニスルノミナラス公平ナル租

税分配ノ標準ヲ示スモノナリ、公平ナル課税トハ租税カ各人ヲシテ同一ナ
ルヲ條ニ於テ犠牲性ヲ公ハシメ各人各一額ニ負担ヲ感セシムルモノナリ、コ
ノ主旨ヲ貫徹セントセハ比例税ハ當ヲ得タルモノニアラス、食者ハ之レカ
タメニ多ク、必要費ヲ割キテ租税ヲ負担シ富者ハ余レル所得ノ小部分ヲ割
キ租税ヲ負担スルモノナルカ故ニ貧者ノ苦痛ハ富者ノ苦痛ノ比ニアラス、
所得ノ犠牲性説ヲ結ヒ付ケ累進税ノ説ヲ確立セルハ、ロベルトマイヤーレナ
リ、彼ハ租税者ノ消費ニ及フ效果ヲ犠牲性トナス、一ノマイヤーノ説ニヨリ
累進税ヲ説明セハ次ノ如シ

人ハ種々ノ慾望ヲ有ス、其ノ慾望ハ強サニ於テ同シカラス、人ハ先ツ慾
キモノヨリ之レヲ滿シ次第ニ弱キモノニ及フ故ニ所得減セハ先ツ最も弱キ
慾望ヲ若シ如ハ次第ニ強キモノニ及フ、而シテ租税ナルモノハ所得ヲ割ク
モノナル故人ハ租税額ニ相當スル額ニテ滿タシ得ラルヘク慾望即チ弱キヨ
リ強キニ至ルコトヲ慾望ヲ差シ和フ可キニ至ル、斯クノ如クニテ滿タサレ
得ヘカリシ慾望ヲ滿タサスシテ止ムコトヲ生スルナリ、之即チ租税ノタメ
ニ和フ犠牲性ナリ、租税ノタメニ和フ犠牲性ハ所得ノ大小ニヨリ異なるナリ、先